清和の王

才谷草太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
清和の王

【Ｎコード】
Ｎ３６８３Ｓ

【作者名】
才谷草太

【あらすじ】
幕末から明治維新を駆け抜けた、平成の大学生「木下健一」は、土方歳三と共に箱舘で戦死をした。だが、刻は再び彼を呼び、平安時代末期へと飛ばす。そしてそこには刻を超え、源氏軍と同行していたかつての親友であり幕末の英雄・坂本龍馬が居た。
彼らは源義経と行動を共にし、源平の戦に身を投じる。その中でやがて見える刻を巡る陰謀と、真実…。歴史の概念が、崩される時が近付く！

序章　～維新終え～

「土方さん！」
以蔵は群衆に囲まれ、押しつぶされそうになりながら叫ぶ。
胸、右腕、左脚に刀傷を負い、それでも死闘を繰り返す以蔵は右に居る筈の土方を気に掛けると、新政府軍に囲まれた渦の中から声が聞こえる。
「岡田！　此処に居る…左腕をやられた！」
以蔵自身も次々に迫る敵に翻弄されつつ、土方の元へと向かう。しかし、そこに居たのは左腕を失い、腹を槍で貫かれた土方の姿だった。

「ほうか…蝦夷でそんな事があったがか…」
袴を履いた大男は朝陽を腕組みしながら見つめていた。その傍らにも、同じように一人の男が立っていた。大男は懐かしそうに目を細め、口元をキュッと結んだまま、しばらく無言の時が流れた。
「刻の意志じゃったら、仕方無いが…ワシが見た未来と変わってしもうたがか」
「それを言われると、私は返す言葉が無いですね…。貴方を斬ったのは私ですからね」
顔を伏せ、口を閉ざす男に向かい、隣に立つ大男はニヤっと笑い言う。
「いかんちゃ。おまん、やるべき事をやったまでじゃろ？　何を躊躇うがじゃ…ワシは後悔などしちょらせん。剣さんに斬られるなら、仕方無いき…刻がそれを望んだんじゃろぅ？　友に斬られてワシは本望じゃきのぉ」
大男の言葉に、傍らに立つ男は苦笑いを浮かべた。

「こんな所においでたか、御二方。そろそろ出陣準備が整いますぞ！」
二人の背後で、白い布を頭から被った別の、法衣を着た大男が声を掛ける。
「分かったちゃ、今行くき！」
大男は大きく笑いながら、朝陽に背を向けて歩いた。
刻は、再び動き出す。

龍馬との再会、源の元に

木漏れ日の中、気だるい朝を迎えたように寝返りを打つ。
何時頃だろうか…随分寝た様にも、つい先ほど眠りに就いたようにも感じるひと時を、布団の中で過ごす。陽の温もりから、恐らく昼近く…健一は固い布団の中で、ゆっくりと目を開けた。

「まだ…戻って無いのか…」
疲れたように呟き、その見上げる視線の先には板張りの屋根が見え、廃屋なのか所々穴が開き、そこから健一の顔に陽が差していた。
左腕で目を隠す様に、ゆっくりと欠伸をして身体を起こすと、ボロボロの…正しく廃屋と呼ぶにふさわしい家が目に入る。
「箱舘…じゃないよな…。確かにあの時、俺は…」
戊辰戦争での出来事を、俯き目を閉じて思い返す。確かに自分は死んだ。土方歳三の傍らで、倒れた自分を覚えている。となると、刻を超えたと言う事になる。

「参ったな…、この先どうすりゃ…」

勿論、顔見知りが存在するとは限らない。幕末～明治初期であれば何とかなるかも知れないが、それ以外の時代では迷子と言うレベルの話では無くなる。
健一は頭を掻きながらブツブツ言ってると、背後…枕元でクックックと笑いを堪えている声が聞こえ、驚き振り返る。

「……！」
健一は言葉を失い、指差したまま固まる。

「久しぶりじゃの、剣さん…いや、以蔵殿かいの？」
胡座で腕を組み、ニヤニヤと笑う男は、モジャモジャ髪を後頭部で束ねた大男。胸には薄ら汚れているが『桔梗』の家紋が入っている。

そう、坂本龍馬、その人である。

「龍さん！！　本当に龍さんか！！」
健一は驚きつつも涙を流し、いきなり龍馬に抱きついて大声を上げて泣き出す。
「なんちゃ、気味悪いぜよ…離れんかい」
龍馬は抱きつく健一を、苦笑いを浮かべながら全力で引きはがし、無邪気な笑顔へと移る。
「おまんもこの刻に来るちょわ、意外じゃったのぉ～」
引き剥がされた勢いで布団に倒れた健一は、グチャグチャの泣き顔で言う。
「やっぱり…生きてたんですね…良かった、良かった…」
「これを生きちょる、っちゅうかは別じゃが…まぁそれなりに元気にしちょる」

龍馬は大声で笑いながら、泣き顔の健一を見つめ、自らの身体をポンポンと叩き健在を示す。

その大きな笑い声で、廃屋に一人の大男が入って来る。

「坂本、如何致したか…おぉ、御友人が気付かれましたか！」
その大男もまた大声で笑顔を浮かべ近寄って来る。
頭には白い布を被り、結った紐を頭に巻いて止めている。着ている服はまるで坊主の法衣。大きめの珠をあしらった様な長い数珠を、まるでネックレスの様に首から下げている。

その表情は厳しくもあるが、笑顔は柔和で、印象としては龍馬に近い。

「弁慶さんかぇ、ようやっとお目覚めじゃ。足止めして悪かったの」

龍馬がその男に向かい、声をかける。そしてその発言に、健一は度肝を抜かれた。

「ベンケイ…弁慶！？？」

泣き顔の健一は、驚愕の眼差しを大男に向けた。そして、呟く健一にその男は不思議そうに言い放つ。

「如何にも…弁慶であるが…拙者をご存知か？」

ご存知も何も、武蔵坊弁慶を知らない大学生が居るだろうか。彼が生きていると言う事は、平安末期…平家と源氏の時代。何と言う事だと、頭の中を整理しつつ、感情をゆっくりと沈めて行った。

「武蔵坊弁慶殿……源九朗義経殿も…？」

その言葉に、弁慶は龍馬を見て再び笑う。

「成る程坂本の言う通りで！　その目は万物を見通す神通か！」

健一は、今自分が居る時代を頭に叩き入れ、その上で目の前の偉人・武蔵坊弁慶を見つめる。

弁慶と龍馬のツーショットなど、有り得ない光景…。何故か胸の奥から熱い魂が沸き上がって来る。更に此処に源義経が加わるなんて、どれだけの豪華布陣だ…。

泣き顔だった男は、既にワクワクした子供の様に目の前の二人を眺める。

「しっかし、ワシらにこの男が着いたっちゅう事は、万の大群に値するがじゃ。大将に朗報ができたがやろ」

龍馬は立ち上がり、弁慶の肩をグッと掴んで外に出る。

その言葉に、健一は一瞬にして頭が覚める。

「龍さん…？　ちょっと待って！　まさか源氏に！？」
慌てて膝を立てて右手を差し出し龍馬を呼び止める。そしてその言葉に呼応するように頭だけを向かせて言う。

「そうじゃ、ワシ等はこれから鎌倉に向かい、頼朝殿に進軍の許可を貰いに行くがじゃ」

源平合戦……そう呼ばれる戦。
健一は、その中に放り込まれた事を、改めて理解せざるを得なかった。

源九朗義経、登場

「龍さん…ここは何処なんです？」
健一は先行する龍馬に追いつき、声を潜めて聞いた。それを後ろよりただ黙って見つめる弁慶。
「奥州じゃ。ワシ等の大将である義経公の兄上が、相模・甲斐辺りで挙兵し、ワシ等ぁはそこへ馳せ参じるっちゅう訳じゃ」
「奥州…？」

健一は、かつて自らが幕軍として敗走をしていた地域の名に、一瞬の驚きを見せた。無論龍馬はその空気を感じ取っていたが、知らぬ素振りを貫く。

「剣さん…で、エエがか？　ワシは歴史に明るぅない。この先どう行動したらえいがかは、おんしに任せてエエがか？」
「私も、この時代に詳しくは無いですよ…ですが、龍さんが行動を起こそうとする時、目眩が起きた事はありませんか？」
健一…剣一も源平に詳しい訳では無いが、刻を変えない為にどうすれば良いかは分かっている。
「おぉ、あるちゃ！　後ろの大男と会ぅた時、戦うつもりじゃったが…目眩で立って居られん様になってしもうたがじゃ！」
龍馬は突如興奮し、両手をガバっと広げて剣一に訴える。その様を後ろより見ていた弁慶は、静かにクスリと笑う。そしてそれに気付いた龍馬は、後ろ向きに歩きながら言い放つ。
「あの勝負は着いちょらんき、おまんの勝ちでは無いがぞ！」
「貴方は無邪気な子供の如く…ですな」
弁慶も肩に法杖を担いで、口を開けて笑いだす。

「くそう。何も言えんちゃ」
苦笑いをしながら再び前を向き、剣一に改めて問う。
「で…そん目眩がどういたがじゃ？」

「覚えて置いて下さい。刻を変えようとした時、我々には目眩と似た…恐らくは時間の揺れに襲われます。変化を嫌うのであれば、その時は大人しくするべき。それでも尚、行動を続ければ…」
「続ければ…？」
「時間の揺れから弾き出され、刻を守る側から刻を乱す側へと堕ちます」

暫く無言で歩いた龍馬は、「なるほどのう…」と呟いて腕を組んでいた。恐らく理解できていないだろう。

「御二方。刀を」
背後から声を掛ける弁慶。
龍馬はその言葉に素直に従い、それを見た剣一もそれに従い、右腕へと持ち替える。

「坂本殿か…ご友人が目を覚まされましたか」

立派な柳の元には、下半身を甲冑に身を包んだ男が立っていた。
身長は、恐らくこの当時としても小さい方だろう。背中には身体に似て小さな弓を背負っている。
色白で、目は切れ長。ニッコリと笑う表情にはまだ幼さが残るが、笑顔の中で見える口元には、やや大きめの前歯が目立つ。
美男子とは言えないが、愛嬌のある憎めない表情…。

剣一は、チラッと隣の龍馬と、背後の弁慶を見遣る。

その様に気付いた色白で愛嬌のある男は、笑いながら言う。

「失礼した、我は源義朝が九男、源九朗義経と申す」

剣一には衝撃だった。色白は良いとしても、女性に見間違えられる程の美男子と聞いていた筈の彼が…愛嬌があるのは良いが、対極の存在に近い。

『弁慶さんは彼を見て、伝説通り女性と思ったのか??』

思わずチラリと後ろを見る剣一。それを見て龍馬がニヤッと笑う。

「どうしてお二方は、九朗殿とお会いしたら拙僧を見るのか…」

どうやら龍馬も同じリアクションをしたらしい。剣一は慌てて義経を見て、片膝を着く。

「申し遅れました。かつてこの坂本と共に剣の修業をした、……木下剣一です」

どう名乗ろうかと考えたが、敢えて本名（文字は違うが）を名乗った。

「其の方、木下・岡田・浅野と、大層な数の名を名乗っておった様ではないか」

義経は愉快そうに笑うが、その目は確かに射抜こうとしている獣の目だった。

「友の為、名を偽らざるを得ない事もあります」

「友の為？　其の方は友の為に生きて来たと申すか？」

「友の為であらば、自らの為。……かつての友は、御身を果たしながらも、義・仁の為に生き抜いて居りました」

「義……仁…」

義経は繰り返す様に呟く。
「儒教の教えでありますね」
流石、腐っても仏教徒である。博識の弁慶が口にする。
「坂本がどのような経緯で、あなた方に従事しているかは存じませんが、友が信じて従うのであれば、我が身も友と一つ」
剣一は目を閉じ、ゆっくりと口にする。
ここに飛んで来た。そして龍馬と再会したのは刻の意志だろう。そう感じていたからだった。

「どう思う、坊」
義経は二人の背後に立つ弁慶に問う。
「坂本殿の言葉によれば、その人格に問題は無く、更には先程の受け答え。加えてその神速と言わしめる戦闘術…。我等の力になれば総大将のお役に立てるかと」
弁慶の言葉に、義経も頷きながら考える。
「僅かであっても力は欲しい…。坊、坂本殿とこの御方…任せても良いな？」
「御意」

「厄介払いが上手いの、九朗殿」
龍馬は怖れもせずに大声を上げて笑う。それに釣られて弁慶も口元を緩めるが、その状況に付いて行けない剣一だった。
「厄介払いが上手ければ、もう少し早く坂本殿を払っております」
どうやらこの程度の冗談は義経にも通じるようだ…最も、人の懐に飛び込む天才である、龍馬だからこそだろう。
「では、木下殿も正体に戻った所で…我々も参ろう」

義経はそのまま上半身の鎧を、配下の者に着けさせ出した。

だが剣一はまだ知らない。この先何処に行くのか。源平合戦のどの場面に自分が居るのかを。

弓名人と居合

治承四年（一一八〇年）八月。源頼朝は亡き父義朝の仇を討つ為、更には源氏復興の為に挙兵した。

義朝は平治元年（一一五九年）十二月に起こった『平治の乱』に於いて平清盛との戦に敗れ、幼かった息子達は島流しにあっていた。その息子達の中に、頼朝・義経が居た。

その後の清盛は後白河天皇を政界から追放し、政治の中枢に権力を求め、これを掌握（治承三年の政変）。

更に清盛は次期天皇として、当時まだ幼かった安徳天皇を推挙。そのまま即位という事になり、当時即位争いをしていた以仁王が納得できぬまま、清盛等の策謀に呑まれて行った。政権争いは止まらない。以仁王は、まだ若すぎる安徳天皇の即位を清盛の野望とし、廃位・新政権樹立を計画。その令旨は全国各地の源氏を筆頭にした武士に出た。

「平氏、とはそこまでの力を掌握しているのですか…」

馬上で剣一が尋ねると、弁慶は口を歪ませて答える。

「力は我が野望の為に使うべきに非ず…です。清盛一派は天皇即位に直接介入し、政権を手中に収めております」

「それを阻止するために、ワシ等ぁはこうして総大将頼朝公の元に馳せ参じちょる訳じゃ」

龍馬も続いて口にする。

政権争い…。どの時代も血生臭い野望に充満していると、剣一は

溜息を洩らした。

「今、我等は賊軍という立場になっています。以仁王殿の挙兵に併せ、兄上も挙兵し、源氏復興をさせねば我等は罪人としての生涯を送ってしまいます」

先頭を行く義経は、振り向かずに言う。

「それは、こちらの立場でのお言葉でしょう…。あちらからすれば、この戦に負ければ賊軍と成り得る。立場変われば正義も変わります」

剣一は、かつての経験から痛いほど分かっていた。

「平氏の中にも、清盛に反している勢力は多い…今は、その勢力の暴発を食い止めるが先決にあります」

弁慶は、静かな口調で剣一を諭す。

夏が過ぎて行こうとする頃、一行は那須へと入っていた。

場所は那須岳。

野鳥が舞う山中で、一人の若者が弓を構えていた。その眼光に鋭さは無く、無気味な程の落ち着きと静けさがあり、狙うその身体は周囲の自然と一体化している。

若者は、細く息を吐きながら、弓を更に絞り、右手を弦から離す。

ピュウっという空気を切り裂く音がした後、鳥の悲鳴と落ちる音が響き、その若者は目を閉じて弓を下ろす。

「済まぬ。今日も生かせて貰う…」

ぽつりと言い、ゆっくりと落ちた鳥の元へと向かった。

少し開けた場所に来ると、遥かより馬に乗った大群が見える。鎧を身に纏い、数十という少数ではあるが、明らかに軍行であると見て取れた。

若者は、中でも先頭を歩く男に視線を集中した。
豪華な鎧に身を包み、その背後には三人の大男を従えている。間違いなく大将であろう。ニヤリと笑いながら、その軍行に向かい弓を構え、正面より歩み寄って行く。

「止まられい。この那須の地に何用だ！　この地は我等那須が治めておる！　戦であれば他で願いたい！」

弓を構え、静かな目付きで叫ぶ若者に、その大群の先頭は右手を上げて軍行を止める。
すると、その左脇に居た大男が馬から降り、若者に向かって来る。

「あなた…まさか那須与一殿か？」

その言葉に、若者は怒りを見せる。
「与一等と呼ぶな！　我には宗隆という名があるわ！」
宗隆と名乗った男は、ギュウと弦を絞りその男を狙う。すると、その背後に居た大将と思われる男は名乗りを上げる。
「我は源九朗義経。九…です。十一（与一の意味）で何を恥じる事がありましょうか？」
「源…まさか源氏の…？」
「我等は今より、平氏討伐への戦に向かう前に、那須神社に参拝致したく思っております。道を開けて頂きたい」
背後の僧侶も口を開いた。

少しの動揺が宗隆を襲った瞬間、目の前の大男が腰の太刀に手を掛ける。それが視界に入った宗隆は、条件反射で矢を放ってしまう。

が…放たれた矢は、その男の目の前で二つに切り分けられ、地面に落ちる。

「この距離で正確に眉間を狙えるとは…流石です」

矢を両断すると言う神業を見せた男は、宗隆の腕を褒めた。

「九朗殿…、この方に従軍をお願いしては如何でしょう？」

納刀しながら振り向くと、弓よりもその飛来する矢を斬り落とした男に茫然としている義経が居た。

「剣一殿…今の業は一体…」

平安末期に『居合術』はまだ構築されていない。そればかりか、日本刀としての形にすら、まだまともに形成されていない時代。初目見えの業が神速とは、驚くのも無理は無い。更には自らの矢を斬り落とされた宗隆も、その業に目を丸くしている。

「居合…抜刀術と称する業です。御覧の通り、飛来する矢をも斬り落とす業…」

剣一は、そうは言っても宗隆の腕前を知っており、その狙いが額にある事を理解し、かつ放つ瞬間さえ分かれば、矢が見えずとも合わせる事は可能と踏んでの行動だった。

どうやら過去…いや、未来とでも言うべきか、幕末での戦に巻き込まれた経験は、ここにも活きていると実感した。

義経と弁慶が感動と驚愕を浮かべている時、宗隆は右膝を地に付き、頭を下げて言う。

「我は家督を継ぐ者にありません…。しかし日々弓を鍛え、精進していたのも仕えるべき主を探し求める故。どうか、我を一軍に同行させて頂きたく！」

宗隆の一言の後、義経は眉間にシワを寄せながらも笑っていた。

「坂本殿を加えてからと言う物、どうにも軍行が賑やかになって行きますね…」

愛嬌のある表情を、更にクシャリと曲げて龍馬を見る。

「何ち…ワシのせいじゃと仰られるがか…。そん男に関しては、ワシは何も言うちょらんがじゃ」

龍馬は馬上で頭を掻きながら、剣一を見下ろして笑う。

「御家族は…身内の者への挨拶は？」

剣一が問いかけると、宗隆はそのままの姿勢で話す。

「先日来、戻っておりませぬ。兄が十人居ります故、我が抜けようと変わりはありませぬ」

宗隆はそう言うと、黙ったまま頭を下げ続けていた。

「覚悟はあるのだな？」

「元より」

義経は厳しい表情で問うが、宗隆もそのまま答える。

「ならば、今より宗隆の名を棄てよ。那須の与一、そう名乗るが良い…馬は持っておるか？」

「はっ…有難きお言葉。馬なればすぐに引いて参ります」

宗隆改め、与一はそのまま茂みへと駆け戻って行った。

「那須与一・武蔵坊弁慶…そして源九朗判官義経…。役者は揃ったか」

与一を待つ剣一は、少し離れた所からポツリと呟いた。

那須与一という男

与一が馬を取りに行った時、軍行は暫くの休息とした。
皆が思い思いに馬を降り、休息を取っている中で、龍馬は弁慶と義経に設問をしていた。
「エエがか…？　そげに簡単に従軍を許してしもうても」
至極当然の疑問である。勿論龍馬・剣一とて同じ状況にあり、素性の知れぬ輩も中には居る。寄せ集めと言ってしまっても良い部隊だ。そんな連中を次々に従軍させていては、いずれ内部崩壊にも繋がり兼ねない。しかも、この後に控える戦は、今や天下の政権を手中に収めようとする清盛を筆頭にした平家軍。小さな綻びが部隊の壊滅に直結する危険性は、大いにある。

しかし、弁慶は答える。
「旗色を見て離脱するならば、それを咎めるつもりは無い。敵方に就いた時は躊躇なく弓を引く」
「刃向かう者は全て敵…っちゅう事かいな…」
やれやれと溜息交じりに溢し、頭を掻く龍馬。
「ほいたら、この中で反乱が起き、義経殿の首を取ろうっちゅう輩が出たら、どうするがか？」
「その為に、拙僧が居るではないか…」
然も当然という口調で龍馬を見つめる弁慶だが、その背後で剣一が口を開く。
「裏切り者は斬る…、力により捩じ伏せる…これだから、恨みは渦を巻き戦は広がる」
その言葉に、義経が反応した。
「木下殿、何か妙案がおありか？」
「…剣一、で結構です。義経殿は、出逢って間も無い私のお言葉をお聞き下さいますか？」

その問い掛けに、義経と弁慶は言葉を失った。
「信ずる、信じないは一方のみの感情ではありません。双方…つまり、御二方が疑念を少しでも抱く限り、この方々は御二方を信ずる事は無いでしょう」
「信じて、裏切られたら如何致すか。志半ばで果てよと申されるか」
弁慶の反論に、龍馬はクックと小さく笑いながら言う。
「随分と小さい事を言うちょる。果てればそれが天命じゃと思えんかのぉ」

その後、暫く無言が続き、龍馬は腕を組み空に舞う鳥を見上げている。

「人の上に立つ…と言うのは、どうやらその様な事でしょう」
剣一が目を閉じ、左腰に差した刀を鞘ごと抜き、弁慶の足元に置く。

「義・仁・忠・礼・孝・信・智…。人を束ねる器を見せて頂きたい。今後、恐らく清盛軍と戦い抜く際には、各国を回り激戦が待っております。そして、各地を平定する上で、現地の者達を束ね、味方に就けなければなりません」
「各地で…戦…？」
弁慶はその言葉に戸惑いを見せた。
「頼朝公と合流し、駿河方面で戦をした後…戦が終わると御思いか？」
「いや…恐らくは清盛軍が攻勢へと出て来るでしょう」
義経は理解している様だった。が、現時点ではそこまでも考えが及んでいない様子であり、右手を顎に付け考え込みだした。
「何の為に兵を挙げ、何の為に戦うか…我々武士団は、その志を

見ています。平家に不満を持つ者達が徒党を組み、集まっただけであれば、志無き大将へもその切っ先は向けられるでしょう」

「先見の目……か。成る程」

弁慶は感心したように龍馬を見る。

「……剣一殿、軍師となっては頂けぬか？」

義経の提案は、余りにも唐突であった。

「坂本殿の仰られた通り、先見の目をお持ちの上に、人心にもお詳しい。我が軍に従軍して頂けるのであれば、宜しくお頼み申したい。無論、我も大将として貴公の言う成長をするつもりだ…如何か？」

その唐突な依頼に、剣一は戸惑った。これが刻の意思なのか、それとも歯車が狂いだしたのか…どちらにしても、源氏の勝利に終わらなければ、歴史を変えてしまう。それ程の重役を担えるのか。

江戸末期の様に、歴史に深く介入すればどうなってしまうのか…これが此処に居る宿命なのか。

「今すぐに、御答えはできません…。暫く、考えさせては頂けませんか」

剣一には、それが精一杯の返答だった。

「我を、従うに値する者かを見極める…、と言うのですね？　分かりました」

義経はそう言うと、剣一に対し頭を下げた。そして、その様子を後方に居る武士団も見つめていた。言葉は聞こえずとも、大将が一人の男に頭を下げ、且つ笑顔で居る。更には剣一も頭を下げ、礼を尽くす。そして、龍馬と弁慶も互いに頭を下げる。

那須の高原に、爽やかな風が吹き抜ける。

「お待たせいたしました！」

遠くから馬に跨った与一が、大声で叫びながら戻って来た。そして、義経の少し手前で馬を止め下馬し、そこから走り寄って来る。

「遅くなり申し訳ございません。少々馬が離れておりました故…」

「与一、其の方の弓の腕前は、先んじて見せて頂いたが…改めて我らに見せてはくれぬか？」

義経は、多少被り気味に願い出た。更に続け、

「今後、お主に背後を委ねる事も多々あろう…。腕を信じれるかどうか、我が目で知っておきたい」

大将の背後を任せられるのは誉である。しかし、出逢ったばかりの者をそこまで信ずるとは、大丈夫なのか…それは与一本人も疑念を抱いた。

「我が…大将殿の背後を…で、ございますか？」

「思い違いをするな。大将は我が兄頼朝公である。更には御君（天皇）である」

義経は声を張り、言った。その言葉は背後で休息を取る者達へも聞こえていた。

「義・忠の元、智を集結し、清盛軍を討つ事こそ我らが天命と心得よ。私欲に溺れ、戦場で秩序を乱した行いは一切禁ずる。隣の者を助け、背後の者を守り、私利を考える事を禁ずる」

義経はそう言い放ち、剣一を見る。

「信ずる事から生まれる絆を、絶やす事無く」

その言葉を、与一は噛み締める様に自らも呟き出した。

「家督を継げず、戦で名を上げたいだけであれば、従軍は許せぬ。大義を見出し、自らの忠を尽くせる者となる為に、我と共に有れ」
「御意に御座います！」
与一は更に頭を下げ、ゆっくりと立ち上がりながら背中に負った弓を取り、腰に付けた矢を二本取り出す。
「我が弓法、御覧あれ」
与一はそう言うと、天空を狙い真上に一本の矢を放つ。その速度は速く、風を裂く音を纏いながら舞い上がる。風に負ける事無く、垂直に放たれた強い矢は、次第に力を失い風に流され出し、落下へと変わって来る。並の者ではそこまで打ち上げる事すら困難であろう。
澄み渡った那須の青空の元、遥か天空に上った矢は、風に煽られて流されて行く。

しかし、与一は既に二本目の矢を構えており、落下を始めた矢に向かい、ピュウと音を立てて放つ。
一本目の矢が風に流されているのを見、上空の風の状態を読み、二本目を放ったのだ。

野党の中からどよめきが起こる。

空から戻った一本目の矢が、二つに折られていた。

「矢を射抜いた…と言うのか…」
弁慶は信じられぬ、という表情で、低く声を出した。
「ほほぉ…面白い事をする男が、また一人出て来たのぉ」
龍馬は大きな体を、ピョンピョン弾ませながら、落ちて来た矢の元へと走って行く。
「風を読み、動きを読めば当てられぬ物は御座いません。ただ一

人を除いては…」
義経に向かい、再び頭を下げる与一は、チラリと剣一を横眼で見る。
「私を射抜くなんて事、今後は止めて下さいね…」
剣一は苦笑いをしながら与一を見る。そして、義経・弁慶はその様を見て、愉快そうに笑う。
「剣と弓の神が集い、更には風雲を呼ぶ龍が戯れなさるか」
「八幡大菩薩の縁…心強くありますね」

その頃、龍馬は折れた矢を拾い、野党の中へと混じり談笑を始めていた。
「どこに居ても、あの人は溶け込むのが上手いな」
剣一は笑みを溢しながらも、龍馬のその性格こそ今後の源氏に取って最大の武器になる事を確信した。

富士川の大軍

治承四年九月。以仁王の令旨により平氏討伐の令が下ってからという物、各地の源氏が挙兵していた事は前にも触れたが、頼朝が挙兵し、関東諸国を回る間にその軍勢は更なる勢力を吸収し、膨れ上がっていた。中には平氏の名を名乗る者も大勢居たという。そして十月六日、本拠地鎌倉入りをした頼朝の軍勢は数万にまで達し、一大勢力となっていた。

時を遡る事九月一日。以仁王の令旨に呼応し、頼朝が挙兵という報せを受けた平清盛は、かつて情けを掛けた稚児の反乱を納めるべく、追討軍を派遣していた。が…平家側が京を発ったのは二十九日。平維盛、忠度、知度、忠清を中心とした源氏追討軍だったが、その出陣の日を「大安にするべきかどうか」という問題で揉めに揉め、結果出陣の遅延という大失態を披露している。

その間に、頼朝の軍勢以外にも、甲斐では甲斐源氏、信濃では源義仲（木曾義仲）が挙兵していた。

そして平家軍も頼朝同様に、進軍しつつ各地の武者をかき集めて七万にも上る大軍になるのだが、この時西国は食糧難であり、十分な兵糧を賄えず、士気の低下に繋がっていた。

その様な背景の元での十月二十日、両軍は富士川を挟み出会う事となる…のだが、頼朝が対岸に見る光景は、戦を控えた軍のそれでは無かった。

西の岸には、兵糧に窮し飢えている兵士と、遊女を集め遊ぶ兵士…陽は既に沈み、静まり返っている川岸に、まるで戦場とは似つかわしく無い光景が広がっていた。

「…何だ、これは…。これが、敵か」
頼朝は愕然とし、呟いた。政の中枢を担い、これから戦をする覚悟のある者は誰一人として居ない。むしろそこに突撃を掛けるかすらも迷う光景。
源氏軍は、茫然と佇むしか無かった…。

暫く後、少し離れた川辺で鳥の大群が飛び立つ音が聞こえる。
その音は水面を走る大群にも聞こえたが、源氏側はそれを「水鳥」とすぐに分かった。
しかし、対岸の平家側はそうでは無かった。

食料に窮し、七万にまで膨れていた大軍は逃亡が相次ぎ、この時既に二千にまで減っていた。その事を含め、一部の者のバカ騒ぎにより士気が低下していた兵士は、その音を敵の大軍と誤認していた。
末端の兵士達から動揺が波紋の様に広がり、更には混乱する者が現れ、鎧を棄てて逃げ出す者が出て来る。またその逃げる際に、他人の馬に跨ろうとする者も出て来て、内部で混乱が広がる。その隣では杭に繋いだままの馬に跨り、グルグルと同じ所を駆けまわる兵も出て来る。
混乱が混乱を呼び、逃走を図る兵士の馬に蹴り殺される遊女・兵士も続発。

それを見ていた源氏軍はこれを機に突撃を、と逸る者が出るが、頼朝は混乱が静まるのを待ち、疲弊した上での追い込みを掛ける事を決定。これが功を奏し、翌二十一日の朝まで続いた混乱で、平家軍は撤退して行った。

頼朝軍は何もせず、ただ見ていただけ…では無い。実はこの時、彼らの背後から平家軍が挟み撃ちにしようと迫っていたのだが、そ

の大軍勢に怯み撤退をしていたのだ。

そして、この富士川の撤退にはある側面があった。

それは頼朝軍が富士川に到着した二十日の夜の事だった。

頼朝軍よりも少し上流では、ようやく義経軍も二十騎程を率いて富士川に辿り着いていた。

義経が見渡す限りには、そこにまだ戦の痕跡は無い。報せでは頼朝軍がこの辺りに陣取っているとの事だが、その姿は見えない。

「義経殿…この先は平家軍も陣取っている可能性があります。馬を置き、音を殺し歩きましょう」

剣一は馬から降り、義経に発案する。

「そうですね。坊…いや、坂本殿。全兵に下馬と進軍の命を」

「またワシかい…まぁえいけど」

龍馬は面倒臭そうに下馬し、後方の兵たちに伝える。この軍行の最中、龍馬は兵達との会話を進んで行い、信頼関係を築きあげていた。それは義経も十分に分かっていたからこその指示。

後方の兵達は龍馬の指示に即座に従い、静かに下馬をして足音を殺す。

ゆっくりと足音を殺し、河原を進む義経軍。

突然義経が右手を高く上げ、軍を止める。

その視線の先には、恐らく平家側と思われる軍勢が見える。

「な…何ちゃ…あの様は…」

龍馬も流石に驚きを隠せない。
「あれが平家の現状です…。食料に窮する者の中でも、贅を貪る一部の者。戦場に於いても如実に出ています…」
その怒りと悔しさが、義経の拳に現れ震えていた。
「拙僧がひと暴れして参りましょうか…」
弁慶も怒りの表情を崩さず、法杖をギュッと握りしめる。

「待って下さい…」
それを冷静に止めたのは、剣一だった。
「二十数騎で突撃しては、こちらにも被害は少なからずとも出ます」
「ほう…ほいたらどうするがじゃ？」
龍馬は、ほれ来た！という表情を浮かべ、ニヤニヤしながら剣一を見つめる。それに答える様に、剣一もニヤリと笑い、与一に向かい指示を出す。
「与一殿、その手前の鳥の大群が見えますか？」
剣一は、平家軍より手前に居る、羽を休める水鳥の大軍を指差す。
「はぁ…見えまするが…？」
与一はニヤッと笑う剣一を、不思議そうに見つめ返して答える。
「では、平家軍の中の、どれでも結構ですが馬も見えますね？」
「…何が仰りたいか？」
益々言いたい事が分からなくなった与一は、更に聞き返す。

「水鳥を脅し、その直後に敵軍の馬の尻にでも、矢を放って下さい」

「何だと？？」
弁慶は驚き剣一を見る。
「ワザワザ数千の敵に突撃する事はありません。士気が下がった所に混乱を生じさせ、精根尽きた所に突っ込めば良いでしょう？

頼朝公が近くに居るのであれば、その期に乗じて突撃して参られるでしょうし」
剣一の言葉に、弁慶は茫然とし、義経と龍馬は笑顔を浮かべ、与一はそれならば、とばかりに弓を取り静かに狙いを定め出した。
「軍師・木下剣一の初陣…ちゅう事じゃの」
龍馬が呟いた直後、水鳥たちは一斉に飛び立つ。そしてその間を縫うように、与一の矢は一直線に敵の馬の尻に刺さる。
正に注文通り。
混乱に陥った平家軍は、内部より壊滅し、逃亡して行った。与一の弓だけでここまでの戦果を上げてしまっては、弁慶に出番など無かった。むしろこれから戦うべき敵として見ると、滑稽に見えて仕方なく、義経軍からは失笑が出る程の光景だった。

「たった二本の矢で、数千の大軍を退けるか…」
義経と弁慶は、剣一を認めざるを得なかった。しかし剣一は与一を絶賛する。
「いや、注文通り…流石与一殿です。あの一矢が無ければこうも見事に策は整いませんでした」
「ほうじゃ！　与一殿の弓は天下一じゃの！」
龍馬も囃子立て、それに乗じた二十数名の野党も与一を称えた。
「成る程。遅れて従軍した与一殿を、見事に輪に取り込みましたか」
弁慶は義経の横で、腕を組んで満足そうに見つめる。
「木下剣一…一つの戦果を三にも四にもする男ですね。敵に回したくは無い」
義経は苦笑いをしながら、その静かな勝鬨を眺めていた。

黄瀬川の再会と四天王

背後に雄大な富士を湛える平野部に、広大な河原を懐に抱き悠然と流れる富士川。河原に佇むと、大自然が時の流れを堰き止めるかの様に、ゆっくりと流れる。

そんな富士川の畔では、平家軍の残した馬や兵糧等を頼朝軍が見聞していた。通常であればこの様な事はしないのだが、頼朝には気がかりがあった。

いくら士気が低下しようとも、鳥の羽音で撤退するなどおかしい…。そこで、平家軍内部で何が起こったかを調べさせていた。そして彼自身は富士川から少し離れた黄瀬川に陣を張り、その結果を待っていた。

そこに、側近の土肥実平、岡崎義実、土屋宗遠が入って来る。

「頼朝殿…謁見を希望する武者が数名、陣を尋ねております。歳の頃二十前後と思われ…」

側近はその代表の者の背恰好を説明した。それを聞いた頼朝は、切れ長の目を開き、笑顔に変えて言う。

「何だと…誠か！　通せ！　恐らくは陸奥の弟…牛若だ！！」

「しかし名は九朗と申されており…」

「奴は我の弟、八人の兄を持つ牛若に相違ない！　通せ！！」

「はっ！」

頼朝の輝いた笑顔に、側近三名も即座に返答し、陣幕から出て行く。そして暫くすると五人の武者が陣幕に入って来た。その中で、ひと目で我が弟を見付けた頼朝は、涙を流して歩み寄って来た。

「牛若…お主生きておったか…」

「兄上、遅ればせながら只今推参致しました」

義経は涙を見せず、堂々と四名の側近を従えての到着。無論、弁慶・龍馬・剣一・与一が付き従っている。
頼朝は涙を止める事無く、ウンウンと頷きながら義経の肩を掴み、その身体の無事を確認するように眺め、その後で背後の側近を見る。
「牛若…そなたの従者か…よくぞここまで弟を守ってくれた」
頼朝は従者を一人ずつ眺める…が、その目は、与一と剣一の姿に止まる。
「其の方…腰に差している物は刀か…」
当時、刀の鞘は飾りが入っているのが主流であり、刀身の反りもやたら大きく反っているか、全く反りが無いか…に、二分されていた。更に腰帯に差すと言う事も余り無かった為、その出で立ちは謎めいていた。
「戦時とあり、帯刀での参幕をお許し下さい」
剣一は深く頭を下げるが、頼朝は剣一に歩み寄り、
「元より承知して居る。我の設問に答えよ」
「はっ…これは…私の業を使う為の武器にあります」
「ワザ…とは？」
頼朝がそう言い、剣一の刀の柄に手を掛けようとした瞬間、剣一は身を捩じり避ける。
「失礼ながら、この刀は我の魂。御大将と言えども、我の腰に差したまま触れるは御勘弁頂きたい」
その態度には弁慶と与一は背筋が凍った。だが、頼朝は流石にその無礼に気付き、
「それは失礼致した…。では、改めて請う。お主の魂、見せては頂けぬか？」
流石は武士の棟梁になるだけの器を持っている。その姿には弟の義経も感服した。無論、剣一も総大将にそこまで言われては、見せざるを得ない。黙って頭を下げ、ゆっくりと刀を差し出す。
「ほう…反りは少ないが、その幅は均一」

そう言いながら、ゆっくりと鞘から抜く。そして、その輝きに目を奪われる。ふっくらと盛り上がった鎬、均一の角度でゆっくりと反りかえる刀身、波紋は美しく波が浮かび、峰は少し肉厚で、五角形の断面。

「振らせて頂いてよろしいか？」

頼朝の申し出に、断る理由は無い。剣一はゆっくりと頷くと、頼朝はくるりと背を向け、細い木の根元まで歩いて行く。

「さぞ切れ味もいいであろう…」

そう言いながら、立ち木に向かい刀を振る…が、その刃は木に食い込み、振り抜く事ができなかった。

「な…何だ！」

慌てたのは頼朝とその部下達。普通ならば切れる筈の細い木に、大将の刀は阻止されている。

「がははは、いかんちゃ頼朝殿、その様な使い方では、皮しか斬れんちゃ」

豪快に笑い飛ばした龍馬に、頼朝は赤面して睨みつける。

「愚弄するか！　我にこのような棒切れを渡し、笑いに来たか、牛若！」

その怒りは龍馬や義経、剣一に向けられ、刀を剣一の足元に転がした。それを見た義経・弁慶は即座に膝を付き頭を下げるが、剣一はゆっくりと刀を拾い上げ、頼朝を睨みつける。

「浅墓…、我が剣術を活かす剣と申しましたが…」

「なに？　我を浅墓と申すか！」

「木下殿！　我が兄上であるぞ…控えよ！」

義経が止めに入るが、剣一は切先を頼朝に向け、更に言う。

「この刀は我が魂と、今は亡き友の魂が刻まれております。それを投げ捨てるなど、言語道断です」

「ほほぉ…剣さんも一端の侍になったのぉ」

空気を読まずに、龍馬は笑いながら言う。ただ与一だけがその空気に付いて来れず、オロオロと立ち尽くしていた。

「これは、御大将が振られている刀とは明らかに違います。しかし、これを使いこなせるようになれば、鋼をも切り裂く事ができます」

そう言いつつ、刀を下げて頼朝が切れなかった木に歩み寄る。そして、上段に構えて言う。

「平家軍は、恐らく徐々にこの刀の形に気付き始めています…。遅れれば、取り返しは付きませんぞ」

そう言った後、軽く刀を振り下ろすと、目の前の木は見事に両断される。

斬り倒される木を見ながら、剣一は頼朝に言う。

「この反りは徒に着けられた物ではありません。撫で斬る剣の動き…腰・腕・呼吸…それを整えねば、ただ叩くだけでは斬れません」

そう言いながら刀をクルリと回し、再び頼朝に渡し、その場に膝を付き頭を下げる。

「其の方…再び我に…」

恥を掛けと言うのか、そう思ったが、これまでの剣一の言動からその言葉を言うのを止めた。怒りはあるが、それ以上に『平家にあり、源氏に無い武器と業』を伝えようとする男に、興味が沸いていた。頼朝はざわつく側近共を睨み付け、大人しくさせた上で再び別の立木に対する。

そして呼吸を整え、先程の剣一の身体の動きを思い描きながら構える。

「腰と…腕…」

ブツブツと口の中で反復させつつ、フワッと刀を振り下ろすと、見事に木立は両断され、ガサガサと音を立てて倒れる。周辺の側近

たちは、その様を見て歓声を上げる。

「木下とやら…平家はこの刀をみな使っておるのか？」

「いえ、遠目ではありますが、まだ使われてはおりません。恐らくその形に行き着くには暫く掛かりましょう」

「そうか…おい、刀匠をここに呼べ」

頼朝は従軍している刀匠に、その刀の形状を覚えさせ、量産する事を即決した。勿論、剣一もそれに快く応じ、刀匠に見せた。

「さて…其の方、矢を見せて頂きたいのだが…」

剣一と刀匠が刀に関して談義を始めた頃、頼朝は与一を呼んだ。が、与一にとって頼朝は雲の上の存在。身体が固まり、動けない。

軽く笑いながら、龍馬が与一の右股に携える矢を一本抜き、頼朝の元に差し出す。

「かたじけない…」

頼朝も、その新鮮なまでに怖れる与一と、物怖じしない龍馬・剣一とのギャップに苦笑いを浮かべつつ、その矢を受け取る。

「牛若よ、お主あの場に居たな？」

与一の矢を見た瞬間、頼朝はニヤリと笑い義経を見る。

「…はっ…」

全てを見抜かれたか…と、義経も頭を下げて笑みを浮かべる。

「鳥を動かし、大軍と錯覚させた上に、馬の尻に矢を放ち混乱に陥れる…か。その様な神業をお主がしたのだな？」

頼朝は与一を愉快そうに見ながら、その腕を称える。

「勿体無いお言葉…」

与一はやっとその場に膝を付き、頭を下げた。
「敵の馬に刺さった矢は、こちらでも見付けておったが…平家側の矢とはまた違っておったのでな、不思議に思っておったが…これで得信できたわ」
「矢を放ったがは与一殿じゃが、その計略を練ったがは別の男じゃ」
龍馬は相変わらず能天気な態度で、ニヤニヤしながら剣一を見ていた。
「何？　牛若では無いのか？」
そう言い、義経を見るが、義経自身も笑いながら剣一を見る。
「我が軍、少数なれど…名軍師であり『居合業』という神業を使う者、一里先の馬の尻を射抜く矢の達人、百人の敵を捻じ伏せる豪僧、自陣の絆を深く結ぶ参謀が居ります」

義経の言葉に、頼朝はその従者をグルリと眺める。
「差し詰め、四天王…と言った所か」
頼朝は嬉しそうに言う。
「牛若…、今は何と名乗っておる？」
「はっ…九朗義経と…」
「そうか…。我が弟、源九朗義経。四天王と共に鎌倉へ入り、東国の平定・平家の追討に尽力せよ」
「御意に！」

富士の裾野で再開した兄弟が、遂に仇である平家討伐へと乗り出す瞬間であるが…龍馬と剣一は既に刻の中へと巻き込まれた事に気付いていなかった。

源義仲登場

治承四年（一一八〇年）、以仁王の平氏打倒令旨を受け、諸国の源氏に挙兵を呼び掛けたのは、源行家という男だった。そして、頼朝を始め源氏が立ち上がるのだが、その中には行家の甥である、源義仲（木曾義仲）も居た。

義仲が歴史の表舞台に担ぎ出された最初の事件は、信濃で繰り広げられていた。

信濃の豪族、笠原平五頼直が平家に味方し、源義仲討伐の為に木曾への侵攻を企てていた。しかしそれを察した信濃源氏の村山七朗義直は、阻止戦を開始する。九月七日の事だった。

この戦は長期戦となり、消耗の激しかった源氏方の村山は、仕方無く源義仲に援軍を依頼。するとそれに応じた義仲は、大軍を率いて向かった。

共に消耗していた戦場に、新たな大軍が現れた事で、平家笠原軍は直ぐに撤退をし、態勢を立て直しに図る。

しかし、この翌年に平家方に大事変が起きる。

治承五年二月、平清盛死去。

「平氏に非ずんば人に非ず」とまで言ってその全盛期を築き上げた、平氏の棟梁の死。既に各地では源氏方がそれぞれに挙兵し、平家討伐を進める中での棟梁の死は、大きな転機となる。

時を同じくして、信濃源氏と互角に渡り合っていた平家軍武将の城資永も死去。その家督を継いだ長茂が指揮を執り、同年六月に一万の大軍を率いて信濃へと出兵する事になる。

対する義仲軍は三千騎程。どう見ても平家方有利だった。

六月十三日。千曲川の対岸より、平家側に渡河する大軍がある。そこには多くの赤旗が掲げられており、長茂は援軍が来たと喜んで迎えた。

……平氏は赤、源氏は白の旗を目印にしていた。これが今日の紅白戦の由来になっているとの一説もある……

長茂は赤旗を見るなり渡河を許可し自陣に受け入れた。

しかし、渡河に成功したその軍隊は、城を守る本軍に接近するや否や赤旗を棄て、白旗を掲げる。源氏方の将、井上光盛の奇策だった。

遥かに劣る軍勢での奇襲で、長茂軍は一気にその数を減らして行く。そして遂には撤退を余儀なくされる。後に『横田河原の戦い』と呼ばれる戦は、こうして幕を閉じた。

戦に敗れた長茂は越後に戻るが、その求心力の弱さから離反者が相次ぎ、奥州会津へと逃亡するが、そこでも奥州藤原氏に攻撃され、没落して行く。

一方の義仲は、悠々と越前国府に入り、越後の実権を掌握。着実に東北方面の支配を強めて行く。そして、この戦の大勝利に沸き立つ北陸諸国の源氏側の反発が強くなり、徐々に平家が圧され始める。

寿永元年（一一八二年）、以仁王の遺児である北陸宮が義仲を頼って来ると、これを擁護。以仁王挙兵を継承する立場を明示し、また関東一円を掌握していた、同族の頼朝との衝突を避ける為に、彼の一派である武田信光ら甲斐源氏が進出していた南信濃への勢力拡大はせず、北陸方面への勢力拡大を選択する。

破竹の勢いに乗った義仲だったが、翌年の寿永二年からその歯車

が狂い始める。

源義広が関東の勢力争いを頼朝と繰り広げていた。頼朝は手を組み、源氏の力での統率を望んだが、義広自身はこれを拒否し、独自勢力を伸ばし始めた。更には鹿島社の所領の横領まで行い始めた。その事を頼朝は諫めるが、義広は反発。これにより両社は対立し、遂には義広が頼朝討伐の兵を挙げるが、その軍行途中で小山朝政に敗れる事となり、本拠地を失う。

その後、彼は義仲を頼って身を寄せ、義仲自身も不憫に思い庇護を与えてしまう。

この事により、頼朝との関係に不調和音が生じて行く。

寿永二年四月。平家の棟梁となった平維盛は、北陸で勢力を伸ばしている義仲を危険視し、十万の大軍を向かわせた。

両軍は越前・火打城にて激突し、この戦にて義仲は敗走する。そして撤退する義仲を追い、平家側も越中へと向かうが、般若野の戦いに敗れ、一旦後退という、均衡状態が続いた。

そして五月十一日…。義仲はこの日、昼間に小さな部隊を使い、小規模な戦を仕掛け、陽が沈むと兵を引き揚げさせる。夜中には戦をしない、という当時の常識の為、この日の戦は終わったと、平家軍は安息の時間を採る……だが、寝静まった時、突如三方から燃え盛る牛の大群が突撃して来る。

牛の角に松明を括り付け、その日に混乱した牛は不規則に走り回る。また、その牛に更なる混乱を来した平家軍は、唯一攻めて来ない一方へと逃げるしか無かった。大混乱に陥った平家軍は、その安全地帯へと我先にと逃れて行くが、そこに待っていたのは断崖絶壁だった。

次々に谷底に転落する平家軍。この倶利伽羅峠にて、平家軍は十万の大半を失う事となる。

そして平家軍大将、維盛は京に敗走。これを追撃する様に義仲軍も京に向かう。その途中の加賀篠原で追い付き、既に抗戦能力の無い平家軍を強襲。壊滅状態にまで追い込み、更には京までの道中で武士達を仲間に引き入れ、大軍となったまま京に向かう。

その状況を京で知った平家は、都の防衛を諦め安徳天皇を擁し三種の神器を奪い西国へと逃れるが、この時後白河法皇は比叡山に逃げ込み、源氏の到着を待っていた。

既に軍事力の均衡は破られた。

当初、後白河上皇は「源氏・平氏の両立の元での政治」を考えていたが、それすら叶わぬ状況になっていた。そして、平氏側の武将も清盛の死後は後白河上皇へと従う者が出始める。

七月。

義仲は比叡山の後白河上皇を救出し、京へと上った。京の都に源氏の白旗が靡くのは、二十余年ぶりの事だった。

そして三十日…公卿議定において、勲功の第一が頼朝、第二が義仲、第三が義仲と共に京に上った源行家という順位が確認され、それぞれに位階と任国が与えられることになる。

そう、中央政権は頼朝を最も信頼し、評価していたのだった。そして更に、京に大軍を留め治安維持に乗り出す義仲には、弱点があった。

この大軍は行家を始め、近江・美濃・摂津源氏と言う混成軍であり、その統率は義仲では力不足だった。あくまで棟梁は『源頼朝』

であり、それぞれがそれぞれの指揮系統を持っており、義仲の命など聞く事は無かった。
京は連年の飢饉で食糧事情が悪化している所に、大軍で押しかけ、遠征で疲労困憊の統率の執れない軍は略奪行為まで行う。そしてこれに対し、京を守るのであれば食料は必要だと開き直りまで見せ、その立場を危うくして行く。

義仲は、頼朝と違い京で過ごした事も無ければ、政治・文化・歴史の知識が薄かった。
その為、武士としては踏み込んではいけない領域に、その足を入れてしまう事になる。そしてそれは、後白河上皇と平家一門が対立した切っ掛けとなった領域…。政治だった。そして、天皇家が最も神経を遣う『即位問題』だった。

頼朝と対立し、更には後白河上皇とも対立してしまう義仲。
平家の勢力を弱めた第一人者が、没落への道を歩み出す事となる。

動く鎌倉

寿永二年九月十九日。

京での失態が続く義仲に耐えかねた後白河法王は、遂に彼らを合理的に京から外に出す方策として、平家追討の指示を出す。義仲は京での失態回復に、この指示に飛び付いた。更に後白河法皇は剣までも手渡し、その成功を祈る立場を表した。

しかし、義仲にとっての誤算が出陣した頃に起こり始める。

鎌倉の頼朝より、朝廷に申状が届く。それを見た朝廷側は大いに喜んだ。

その内容とは、「平家が横領していた神社仏寺領の本社への返還」「同じく平家が横領していた院宮諸家領の本主への返還」「平家側の降伏者は斬罪にしない」と言うもので、正しく平家から朝廷への主権回復を狙った物だった。

この内容には、頼朝の政治的観点が含まれている。

源氏の勢いを義仲に奪われ、更に関東一円の影響力すら危うくなり始めている時に、京での義仲の失態を知る事となる頼朝。ここで朝廷に餌を撒けば、関東一円の平定にも繋がる。そして何よりも、源氏の棟梁としての血脈が、逆賊であり続ける訳にはいかない。

更に朝廷とすれば、平家に握られた荘園等からの年貢が復活し、飢饉からの脱却を図れる上に、その支配権も戻って来る。

朝廷の利益と、頼朝の利益が重なった。

十月、朝廷から頼朝に宣旨が発令される。

その内容は、『東国における荘園・公領からの官物・年貢納入を保証させると同時に、頼朝による東国支配権を公認する』ものだった。

だが、同じ源氏としての戦を避ける為、その支配圏からは義仲の北陸道を外していた。

そんな大事変が起きてる頃、義仲は西国で苦戦をしていた。京までの道中は勢いがあったにも関わらず、その京での失態以降は流れが完全に変わり、水島の戦いでは配送してしまう始末。

そんな折に、『鎌倉より頼朝の弟が、大軍を率いて入京する』という情報が入る。

時は少し遡り、九月下旬の鎌倉。

宣旨の出る少し前の事だった。

「兄上…如何されましたか？」

頼朝に呼び出された義経と四人の野党…四天王と呼ばれた、弁慶・与一・龍馬・剣一もその背後に座る。しかし、そこにはウロウロと落ち付きの無い頼朝が居た。

「京に馳せ参じろ、との命が下ったのだ」

右手の親指を噛みながら、右に左にと歩き回り、眉間にシワを寄せる棟梁。しかしそれとは逆に、義経は明るい表情を向ける。

「それでは逆賊の汚名が晴れるのですね！？」

「それは良い、それは良いのだが…申状を見た朝廷は、義仲殿が西国に出ている内に、我を京へと招き入れ討たせるおつもりだ」

「何と…木曾殿を、で御座いますか！」

驚き口を開いたのは弁慶だった。

「源氏棟梁としての復権は望んでおるが、我が動くとなれば、大軍が京に入る事になってしまう。折からの飢饉に、義仲殿の軍隊が流れ込み、更に我が動けば京は壊滅する…何か妙案は無いか、各々方」

頼朝はその視線を剣一に向けた。どうやら黄瀬川での一件で、軍

師として見られている様だった。が、胡坐をかいて座る龍馬が喋り出した。

「頼朝公が動くまでも無いがやろ」

その表情は呆れ返っていた。その程度で態々呼び付けるなと言わんばかりである。

「ここに居る九朗殿に軍を率いて上洛させ、直接の戦の意思が無い事を訴えるがじゃ」

「我に…兄上を差し置いて上洛せよと申されるか！」

「誰が最初でもエエがやろ…」

龍馬は更に面倒臭そうに答えるが、剣一は龍馬に助け船を出す。

「京に入らずとも、この件は終わると思いますよ？」

頼朝が待っていた男が、ようやく口を開く。その隣で龍馬はニヤッと笑って言葉を待つ。

「まず、先んじて申状を出された事に対しての、朝廷よりの宣旨を待ちましょう。恐らく朝廷は乗って来る筈です。あの申状に乗る、と言う事は事実上の東国支配権を与えられると言う事ですから、その後、大軍を率い上洛する、と朝廷にお伝え下さい」

目を輝かせながら聞いていた頼朝は、ここで剣一の言葉を遮る。

「待て、大軍は宜しく無い…。先も申した通り、京は飢饉の…」

「はい、ですからあくまでも単なる『方便』です。実際には少なく、更に京には入りません」

その言葉には、一同が言葉を失う。

「木曾殿は復権の為に西国に赴き、義経殿上洛を聞き付けると、軍を二分し京へと舞い戻るでしょう…」

「大軍で無くとも、勝てるっちゅう事かいな？」

龍馬が身を乗り出す様に剣一を覗きこみ、聞く。
「源氏同士の戦は避けねばならぬのだ…」
頼朝がどっかりと床に座り、言う。
「もう、既に止まらぬ流れになっております」
剣一は目を閉じて言う。
「…どういう事だ」
「大殿…木曾殿は既に源氏を忘れており、我が身の立身を狙っております。その機に鎌倉が立った事を聞けば、諸国の源氏は棟梁に着きましょう。その時点で木曾殿は逆賊です。そして焦った木曾殿は手段を選ばず暴走を始めます」
「ま…待て、待たれよ！　むざむざ同胞を逆賊と貶めると申されるか！」
「敵は平家。同胞を纏める事ができず、棟梁が務まりまするか！　平定の為、我が身の保身・立身のみを企てるようであれば、この先に平定はございません！」
遂に口を開いたのは、義経だった。剣一の策を聞き、義仲を討たねば源氏すらも朝敵となってしまう可能性がある事に気が付いた。が…この言葉が、後の義経の身に降りかかる事になるとは、誰も想像をしていなかった。
義経の言葉の後、頼朝は口を固く結び、四天王と弟を見遣る。
「棟梁として…か。弟に諭されるとはな…」
頼朝は苦笑いを浮かべ、呟く。が、それに継ぎ剣一は更に言う。
「鎌倉方からの軍で無ければ、木曾殿のお立場は更に朝敵と成り

得る事も…」
その言葉に、頼朝はすぐに気が付いた。
「成る程。ではそちらの工作は、こちらで進めようぞ」
源氏の棟梁として。
弟にそう言われ、覚悟を決めた頼朝に迷いは無くなっていた。そして本来の政治家としての思考に切り替わっていた為、策略を巡らせる事が安易になっていた。

この時から、朝廷と頼朝は固い絆が結ばれ始める。
同胞の裏切りと策略によって…。

鎌倉の策謀

「頼朝殿はどうするおつもりじゃろうの…」
龍馬は頼朝が行う工作という言葉が気に掛かっていた。源氏の棟梁と言う男が、どのような策略を用いるかと言う興味と、それ以上に嫌な予感もしていた。
「恐らく鎌倉殿の意向は間違い無いと思われるが…剣一殿、察しは着きますか？」
弁慶は心配などは微塵も感じていない様子で、その実を剣一に聞いてみた。
「…根回しでしょうね」
ポツリと言う剣一は、どこと無く不安そうな目を見せている。そして、それに真っ先に気が付いた義経は剣一に更に問いかける。
「根回しとは？」

秋晴れの鎌倉。
鱗雲が空を薄く覆い、陽の光も穏やかなこの季節。しかし、その奥に見える野望を剣一は感じ取っていた。
頼朝の居た屋敷より出て、五人はそれぞれの家（と言っても、義経以外は空き家を割り当てられているだけだが）に向かっていた。
質素な武家屋敷が立ち並ぶ道を、やたら大きな男三名を、小柄だが威厳に満ちた男が引き連れ、その最後尾から申し訳無さそうに色黒の男が着き従っている。

「恐らく…木曾殿を牽制する為に、頼朝公自ら軍を出すのは、義経公…貴方と共に鎌倉を離れる一行のみでしょう」
「それは承知しておるつもりだが？」

義経は不機嫌そうに答える。
「……その裏に…政に関しての策謀が感じられます」
剣一の言葉には、弁慶と与一も驚いた。
政治を行うのは天皇。そこに口を挟む事を良しとしない頼朝が、現在挙兵して平家を討たんとしているからだ。そんな頼朝が政に関しての策略などとは、到底想像ができない。
「兄上に限って…その様な事は断じて無い！」
義経は小声ながらも、力強く否定をし、自らに与えられた屋敷へと向かって歩くが、その背に剣一が追い打ちを掛ける。
「ならば、鎌倉方以外の援軍を何処より用立てると？」
「それは其の方が囃子立てた結果で御座ろう！」
足を止め、振り向かずに言う義経。その背中を見る弁慶は心配そうにソワソワしている。熊の様なお男が、手を宙に漂わせてうろたえる姿は、何とも愛嬌が感じられ、龍馬は思わず笑みを浮かべる。
しかし、そんな二人を無視した剣一は、更に言う。
「援軍を帝に出させる…それは確かに私の言葉に乗ったからでしょう」
その言葉を聞いた与一と弁慶は、顔を蒼白にして驚いた。
「帝に…木曾殿討伐の軍を出させると仰るのか！！？」
「ええ、恐らく朝廷は頼朝公上洛を望んでらっしゃいます…。そこに実弟の義経公が上洛となれば、その不足を自ら補う事は進んで…」
「其の方が企てを…兄上に持ち掛けたのだろう！」
義経が大声で言葉を制した。拳を握り、怒りを堪えているが押さえきれぬ感情が出て来ている。

その態度を見て、龍馬が口を挟む。

「情けないがぞ、義経殿」

あっさりと、しかし重みを持たせた言葉を放つ龍馬に、慌てて肩を掴んで制止に入る弁慶と与一。

だが、龍馬は彼らを振り解き、義経に歩み寄って睨み付ける。

「おまんの軍師は誰じゃ…。こん先、誰の策を信じ、命を乗せて戦をするがじゃ」

その身長差は大人と子供ほどあり、義経の頭上から腕を組んで睨み付ける龍馬。

「剣さん、続けてくれんかのぉ、おんしの考えっちゅう物を」

龍馬は義経を睨んだまま、剣一に続けるように言う。

暫くの無言の時間を五人が過ごした後、剣一はゆっくりと話し始める。

「朝廷は恐らく援軍を要請しますが…それは源氏では無いと思います。頼朝公が奪い返すと約束した荘園を盾に、各僧侶を始め、野党連中を引き出すはず…。我々はその者達を取り込み、木曾殿と戦をせねばなりません」

「つまり、源氏が平氏を討つ…という略図には成らない…？」

不安そうに聞く与一。

「無論、我々には源の名を継ぐ武士が他にも着くとは思いますが、朝廷にそのおつもりは無いでしょう…」

「そこに、何故兄上の政略があると申すか…」

龍馬に正面を奪われ、怒りを抑えつつ剣一に聞く義経。そして、その回答次第では主に代わり、何かしらの行動を起こそうとする雰囲気の弁慶。

「源氏を束ねる…その事に執着し、頼朝公個人が正面に出る…。そうなってしまえば、それ以外の源氏は認める事は出来ない…。朝廷も武士を纏めるのは頼朝公が好ましいと思い始めている」

剣一の言葉に、義経も事の裏を理解できた。

「まさか…朝廷への根回しとは、源氏を出させぬ為の…」

「恐らくは。官軍は頼朝公自身のみ…。逆賊から返り咲き、その存在を誇示するには好機。私は朝廷よりの命で、各地に散る源氏を纏め上げる事を含ませましたが、恐らくその実現は無いでしょう」

「源氏同士の戦は…朝廷は避けたいきのぉ…」

「拙僧は…そこまでの読みは出来ませなんだ…」

「ワシは良く分からんぞ…」

与一は一人、納得できずに龍馬を見上げていた。

「この上洛は、断った方が良いと思うか?」

義経は龍馬の体を押し退け、剣一に問う。その表情を見た龍馬は、素直にその身を外し、剣一の隣へと戻る。

「いえ…。断れば、他の者を行かせるまででしょう…」

「兄上を御す法は無いのか」

その言葉に、剣一は眉間にシワを寄せる。

無い事もない。無論、それが正史である…が、それを行う事へのリスクは大きい。歴史を変えずにそれを行う策があるのか…?剣一は自問していた。

「義経殿、京へと向かいましょう」

剣一は意を決して口を開いた。
「策があるのか！」
「私は義経軍の軍師。策も無く、戦場へと主を向かわせる程の無謀者ではありません」
「聞かせてはくれぬか…その策を！」

剣一は義経を見て、ニヤッと笑う。
「木曾殿を止め、平家を討つのです」
「それでは…兄上を御すには至らぬのでは…」
「天下二分。東と西に均衡させるのです」

それを聞いた龍馬は、驚きを口に出す。

「三国志…かえ！　驚いたの、おんしは諸葛亮になるがか！」
義経達は何の事か分からない。が…弁慶だけは薄らと分かっていた。無論、大陸史に明るい訳ではないが、軍師としての存在であれば聞いた事がある。
だが、剣一には天下二分など実現させるつもりは無い。歴史を崩壊させる事はできない。龍馬もそれは知っているが、恐らく只で終わるつもりが無い事は気が付いていた。

「さあ、義経殿。奥州より従えし配下の兵を集め、出陣準備を進めましょう。鎌倉軍総大将は、義経公です」
ニヤッと微笑む剣一と、それに大いなる希望を見出した与一・弁慶は、唸りと共に歓声を上げた。

歴史の扉が、そして『刻』の扉が、静かに開いた事には誰も気付

かぬままに、この時、源氏が動き出した。

義仲の苦悩と挙兵

後白河法皇を救い出し、この頃の源氏を盛り立てていた立役者は、紛れも無く「源義仲」だった。
主役は平家から源氏へと移り変わり、その中でも「義仲」を育て上げた刻の流れは、無情にもその主役を転落させる。

寿永二年七月の末頃。
京を追い出された平家軍は、大宰府へと向かっていた。清盛の生きていた頃、大宰府は対宋貿易の拠点としており、その窓口となっていたのだ。
行く先の無い平家一門は、その大宰府に到着した。しかし、そこには平家安住の地が、既に無くなっていた。勅命にて「平家追討」が出されており、彼らは安徳天皇を連れ、更なる逃亡をするしか策が無くなっていた。
転々とする平家一門は、遂に九州を離れざるを得なくなり、瀬戸内へと漕ぎ出す。

彼らが行き着いた場所は、四国にある屋島と言う小島だった。
標高が三百メートル弱の溶岩台地で、山頂が平らになっており、どの角度から見ても『屋根』の様に見える事から名付けられた小島。その小島を要塞として根城にする事を決めた。
そして、この後は源氏との戦を、瀬戸内を舞台とすることになるのだった。

そう、最早逃げる地が彼らには無かった。

京より平家追討に来た義仲は、背水の陣になっていた平家と相対していた。
都で傍若無人を繰り返し、更には一番功を頼朝に取られ、権威が失墜していた義仲は、水島の戦いで苦戦を強いられた。何とか勝利するも、既にその頃の主役は大きく変わりつつあった。

「何…！？　鎌倉が動き出したと申すか！」
苦戦の末に勝利し、そのまま平家の本拠地屋島へと向かおうとする頃、京より報せが入って来た。
「叔父上は…叔父上殿の動きは如何か！」
「は…行家殿は…その…」
京より伝令に来ていた武者は、顔を伏せ震えている。息切れをしているが、それとは別に、何か体に閂を掛けられたようにその体勢から動こうとしない。その態度で良からぬ動きがあった事は、すぐに察しがつく。
「裏切り…か」
義仲は体を震わせ、歯を食いしばる。

当初水島で苦戦していたのは、義仲では無かった。行家の動向が気に掛かっており、京を空ける事が不安な為に派遣をしていた軍隊だった。それでも決着が付かずに苦戦していた為、義仲自らが出陣したのだった。全て危険視した事が現実となってしまった事への怒り、後悔が押し寄せ、追い詰められた精神は遂に暴走を始める。
あるいはこの時、義仲が私欲に走らなければ主役は変わらなかったに違いない。が、最早それを止める手立ては無い。

義仲は水島の陣営で、その顔の骨格ですら変える程の怒りを覚え、全軍を京へと走らせる事を決意する。

「頼朝だ…頼朝こそ我が敵である」

そう静かに口にした後、京への出陣を口にする。
無論、全軍は耳を疑った。朝廷へ反旗を翻し、源氏という傘を着て京へ進行する。それはかつての平家以上の暴挙である。だが、憤怒の化身となった義仲はひたすら京を、そして後白河法皇を目指していた。

後白河法皇は、院政に口を挟む義仲を疎ましく思い三つの画策を行った。
?.頼朝を北方の責任者（征夷大将軍）とする。
?.義仲を西国に送り出し、行家と頼朝を結ばす。
?.義仲と対立する頼朝を利用し、その存在を消す。

政治という物に明るく無い義仲は、その危険性を察知しておきながらも食いとめる手立てが浮かばなかった。そう、彼は軍才こそ優れていたが政治向きでは無かった為に、表舞台から弾き出されようとしていたのだ。

分かっている。義仲も自分の立場が分かっている。
そして、彼には選択するという余地は残されてはいないのも。

だが部下達は冷静に怯えた。
「義仲様…頼朝殿に反旗を翻すともなれば、朝廷を敵に回す事になりましょう。我らの目的は…」
「控えろ！　元より朝廷など…我を利用したのだぞ…捨て駒とし

て使い、用済みとなれば頼朝を擁立し、我を排除するなど屈辱でしか無いわ！」
「落ち付き下さい！　頼朝公は源氏の棟梁筋であらせられまする！　更には義仲殿の義兄ではございませぬか！」
「義兄がどうしたと言うのだ！！　棟梁等…我が取って変われば良いだけの話し！」
義仲は刀を抜き、伝令に来た武者に切っ先を向ける。だが、それでも尚言葉を続ける武者。
「どうぞ…どうぞ思い直し下さい！　征夷大将軍となられた頼朝公に抗えば、義仲様が御身を…」
「ならば、我が大将軍となろう…。法皇を擁護し、頼朝討伐の詔も出し、我こそが棟梁と名乗り出ようぞ…」

怪しく笑う義仲は、既に権力に取り付かれていた。

「木曾より従軍し、仕えて参りましたが…何処で道を迷われましたか、我が殿は」
鎧を纏い、片膝を付いたまま頭を垂れる武者は、止める事無く涙を落とす。
「目的を忘れ、君に仇為すなど源氏ではありませぬ。朝廷を御守りし、共に生きる事こそ…」
武者はそこまで言うと、言葉を発する事は無かった。

その首は胴より地に落ち、言葉は鮮血へと変わり義仲に降り注ぐ。

「京へ参る！　我が敵頼朝を討つべく軍を進める！」
非道の決意。
最早誰も止める事の出来ない、悲運の軍行が始まった。

そして、そんな彼に従っていた部下たちも京への道中に、徐々に見切りを着け始める。朝廷に従う戦でこそ官軍となるが、今はそこに戦を仕掛ける程の勢いで舞い戻っている。それも、完全に出し抜かれた形での帰京である。入京すればそのまま反乱・賊軍として扱われ、その後には行家・頼朝の連合軍が官軍として攻めて来る事が見えている。その上、止めようとすれば首を刎ねられる。

義仲の求心力は既に消えていた。そして、離隊した者達の中では義仲を源氏としては見なくなった者も大勢居た。

彼らは、義仲の事をこう呼んだ。

『木曾義仲』

軍才を持ちながらも、地方出身という事もあり京には合わなかった男、木曾義仲。

思いがけず掴んだ権力に溺れ、執着してしまい、翻弄される。

そこに「義」は無かった。

軍行と策略

十月十五日。京に舞い戻った義仲は、大軍を引き連れ水島を出立したが、既に仲間は散々としていた。言うまでも無く義仲を止めようとした配下の者は尽く斬られ、求心等はどこにもない盗賊頭のような存在となっていた。

義仲は京に戻ると、頼朝軍との戦に備え、かつて支援を受けていた「大夫房覚明」に声を掛け、援軍を願い出る。と同時に北国の武士にも上洛を伝え、軍備強化を図ろうとする。

が、しかし…その申し出に答える者は出て来なかった。

「何故……某が、一体どれ程の仲間の血を流し、平家を退けたと思っておるのか…」

歯を食い縛り、床にうつ伏せて涙と怒りを堪える義仲に、配下の者は誰ひとり声を掛けなかったと言う。そう、意見を述べ斬られでもしては堪らない。逃げられる物であれば今すぐに逃げたい。そんな感情が殆どの配下に充満していた。

その空気は、義仲にも十分伝わっていたがどうするつもりも無い。自らが『大将軍』となった暁には、逃走した主だった者達を平家共々追討するつもりになっていた。

「後白河法皇はどこだ」

うつ伏せたまま、義仲は口を開く。その突然の言葉に一同は面食らった。

「答えろ！　法皇は今、何処に居られるか！」

体を起こし、眼前の配下の者を睨むと、その視線の先に居た武士

が、震えながら答える。
「お…恐らくどこかの仏閣に逃げ込んで居るモノやと…」
「直ぐに調べて参れ！　見付け次第、某に報告せい！」
義仲はそう叫び、腰に差していた扇子を投げ付けた。すると、その部屋に居た配下全員が逃げる様に屋敷から飛び出し、後白河法皇の捜索へと向かう。

「何故…何故、某は一人になるのだ…」
頼朝には朝廷を初め、徐々に仲間が増えて行き、勢力を増して行っている。一方自分はというと、戦に勝ちはしているが、次第に仲間も権力も失っている。こうなってしまっては、最早残る手段は一つしか無い。
京の町が狂気により支配される日が、刻刻と近付いていた。

そして同じ頃、鎌倉では五百騎程の軍勢が京に向かい出立していた。義経率いる鎌倉軍である。

「木下殿…このまま京に上るが得策か？」
馬上の義経が剣一に聞くが、その視線は遥か遠くを見ている。義経自身も僅か五百程の兵で義仲と渡り合うつもりは無い様だ。
「そうですね…まずは近江辺りまで登り、状況を見極めましょう。鎌倉と京とでは時に差がありすぎます。それより…」
剣一は義経より三人後に続いていた。そして、その言葉に心を止めた義経は、フッと振り返る。
「如何致したか？　気に掛かる事でもあるのか？」
「これより、名を義盛と変えとうございます」
軍行中に改名等とは呑気ではあるが、義経は困った様に眉間にシ

ワを刻み笑った。
「如何致した…そちの名は不服か？」
「いえ、初めてお目通りを願った時に申しました通り…義経殿の配下として働く以上、これまでの名を捨て、新たな武者となりとうございます」
勿論、そんな事はどうでも良かった。
ただ、木下剣一という名が歴史に残ってはマズイのだ。それは龍馬とて同じ事だが、彼自身は呑気に野党と混じってバカ笑いをしている。

「左様か…合い分かった。ではこれより、『伊勢義盛』と名乗るが良い」
義経はヤレヤレと笑いながら溜息を吐いた。
「伊勢…で御座いますか…？」
「不服か？」
「あ、いえ、有難き事でございます…」
大将に名を付けて貰うなどとは光栄極まりない事である。が、この時の義経はそんな気負いも無く、これまでの戦歴、兄頼朝からの信頼もあり、名を与えた。
そんな先頭集団の会話を嗅ぎつけた龍馬は、馬を走らせて剣一改め義盛の横に来る。

「何ぜ、何ぞあったがか？」
この男はいつも楽しそうだ。人懐っこい笑顔で義盛と義経を見る。すると義経の背後を守る様に寄り添う弁慶が口を開く。
「今し方、義経殿が木下殿に名を付けた所だ」
「何じゃと？　剣さん…また名を変えたがか！？」
片眉をクイっと上げて、からかう様に笑う龍馬に、義盛も鼻で笑いながら答える。
「これから、歴史に名を残すかも知れない戦に出向くんです。名

は立派にしておかねば…」
その言葉の真意が、分かったのかどうかは謎だが、龍馬はニヤッと笑いながら自らの顎を撫でる。
「ほぉかぇ…。ほうじゃのぉ……。義経殿、ワシにも名をくれんかの！」
まるで無邪気な子供の様に馬を走らせ、義経の隣に向かい、強請る龍馬。

何やら先頭では、龍馬が強引に義経に迫っている様子が見て取れるが、義盛の心中はそれ所では無かった。この後近江に向かうは良いが、何をどうすれば知っている源平合戦に辿り着くのか…。そもそも壇ノ浦で勝った、という事以外の確かな知識など持ち合わせていないのである。
更には、これから戦をする『源義仲』という男の事も知らない。
幕末の頃の様に、薄らとした知識すら無い時代で、どうやって正史に辿るのか…。

考え込んでいた義盛は、先頭より戻って来た龍馬が、隣で楽しそうに話している事に気が付いていなかった。

場所は再び京に戻る。

十月十九日の源氏一族の会合では、居場所を特定した後白河法皇を奉じて、鎌倉に出陣するという案が飛び出す。

そして翌日二十日、義仲は「君を怨み奉る事二ヶ条」として、頼

朝の上洛を促したこと、頼朝に寿永二年十月宣旨を下したことを挙げ、「生涯の遺恨」であると後白河に激烈な抗議をした。同時に、頼朝追討の宣旨ないし御教書の発給、志田義広の平氏追討使への起用を要求。

頼朝への包囲網を着々と広げようとしていた。しかし、この案は行家、源光長の猛反対で潰れる。

更に二十六日。源氏は当てにならぬと踏んだ義仲は、興福寺の衆徒に頼朝討伐の命を下す。しかしこれも衆徒が承引しなかった。

義仲の指揮下にあった京中守護軍は瓦解状態であり、義仲と行家の不和も更に膨れ上がる事となって行った。

義仲に次第に忍び寄る、頼朝の影義経。

頼朝討伐を執拗に拘る義仲と、義経・弁慶・義盛・龍馬・与一。

寿永二年十一月。

この月に、両者の命運は大きく分かれる事になる。

不破の関所にて

義仲一派が京で慣れない策略を練っている頃、遂に義経達は関所に迫っていた。

当時の日本は、鈴鹿・近江・関ケ原より東を関東や東国と称していた。つまり関東一円を支配した、と言う事は、当時の日本の半分を制圧した事にも近い。

東国の支配権を持った頼朝は、当然の如く義経軍をその関所まで順調に運べる手筈を整えていたのだ。その敷かれた道を辿り、義経一行は『不破関』（関ケ原）まで辿り着いのだ。

それとほぼ同時期に、頼朝は更なる手を打ち出していた。政治家・頼朝らしい手段である。その内容は、後白河法皇に出された書簡に記されていた。

『鎌倉より弟の義経・範頼率いる五百騎を不破関に配備。京の食糧事情を鑑み、軍行は不破にて止め、補強軍は朝廷に委ねる。補強が不可能であっても、朝廷の指示にて戦闘へと移る』

つまりこれは、あくまで頼朝は軍を出しただけ。勝利は朝廷の手柄であり、負ければ頼朝の責任である事を示唆した内容だった。しかも京の事情までをも察した内容に、後白河法皇は感激した。義仲とは違い、無駄に京への進行はせずに東国の端に留める気遣い。そして指示があればいつでも動ける軍隊。

当然、義仲にも頼朝軍が『不破関』まで迫っている情報は入っていた。寿永二年十一月四日、その情報を耳にした義仲は、頼朝軍と雌雄を決する覚悟を決め、軍備を整え出していた。全ては頼朝の思

惑通りである。
京で軍備を整える義仲に対し、後白河法皇もそれに対抗するべく延暦寺・園城寺の協力を取り付け、僧兵や石投の浮浪民などをかき集めた。そして更に、法皇自身が居る法住寺殿には堀や柵をめぐらせての武装化を計り、義仲陣営の摂津源氏・美濃源氏などを味方に引き入れた。この事により、『不破関』に止まる「義経・範頼軍」と合わせると、数の上では義仲軍を凌いだ。

こうなると、朝廷・頼朝連合軍の完成となる。完全に義仲が賊軍扱いの図式が完成したのだ。正に頼朝が企てた計画通りに、事が進んでいた。

「追い込み過ぎです…」
『不破関』で陣を張っていた義盛が口を開く。
辺りは既に薄暗くなっており、義経・範頼軍はそれぞれに野営を始めていた。勿論軍規を守らせ、乱暴など働かぬよう各隊での見張りは立てている。
「追い込み…とは？」
共に大将軍として不破に来ていた範頼が聞き返す。既に義経の四天王として頼朝は認知しており、軍行前に範頼もその旨を聞かされていた為、軍師としての言葉が引っかかった。

「確かにのぉ…京じゃ法皇様が軍を集めちょるっちゅう話しじゃし、義仲はいつ箍が外れても可笑しゅう無いきのぉ」
龍馬は軍行中に分け与えられた水を、不服そうに口に含みながら言う。
「戦わずして官軍となった訳ですね、我々は…」

今度は義経が、その色白の顔を松明の灯りに染めながら口を開く。そこには兄の政治的策略により、知らぬ内に話しが出来上がっている事を、どことなく面白く無さそうな口調が交じっていた。

「義仲は、もう既に戦わなくてはいけない状況へと追い込まれています。これまでの行動から、追い込まれた義仲が取る方法は、二つしかありません…」

絶望にも似た表情を、義盛は浮かべながら言った。

「「二つとは？」」

義経と範頼は殆ど同時に、身を乗り出して聞く。

「一つは、京を出て…増援の無い状態の我々と戦う。一つは…」

そこまで言うと、言葉を詰まらせる。その事で、それが最悪の状況だと誰もが察していた。無論、その場に居た与一や弁慶も同じ事。そして、その最悪の状況に向かう事がほぼ決定している、という事も察していた。

「法皇様を擁し、頼朝殿を京で迎え撃つ。法皇様に朝敵と認めさせ、自ら官軍であると主張しつつ、幽閉。中枢を掌握し、牛耳る」

「そ…それではまるで逆効果では無いか…」

範頼は、義盛の言葉に続いて慌てて遮る。が、それには義盛は言葉を発さずに沈黙を守る。だが納得のいかない範頼は、最後聞く。

「我々は京の戦を引き起こしに行くのではない！」

「分からんお人じゃのぉ、範頼殿は」

あっけらかんと言い放つ龍馬は、ゴロっとその場に寝ながら言う。

「頼朝公はそれを目論んで、法皇様に援軍を頼んだがじゃろ？義盛殿？」

龍馬のその言葉には、全員が声を出す事を忘れ、驚いていた。

「暴挙に出ている木曾源氏の、壊滅を目論むのであれば…恐らく

は」
「偽りだ。兄上が京を戦場にしよう等と…」
「そうなっても、恐らくは朝廷の臨んだ事、という根回しはしていらっしゃる筈です」
義経は恐怖を覚えた。いや、義経だけでは無い。範頼も、弁慶も同じだった。しかし、この男だけは呑気に夜に染まる空を見上げ、呟いていた。

「ここまでの半月、修羅軍師がただ呆けて歩いておった訳では無いろう？　勿体ぶらんと、はよう言うてつかぁさい」
「何か策があるのですか！？　ならば…是非に！！」
縋る様な表情で見つめて来る義経。義盛は間を取り、空を見上げて言う。
「一旦、頼朝殿の策に乗ります」

ゆっくりと不破の陽が沈んで行く。長い様で短い、秋の夕暮れは、次第に闇が降りて行く。

「義仲は法皇を擁し、全てを敵に回します。それに気付くまでは大きな戦にはならないでしょう。それまでに攻め込んでしまえば、京は戦場と化してしまいます。ですが、時期を遅らせ義仲を躍らせる事により、恐怖心が増幅します」
「それで…京が戦場にならずに済むのか…？」
範頼が不安そうに設問すると、義盛は険しい表情で答えた。
「その機に乗じ、我らは京へと軍を進めます」

五人はどよめきを起こす。龍馬は相変わらず、空を見上げたまま笑顔を保っている。

「恐怖を感じた義仲に、我ら五百騎が迫る。当然幽閉されている

法皇様が募った兵たちは、それを好機と義仲に対し挙兵する…」
「……義仲を、京の町から追い出す…と、申すのか！」
範頼は、驚愕を声に表し、小さく叫ぶ。
「それが何より、京の町を救う手立てかと。しかし、その為に法皇様をしばし危険に晒さなくては」
「なに、法皇様に手をかける様な真似は出来んがやろ。義仲の切り札は法皇様じゃきのぉ」

義経は静かに目を閉じ、何かを考えている。そして、その思いを感じ取った義盛は、続いて言う。

「我らが幽閉された法皇様を御救いし、義仲を追討するのです。頼朝公の策を活かし、且つ京と法皇様を御守りするには、それ以外に手立てはございません」
「それで、兄上は得心すると思うか…？」
義経は、兄の事を考えていた。思案に他意は無いか…それを望んでの事なのか。しかし、その言葉を否定するのは範頼だった。
「九朗…、帥が気にかける事は理解するが、兄上は鎌倉に居られる。戦場に於いては結果のみを見つめ、手段はその時々で選ばねばならぬぞ」

それに関しては、他の誰もが入る余地は無い。二人の大将の会話であり、兄弟の会話でもある。

「承知しております…ですが、大将軍は兄上であり、意に背く真似は出来ませぬ」
「分からぬのか…？　帥の軍師が申した通り、兄上の意向を踏まえながらの軍策でござろう？」
「……」

夜は既に夕焼けを覆い隠し、星空をその舞台へと押し上げている。
虫の音が響き、秋の様相を演出している。
廃屋と化した民家を借り、兵を休ませ、食料は鎌倉より持ち込んだ物と、現地での調達で陣を貼っている。その中で、秋の宴を楽しむ為に、殆どが野原に集まっている。

だがそんな秋の空の下で、今後最も大きな転機に差し掛かる男達が、その空を見上げている。

「義経殿が義経殿であるが為に、戦うのも必要では御座いませぬか？」
のんびりとした口調で言う弁慶。彼の心には、どうあっても義経に付き従う覚悟も籠っていた。
「袖触れ合うも何かの縁…。ましてや命を共に賭け、戦に出るっちゅう間柄じゃき、ワシは義経殿と共に行くきの」
「某は…こうして召し抱えて頂き、この弓を義経様の為にお役立てする事こそ、望みであります！」
与一は熱く言い放つ。その様を見た義経・弁慶らはクスクスと笑った。
「暑苦しいのぉ、与一さんは」
着物の襟をパタパタとしながら、与一に背を向けて寝がえりを打つ龍馬。

「九朗…、自らの足元を見よ。帥を信じ、従う者に応えるも大将の役目ぞ」
範頼の言葉に、ゆっくりと頷く義経。
「指揮は御大将が御執り下さい…。我等は御大将の仰せのままに、この命を果たしましょう」

爽やかに笑いながら、弁慶が言う。主は頼朝に非ず、義経である、と言わんばかりに。

ただ一人、義盛だけがこの策に不安を持っていた。万が一、義仲が追い詰められ、法皇奪還に失敗した暁には、その暴走はどこまで行くのか。また、今の動きが歴史にとって良いのか。目眩がしないという事は、正史に沿っているのだろうが、実際に動くとどうなるかは全く分からない。

が…この日が切っ掛けとなり、次第に義経の立場が狂い出そうとは、誰もが思わなかった。

クーデター

寿永二年十一月十七日。

不破関で陣を張り、法皇の勅旨が出るのを待つかの如く不動の義経・範頼軍に気を良くした後白河法皇は、次第にその気持ちも大きくなっていった。

『自分には東国の支配者であり、源氏の棟梁が後ろ盾として構えている』と思ったのだろう。いよいよ義仲を逃げ場の無い片隅に追いやろうとしていた。更に、義仲は力づくで我が身を拘束し、宣旨を出す様に強要すると踏んだ法皇は、先手を打ち出す。

『源義仲は直ちに西下し、平家討伐に迎え。院宣に背き京へ留まり、鎌倉軍と戦うのであれば宣旨によらず自身の資格により行うべし。仮に京へ在留するのであれば院宣に背いた謀反人とする』

この院宣に対し、義仲はこう応えている。

『君に背く心根無し。鎌倉軍が入京しないのであれば戦う意思も無し。直ちに西下致します』

義仲は穏便に済まそうとしていたのだ。最も京での立場をこれ以上危うい物にしてしまっては、部下より自らの命に関わるのである。

しかし朝廷は許さなかった。いや、朝廷と言うよりも後白河法皇が義仲の京に居座る事が我慢できなかったのだろう。実際、義経達は京に向かおうとせず不破関に滞在したまま動きを見せていなかった。一方の義仲も、その状況を知っておきながら京を離れようとはしていなかった。

義仲の心中としては、『仮に西下すれば鎌倉軍が上洛し、自身は京に戻る事が叶わない』と思っていたからだ。つまり、京は義仲の

支配下であり、誰にも渡さぬと誇示したも同然だった。

そして、それを察した後白河法皇は翌十八日、後鳥羽天皇、守覚法親王、円恵法親王、天台座主・明雲を御所に集め、義仲に対しての武力衝突の準備を進めていた。

十一月十九日…。遂に義仲が法皇に牙を剥く。ギリギリまで追い詰められ、戦闘の意思無しと返したにも関わらず、朝廷内部で戦闘態勢を取っていた事が切っ掛けとなった。

義仲は突如、法皇の居る法住寺殿を襲撃。源光長・光経父子を含め、守覚法親王、円恵法親王、天台座主・明雲らが奮戦するが、最早逃げ場の無い義仲軍の勢いは凄まじく、止める事は出来なかった。

法住寺はこれまで、と、諦め逃亡を図る後白河法皇を、彼らは捕縛する。この時、一兵卒に捕縛された法皇は唇を噛みながら叫んだ。

「頼朝軍が、地獄の果てまで果しに行く」と。

だが、その言葉は義仲軍の歓喜の声で誰に届く事も無かった…。

義仲はすぐさま法皇を五条東洞院の摂政邸に幽閉し、様々な院宣を強要する。更に法住寺の戦いにおいて戦死した源光長・光経父子の首を五条河原に晒し、天台宗の最高の地位にある僧の明雲の首を川に捨てる等の暴挙にも出た。

二十一日には、元関白の松殿基房の娘を妻として娶り、二十八日には中納言・藤原朝方以下四十人余りがを解官させ、代わりに自らの息がかかる者を据えた。その中には義父基房の血族の者も居たという。

十二月に入ると、義仲は遂に院御厩別当となり、左馬頭を合わせて軍事の全権を掌握するに至った。正しくクーデターである。こうなってしまえば、最後に念願を叶えるべく動き出す。

『頼朝追討』…

官軍として返り咲いた義仲は、既に止まる事はできなくなっていた。権力を掌握し、自らを弄ぶように常に頭上に居る棟梁を、その座から引きずり下ろす時が来たのだ。無論、頼朝の大将軍の任を解かれ逆賊と仕立てられたのだ。

だが、この時には既に武士達は義仲の元を離れて行く者が出ており、身の周りに居る者は出世の為に義仲を利用しようと企む輩だけとなっていた。

「義盛殿、義仲が遂に動き出したそうですよ」

廃屋に義経自らが赴いて来ると、義盛は慌てて膝を床に着き、頭を下げる。

「貴殿の申した通り…義仲は武力で院中を掌握、法皇様を幽閉するという暴挙に出ました」

義経は京での一連の騒動を、義盛に説明した。そして、その背後には範頼も立ってた。

「九朗、この男の洞察力・軍才は見事であるな…。儂に貸してはくれぬか」

ひとしきり説明を終えた後、範頼は自らの頬を撫でながら義盛を見つめる。

「兄上、この者は『義経四天王』であります。そればかりは聞き入れる事はできませぬ」

義経は笑いながら言うが、範頼は若干不服そうに、まだ義盛を見

つめながら、口を開く。

「して…義盛殿。この後如何致すか」

範頼の設問に、義盛は頭を少し上げ、明快に応える。

「我等は晴れて賊軍となりました。これで京に向かっても咎める者は居ないでしょう…」

「何！？　お主は我等を賊軍とする為に、ここに留めたと申すか！　義仲と通じておったな！？」

義盛の言葉に範頼が反応し、腰の刀を抜く。

「九朗…お主まんまと騙されおったか…いや、儂も含めてだ…。口惜しい！」

そう叫ぶと、範頼は義盛に対し刀を振り下ろす…が、立て膝の義盛は右足を軸としてクルリと右に回り、太刀筋を交わすと同時に範頼の右腕を取る。そして、立ち上がり様にその腕の下へと右肩を入れ、捻る様に範頼の体を宙へと跳ね上げる。

廃屋は轟音と共に揺れ、慌てて外に居た者達が中へと飛び込んで来ると、そこには仰向けに寝転がって。呆然としている範頼と、軽く笑顔の義経、そしてその前に片膝を立てて座り、頭を下げている義盛が居た。

「殿…一体…」

声を発してその様を見ていたのは与一だった。

「いや、何でも無い…。兄上が板の間に足を取られただけで…」

その言葉に、義盛もプっと吹いてしまった。

「心配には及ばぬ、今しばらく外で待っておれ」

義経は与一達にそう言い、外に出す。

「兄上、義盛殿は帥の軍の軍師…。疑っていては戦はできませぬ」

その言葉に、範頼は体を起こしながら答える。

「だがしかし、大将を投げ飛ばすなど…」
「この男の大将は某で御座います。現にこうして頭を垂れております故」
「くっ……！　ならば九朗、其の方から賊軍とした理由を聞け！
得心行かぬ場合は斬るぞ！」
「先程…斬れませぬでしたが…ね」
軽く笑みを浮かべつつ、ボソッと言い放つ義経は、まるで悪戯坊主そのものだった。

「賊軍・頼朝軍が京に上る…。そうなれば、恐怖を覚えるのは一体誰で御座いましょう」
聞かれるまでも無く、という顔で義経は答え始めた。
「賊軍に陥れた…義仲…」
「はい。そしてここまで大掛かりに院政を牛耳る義仲に、心底従う者がどれ程居るでしょう」
「成る程…権力目当てで近寄る者は居るが、そこに主従は無い」
「義仲は、最早京を捨て逃げるしか手立てが残されておりません…自らが逆賊と陥れた鎌倉軍の怒りは、誰よりも義仲本人が理解しております故」

「我等を官軍にすると言うたのは、方便か…」
範頼が聞くが、義盛はそのままの体勢で切り返す。
「いいえ。御大将頼朝公の官位を剥奪されたのは予想外ではありましたが…今ここで、形式上の賊軍が京に入り、義仲を追い出すとなると我らは義賊と成ります。その上で法皇様を救出すれば、官軍へと成りましょう」

「京の町を戦場にせず、完全に朝廷からの信頼も厚くなる上、義

仲を追放・追討するか…ただ、待っておっただけで」
頼朝と義盛の策を知り、範頼の背筋が凍ったように冷たい物が走った。

「暮れに援軍が参るとの報せもあった。それを待ち、京へと向かう…それで宜しいですか？」
義経は範頼に聞くと、細く長い溜息の後、小さく頷いた。

そしてその年の暮れ。
佐々木高綱と梶原景季が鎌倉より駆けつけ、それと入れ変わる様に鎌倉へ早馬を駆けさせた。

翌年一月十五日、義仲は自らを『征東大将軍』とし、鎌倉軍を迎え撃つべく宇治川と瀬田に兵を派遣。その頃には既に、鎌倉軍が近江にまで達していた。

暮れに鎌倉へと送った早馬が戻った一月二十日。頼朝より全軍に義仲討伐の命が伝えられた。
義経達は、あくまで総大将頼朝の命を守るというパフォーマンスまでやってのけたのだった。

宇治川の先陣争い

義仲は鎌倉軍を怖れていた。
当初、その数は少数ではあるが、何より自らが陥れた「頼朝」の弟達が率い、朝廷からの信頼も厚い軍隊。
実績こそ義仲が上であるが、それでも尚大きく立ち塞がる存在がすぐそこまで来ている。気が気で無い状態が続いていくうちに、義経達は次第に京に向かって来る。
最早戦うしか道が無い。義仲はそう覚悟を決め、自軍を三つに割った。

三つに分けた各軍の内訳は、今井兼平に五百騎を与えて瀬田を、根井行親・楯親忠には三百騎で宇治を守らせ、義仲自身は百騎で京の院御所を守護した。約千騎にも上る軍を、分割してしまったのだ。勿論分割せずとも数での不利は否めない状況となっていたのだが…

その対する義経・範頼軍は、少数で鎌倉を出立したにも関わらず、京からの増員と追いかけて来た佐々木高綱と梶原景季が率いた軍を合わせ、その数は五万五千騎にまで膨れ上がっていた。最早戦の結果は見えていた。
そしてこうなれば士気が上がるのは「鎌倉方」であり、下がる一方の義仲軍は収集が付かなくなって行く。

「佐々木殿…軍行中、思っていたのだが、帥の馬はまさか『生?』では…」
後に軍行に加わった梶原が、佐々木に聞く。
「如何にも『生?』だが…帥の馬は『磨墨』と見る。頼朝殿より

賜ったのか？」
この二人は、鎌倉を出る時に頼朝から馬を授かっていた。共に名馬と名高いが、梶原は『磨墨』よりも『生？』を求めていた。共に名馬ではあるが、『生？』は頼朝が高く評価していた馬であった為、それを求めた。しかし、頼朝はそれを許可せず、代わりに『磨墨』を与えたのだった。その時梶原は素直に諦めたが、その後、佐々木に与えられていた事を知り、これを恥辱と感じた。
「某…大殿より『生？』を賜りたく申し出たが、断られた…。まさか帥の手に渡るとは…」
彼らは互いにライバルとして意識し合っていた。その相手に求めていた馬を与えられ、恥と感じた梶原は、手綱をギュッと握りしめ、下を向き歯を食いしばった。
そんな状況を見ていた龍馬は、佐々木の隣に馬を寄せて来る。
「ほぉ…この馬が名馬かいの…」
ニヤニヤとしながら佐々木を覗きこむ龍馬。その表情に、佐々木もハッとして梶原の気持ちを汲み取った。
「そ…そうだ、頼朝殿より…」
「上手く盗んだのぉ…どうやったがか？」
佐々木の言葉を遮る様に言葉を発する龍馬。
「盗んだ…？」
梶原はその言葉を繰り返す。
「お？　内緒じゃぞ景季殿…漏れると高綱殿のお首が飛んでしまうき」
ガハハと大笑いをする龍馬は、そのまま後ろに下がり、大群の中に消えて行った。
「不思議なお人だ…。我々の心中を察しておるかに見え、そこに触れずに居るかと思えば、一言置いて行かれる…」

梶原は少し照れた様に笑い、佐々木を見る。
「某も盗めば良かった」
頼朝が愛でる名馬を盗むなど、不可能に近い。それは両者とも分かっていた。が、龍馬の気持ちとそれに乗る佐々木の思いは、梶原にも通じていた。
「宇治川で木曾軍が待っておる…何れが名馬か、そこで勝負致そう」
「承知致した。我が先陣を切ってみせる」
「何の、盗んだ名馬に負ける訳には行かぬわ」
二人は意気を上げ、大声で笑っていた。

宇治川に向かう義経軍…。
それを迎える根井行親・楯親忠軍。川を隔て対岸で両軍は向かい合う。
数的不利に立たされている木曾軍は、渡河を阻止する為に矢を一斉に放って来る。三百もの兵士が放つ矢は、義経軍の頭上に降り注ぎ、まるで空を覆うかの如く舞い落ちる。
義経等は木製の盾を使い、それらを防ぐが前進の切っ掛けが掴めないでいた。前に出れば、上と正面から矢が飛んでくる事になる。
「義盛殿…何か、何か策は無いか…」
「矢が尽きるまで撃たせる…等は？」
「……義仲が逃げ果せる時を与えるつもりか…？」
流石に冗談の通じる時では無いらしい。義経の表情は明らかに怒りがこみ上げていた。

「……仕方ありませんね…与一殿、こちらに」
少し離れ、盾を翳していた与一は、恐る恐る移動し、義盛の元へと辿り着いた。
「何か妙案が浮かびましたか…？」
与一はビクビクしながら盾の下で義盛に聞く。
すると義盛は近くに居た兵を集め、盾でぐるりと与一を囲むように配置した。丁度亀の甲羅の様になり、与一の正面には僅かに隙間が開いている。

「移動砲台…とでも言いますかね」
「ホウダイ…とは？」
「与一殿、貴方が指示を出し、甲羅を動かして下さい。水際まで進み、その穴から敵を射抜くのです」
「…何と…これであれば距離のある戦に使える…」
甲羅の中から与一の感嘆の声が籠って聞こえる。

その甲羅はゆっくりと進み、水際で止まると小さく左右に回り、続いて正面の盾が上下に微調整を始めた。
「一カ所だけ、一カ所だけ手薄の個所を作って下さい」
義盛は甲羅に向かい声を掛けると、そこから一本の矢が放たれた。放物線が、他の矢の流れに逆らい若干低い軌道で飛んでいく。そして、二本、三本と続けて同じ軌道で放たれると、対岸からどよめきが聞こえ始める。義経達は盾を翳している為、正面を見る事も困難だが、対岸のどよめきが次第に悲鳴になっていく事を感じ取る。それを見た義経軍は与一に習い、同じく甲羅を作り矢を放つ。

『映画で見たのがヒントになったな…しかし、このまま全滅は難しい…どうする…』
義盛が盾の下で考えている所に、男が二人近寄って来る。
「義経殿、義盛殿…我らに先陣を切らせて頂きたい！」

申し出て来たのは佐々木と梶原の二人だった。

「数人倒れたとて、まだ矢は降っておる…しばし待たれよ」

「待って居ったら、先陣など切れませぬ。我ら二人、例え射抜かれようとも対岸に辿り着き、蹴散らして参ります！」

確かに、言う通りこのままでは相手も矢への防御を作ってしまう。その証拠に、相手も同じ陣形を取り始めている。

「攻め込む好機は今しかござらん！」

梶原の言葉に、義盛は義経を見て頷く。

「……分かった、佐々木・梶原殿の先陣、許可致す！」

「必ずや！」

二人はそう言うと、早々に射程外に留めている馬にまで引き戻ると、盾を捨て跨る。

「梶原殿、参ろうか…」

「生は望まぬ。望むは先陣の手柄」

二人は顔を見合わせ、ニヤリと微笑んだ後、同時に馬を走らせた。矢が降り注ぐ中、槍を使いその間を縫うように走る。与一達の奮闘でその矢の数も少なくなって来てはいるが、馬の脚を止めればすぐに狙い打たれる。

「梶原殿、引かれい…馬の腹緒が緩んでおる！　落ちれば一大事ぞ！」

佐々木の一言で馬の腹を見ると、確かに紐が緩んでいた。口惜しくも引き返し、結び直し再び川へと向かう梶原。

『謀られたか…先陣を…』

そう思った矢先、梶原は佐々木を川辺で見付ける。

「遅いぞ、梶原殿！　さぁ参ろうぞ！！」
佐々木はそう叫び、川へと馬を跳ばせる。それを見た梶原は口元を大きく緩め、「応！」と叫びながら後に続く。
矢はその数を次第に減らし、佐々木達の先陣争いが宇治川の中で繰り広げられる。そして、その後に義盛達も続き、木曾軍に迫る。

「やあやあ！我こそは頼朝公が家臣、佐々木高綱！」
一番声が敵陣の中で上がると、直後に梶原も負けじと叫ぶ。
「我こそは梶原源太景季なるぞ！」
先陣争いは佐々木に軍配が上がったが、上陸後の二人は奮闘し、木曾軍を蹴散らして行った。

「あの二人…使えますね」
義盛はにこやかに言う。勿論戦いながら。
「この…場でその余裕が…」
義経は小さな体で槍を振りまわし奮闘している。その傍らでは弁慶も暴れている。龍馬は…対岸で与一と共に矢を放っていた。
この戦で、宇治川の木曾軍は壊滅し、佐々木高綱・梶原景季の名が高く響いた。
同じ頃、範頼も瀬田の木曾軍を打ち破り、その足を京の義仲に向けていた。

次第に迫る鎌倉軍。
義仲は、兵を連れ京を脱出する事を決める…が、その時、常に寄り添う女兵士が居た…。

巴御前

寿永三年一月二十日。宇治川の木曾軍を破った義経軍は、そのまま進軍を始めていた。

そして敗戦の報せを聞いた義仲は、恐怖と後悔に襲われていた。

「何故…いや、何処で道を誤ったのか…」

その報せを聞き、愕然とする義仲は真っ青な顔で側近の者達に問う。

「儂は過ちを犯したのか？」

その答えは、配下の者に出せる筈もない。下手に口を開けば即座に斬られる事も考えられるからだ。そして、ただ無言で胡坐を組み、頭を垂れている配下の者達を一通り眺めた後、弱々しく言う。

「もう良い…皆、下がれ…」

力無く、それまでの義仲とはまるで正反対の言葉に、一同はその場を去った。ただ二人を除いて。

「情け無し…」

一人の男が漏らす。

「兼平…もう良いのだ。儂の役は終わった」

「義仲殿、武士たる者、常に武士らしく強気でなければなりませぬぞ」

「乳兄弟の帥にも…迷惑をかけたな…」

義仲は、常に気にかけてくれるこの男に、苦笑いを返した。この男は中原兼平という。

「義仲殿は常から申しているではありませぬか。共に死ぬるまでと。今まさに戦う時でございましょう」

そう言うのは、もう一人残った男…いや、体躯はそれほど大きく

無く、髪も長い。
「巴、帥の働きには感謝しておる。女とは言え、千にも値する働きでここまで上り詰めた…」
「女などと見られていては、義仲殿の元で武勲を上げられませぬ」
「武勲…だと？」
巴の言葉に、反応する義仲。そしてそのまま兼平を見る。
「武士は武勲を上げ名を轟かす者。政に於いて名を上げるは謝りにございます」
兼平は深々と頭を下げ、言い放った。
「儂が政に踏み入れた事こそ、儂の誤りだと…そう申すのだな？」
「否、政に踏み入れたのでは無く、帝より奪い取ろうとしたのです」
天皇の世継問題。その事を指摘していた。勿論義仲もその時に理解した。
「後継者…京での名声…欲してはいけぬ物を、儂は欲してしまったか…」
義仲は背負った物を全て下ろしたように、体が軽くなった。自らの過ちにより配下の者を失い、自らの命をも危ぶめる結果となっていた事を、ようやく認めたのだった。
「ふぅ…田舎武士が京に来ては、良い事が無いの…のお、巴」
疲れた笑顔で巴を見るが、爽やかに笑って返す。
「何を仰いますか、義仲殿は妻を娶ったではありませぬか」
「わはは、それも政の真似事に過ぎぬわ」
大いに笑い、かつての眼力を確かに取り戻した義仲は、再び兼平に問う。
「法皇を擁しての脱出は、配下の者達の逃亡により困難と相成った。さて兼平よ…如何致す！」

「はっ！　さすれば袴を捲り上げ、国へと逃げ帰るが潔しと！」
「ふむ、それもまた良かろう、儂の今を良く現わしておるわ…続く者だけ声を掛けぃ！　木曾へと逃げ戻る！　命あらば再び故郷を望めるであろう！」

北陸への逃走…。生き抜くための手段として、それを採択する。

「京に行かぬとは、今度はどんな秘策があると申すか」
義経は義盛に尋ねると、義盛は表情を崩さずに答える。
「義仲本人は、京で防衛など考えぬ…と、言う所でしょうか？」
「確かに京から追い出すとは申しておったが、町に入る前に逃げ去ると申すか？」
「範頼殿の軍も勝ったようですし、このまま両軍が京に押し入っての戦ともなれば、それがどのような結果になるかは義仲にも明白。既に近江粟津の甲斐源氏には、早馬が向かっているでしょう。彼らがこの話に乗れば、足止めができる筈です」
「近江の甲斐となれば…義仲と覇権争いをしておった…」
「そうでしたか…ならばこの戦、我等の勝利に終わります」
義盛にとっては逃亡の足止めができるかどうか、危険な賭けとして早馬を出していたのだが、その心配は無い様子に安心した。
「しかし、いつの間に早馬などを出されたので？」
隣を馬で歩いている弁慶が聞くと、義盛は笑って答えた。
「鎌倉より進軍開始の報せを持って来た彼に、もう少し走って頂いただけですよ」
「成る程…我々が近江に居る時に、既に二の手を打っておったか…」
義経は感心する様に頷いた。

大軍で京の外で木曾軍と戦い、大勝して京へ向かう。それに怖れ京から逃げる義仲を、近江で討つ。
何もかもがこの男の目論み通りに進んでいる。が、義盛にとっては綱渡りである。刻の修正力により、多少の事であれば問題無いとは分かっているが、一度選択を誤れば歴史が大きく変わってしまう。義盛の考えでは、京から木曾に戻る最中、他の源氏が義仲の足止めをして貰えば良い。そこで誰かが討ち取れば、それが歴史となり、足止めができなければそれが歴史となる。
人任せ、と言ってしまえばそうなるのだが、可能な限りの接点を無くした結果、それが一番だと思ったのだ。

「できれば甲斐源氏が討ち取ってくれれば…」

義盛は、つい口を緩めてしまう。
「何を仰るか、拙僧が義仲の首を討ち取り、かつて奴がしてきた様に、河原に晒してくれる！」
「坊、僧侶の言葉とは思えぬぞ？」
「これは失礼仕った…。懇ろに念仏を上げて御覧に入れましょう」
義経・弁慶は談笑しながら再び近江を目指している。

二十日の夜。
義仲はまだ自らに就き従ってくれる少数の武士達を引き連れ、京を出立する。夜中に出なければ、甲斐源氏の領土を抜ける事など、今の勢力では不可能と判断したからだ。
その中には当然、中原兼平とその妹、巴も居た。

二十一日早朝、一行は近江の粟津に差し掛かった。

まだ陽も登らぬ粟津。

少数の義仲軍に、闇から襲撃する者達が溢れて来る。

甲斐源氏であった。

彼らには義盛の早馬より先に、鎌倉の頼朝から「義仲討伐」の命が下っていたのだ。そして、鎌倉の命に従い軍備を整えている頃に義盛の早馬が到着し、その逃亡するであろう日付が明らかとなった事で、待ち伏せをしていた。

義仲軍に抵抗する軍力は、最早無い。

従軍している者達も、討たれる者、逃亡する者と出ており、その数を見る間に減らして行く。

「兼平…従軍するは、あと何人か…」

「我と巴…義仲殿ばかり」

何とか甲斐源氏を振り切った義仲は、背後を振り向く。

「……こうまで成ると見事としか言えぬな」

その表情は落胆としか見て取れない。青ざめ、疲れ果て、絶望していた。

「疲れて居られるのであれば、この辺りで自害でもなされるか？」

自分はまだ平気、と言わんばかりに笑いながら義仲を諭す。と、巴も続き

「先はまだ長う御座います。自害して果てるのであれば、その首級を故郷に持ち帰りまするが？」

二人のその言葉に、義仲も釣られて笑うが、その瞬間に巴の背後から大男が現れた。

「我こそは御田八郎師重！　義仲殿とあい見た！　勝負なされ！」
馬を走らせて駆け寄って来る。
義仲はとっさに巴に叫ぶ。
「巴！　お前はどこへでも逃れて行け。我は討ち死にする覚悟、最後に女を連れていたなどと言われるのはよろしくない！」
「何を！　最後の奉公でございます！」
巴は義仲の制止を振り切り、即座にその敵の馬に駆け寄り、すれ違いざまに男を槍で殴り付け引き落とすと、即座に馬から飛び降りその男の首を撫で切った。
「我こそは義仲が家臣、巴成り！！」
槍を地面にドンと突き立て、義仲を見る。
義経軍、義仲までほんの数里と迫っていた。

義仲の最期

義経軍は大軍を引き連れ、馬を走らせていた。だがその殆どが行き先を知らず、ひたすら前方を行く者に着いて走っていただけだった。

それは義経以下、弁慶たちも同じだった。

「待たれよ、義盛殿！」

義経は叫ぶが、義盛は馬の足を止めずに振り向き叫ぶ。

「申し訳ありません！　ですが先に義仲と思われる気配がありまし！」

…気配、そう言ったが勿論、核心は無い。核心は無いが、いつもの戦の『匂い』がしていた。それも薄らと。時間の流れを一瞬遅く感じ、『何か』が見えたのだった。

「気配など…某には感じぬが…」

半信半疑で、それでも尚義盛に着いて行くのは、それ相応の信頼関係ができたのだろう。

配下の者全員は、大将である義経が走っているから、付き従うしかない。弁慶・与一も不審な表情で従うが、龍馬はただ一人、元気に配下の者達を鼓舞していた。

「それ、こん先に敵の御大将義仲が居るがじゃ！　一番槍は誰が突き立てるがかのぉ！」

確信を持っていた。

龍馬も刻を超え、良く似た感覚を身に着けていたのだ。しかし何故か義盛程強くは感じてはいなかったが…。

「坂本殿…拙僧には何も感じられぬが、誠の事で？」

弁慶はスルスルと馬群を下がり、龍馬に横付けて聞くと、子供の様な笑顔で返す。

「自らの眼で見ちょったら、それ程信用できるモンは無いがやろ？　こん先、剣…義盛殿の力が必要になるき、エエ機会じゃ。仏法では教わらん世界があるっちゅう事を、しっかり見ちょったらえいがじゃ」

弁慶は、義経ほど義盛を信用してはいなかった。龍馬はそこを見抜き、そう答えたのだ。

見事に切り返されたと、弁慶は仏頂面を下げてそのまま馬を走らせる。

「…巴！　もう良い、下がっておれ！」

義仲は馬を駆けて巴の背後に行くと、兼平も続く。

蹄の音。それも一騎では無く大軍が迫る音が、まだ明けていない闇の中に響く。

「いよいよ義仲も最期の時を迎えるか…」

感慨深そうに、ポツリと言うと兼平は堂々と答える。

「恐らくはもう逃げ果せる事は不可能でございましょう…。それでも尚、逃げるか、それとも…」

「兼平よ、儂は武人ぞ。そこで待っておれ」

そう言うと、義仲は馬を下りて槍を地に立てる。

「この先は通さぬ。巴…帥には女子としての幸せを見出すのが、儂の最期の命じゃ」

「いいえ…わたしは義仲殿と、ここで共に果てまする」

「聞け、巴……。儂の命に背く事は、断じて許さぬ！」

義仲は、振りかえらずに叫ぶ。その目には、闇から見える松明と、先頭の男が映っていた。

「やあやあ！我こそは木曾源氏が棟梁、義仲なるぞ！　誰ぞ儂と一騎打ちを果たせ給え！」

「一騎討ちか…さすれば大将の我が…」

義経は大将同士の仕合をしようと、馬を下りに掛かったが、それを追い付いてきた弁慶が止める。

「坊、何故止めるのだ？」

「……驚きました…誠に義仲が居られるとは……」

龍馬の言葉ではないが、自らの眼で見た物を疑う事はできない。弁慶は義経の体を掴んだまま、義盛に言う。

「御見それ致した、義盛殿。誠の八幡大菩薩の化身やも知れぬそなたを、疑っており申した」

「いいえ…化身などではありませんが……かつて修羅と呼ばれた事はありますね」

義盛はそう言いながら、馬を下りる。

「義盛、待て…」

義経は慌てて制止するが、それを無視して歩み出す。

「九朗殿、御身を大切にして頂きとうございます。貴方様は御大将なのですぞ。ここで一騎討ち等をしては、源氏同士の争うに拍車を掛けてしまいまする」

「坊…しかし、義仲は大将自ら…」

「殿の怨敵は義仲ではございませぬ。誤られぬよう…」

二人の会話を背中に受けながら、義仲は歩みを進める。

懐かしい感覚。周囲の光景が手に取る様に分かる。戦いの感覚だ…。敵は三人。

「我は御大将、源九朗義経に着き従う者成り！　名を伊勢義盛と申す！」

歴史の表舞台に立った。が、目眩は起こらない。

『これも刻の許容範囲か、それともここで俺は死ぬのか』

義盛は、フウと溜息を吐いた瞬間、義仲が叫ぶ。

「御大将自ら相手をせざるとは、屈辱なり！」

『大将同士の一騎打ちを所望か…ならば』腹を括った義盛は、続けて言う。

「御大将の首級をご所望であらば、我を倒した後に遠慮無く持ち去るが良い！」

これには鎌倉軍が驚いた。一騎討ちと言う事は、この戦いに義盛が負ければ義仲を逃がす、という意味合いがあったにも関わらず、義経の首級を差し出すと言ったのだから、当然である。

だが、この動揺の渦の中、大笑いをする男が二人。弁慶と龍馬である。

「さあ、如何致すか義仲殿！　我らが軍師、義盛が首級と、頼朝公実弟の九朗義経公が首級、揃えて故郷に錦を飾るか！」

弁慶は義経の体を掴んだまま、大声で言う。

「坊！　お主まで何を…」

慌てる義経の言葉を、今度は龍馬が遮る。

「我ら軍師は、一騎当千の修羅との異名を取り、その業は神速無敵成り！　恐れるならその場で首を切り自害して果て給え！」

こうまで言われれば、義仲は戦わざるを得ない。逆に鎌倉軍は一

気に歓声を上げる。
自分が死ねば義経が死ぬ…。そうなると歴史が変わる。だが目眩が起こらないと言う事は、自分は勝てるのだ…。義盛は、確信した。
義仲、唯一人の戦いが、始まった。

『槍か…左之助さんと闘っておいて、良かった』
槍の名手、新撰組の原田左之助の顔が浮かぶ。
義仲は槍を構え、足を開いてその中心へと重心を落とす。左之助の荒々しい槍とは違い、どこか品がある佇まいに、義盛は感心した。
「其の方、獲物は持たぬのか？」
義仲は、抜刀すらしていない義盛に尋ねると、笑顔で返す。
「残念ながら、槍は使えません。どうぞお気にされぬよう…」
「ふん…体術か」
義仲は直後、槍を一気に突き出す。

「何が起きたのだ…」
義盛は抜刀し、剣先を地面に向けて垂らし、義仲の槍は柄が真っ二つに両断されていた。その様を見た兼平は、思わず口にしていた。
「今の業は何だ！？」
「これは居合術と呼ばれる剣術。攻防一体にして刹那の業」
義盛はこう呟きながら、再び納刀をし、脚を開き膝を曲げ、腰を落とす独特の構えを取る。
「義仲殿…そなたの獲物はその両断された槍で宜しいか？」
今度は義盛が問うと、ニヤリと笑う義仲が槍を投げ捨てて答える。
「儂が京に来た理由が、今分かった気がするぞ、兼平、巴…」

その笑顔に後悔は無かった。
「伊勢殿、巴と兼平はよく仕えてくれた。京での粗暴を戒めてくれた、掛け替えの無い者達だ。計らいを頼むぞ」
そう言うと、義仲は刀を抜いた。反りは殆ど無く、豪華な装飾が施されている。
「主に会えた事、最後に仕合える事を誇りに思う」
義仲はそう言うと、一気に刀を振り下ろして来る。剣術としてはまだ未完成なこの時代、江戸末期で磨き上げた居合相手には、敵うはずも無かった。
斜め下から抜刀した義盛の刀をなぞり、剣筋は反れて地面を叩く。と同時に右肩から腹までを義盛が斬り下ろす。
その主の最期を見届けた兼平は、馬上で刀を抜き、剣先を口に含む。
「我が主…見事成り！」
そのまま逆さまに落ち、剣は兼平の口から腹までを貫く。
壮絶な主従の最期に、義経は弁慶の腕を振り解き馬を下りる。
「皆、下馬せよ！　天晴な最期を遂げた者に敬意を払え！」
その声に、大軍は一斉に馬を下り、手を合わす。
義仲は立ったまま、息を引き取っていた。
「伊勢…義盛…！」
唯一人残された巴は、槍を握りしめ、義盛を睨みつける。主の命に背く事は出来ないが、仇は討ちたい。だが今の自らの力では、到底討てる筈が無い事も分かっていた。

義盛は義仲の腹から刀を引き抜き、血糊を掻き飛ばすと巴に向かって歩く。

闇の中から、少しずつ巴の顔が浮かび上がって来る。

「……巴御前…？」

名前は知っている。しかし何故義仲と共に居たのか、彼女がどのような存在なのかはまるで分からない。

「御前などと呼ぶな、わたしは武者。女などとうに捨てた」

涙を流し、義盛に対峙する巴はいじらしく見えた。

『義仲に惚れてたのか…。また一つ、業を背負ったな』義盛は、変わらず憎しみの螺旋の中に居る事を実感する。そして、せめてもの偽善とでも言うべきか、巴に言う。

「仇が討ちたければ、我等と共に来るか、鎌倉へ迎え。平家を討つ事こそ、義仲殿の思いであろう」

「仇と共に道など歩めぬ。主は必ず…その首級を」

「易々と討たれてやる訳にはいかぬ。それに…」

義盛はそこまで言うと、威風堂々と立つ義仲の背中を見遣り

「義仲殿の遺言でもある。護衛を着ける…鎌倉か京に迎え」

そう言うと背を向け、闇へと向かった。

沈黙の闇の中、巴の声を殺した悲鳴の様な泣き声が、静かに野原に響き、そして風に消されて行った。

源義仲の反乱は、こうして収束した。この事により、源氏の結束

力は増し頼朝の名声も大いに高まった。

だが一人、義仲と闘った義盛は、疑問に感じていた。

『この戦の真実は、どこにあるのか。単なる覇権争いでは無いのか』

この疑問が、この後の京での事件を引き起こしてしまう。

～驕れる者　久しからず　ただ春の夜の　夢の如し～

義仲が遺した物

粟津で義仲を破った義経軍は、巴御前に護衛を付け鎌倉へと送り、その軍隊は近江の国で一旦進軍を止めていた。

それと言うのも、義仲が反乱を起こした事で「平家討伐」に時間が開く事となり、その間に平家が勢力を拡大して来てい事により、西国の勢いが増して来ていた。その先陣は福原（現在の兵庫県神戸市）にまで達して来ており、京まであと僅かに迫っていた。

これを放置し鎌倉へ戻るか、このまま福原へと攻め込み、平家を追い立てるのか。

朝廷、乃至は頼朝からの命が下るまで、義経は動く気が無いようであった。

「どう思います？」

義盛は小高い山の上で、龍馬に問いかけた。まだ夜が明けきっていない、空白の時。

「どう…っち、何がじゃ？」

「今の我々ですよ。刻の意思がまるで読めません」

そう、何をするにしても歴史を変えまいと動くのは仕方が無いが、この刻に飛ばされた使命が分からない。

「ワシがおった刻に飛んだ理由は、分かっちょるがか？」

「恐らくは、高松が歴史を変えようとし、それを阻止する事。そして…龍さんを暗殺し、刻を戻す事」

「ほう…ほいたら、剣さんがワシを斬ったがは、ワシをこの刻に飛ばす事とは無関係、っちゅう事になるのぉ」

考えてもみなかった。

自分が幕末に飛ばなければ、龍馬はこの時代に来なかったのか？
いや、仮にそうであったとしたら、今の龍馬の役割は？　そして、その龍馬と共にここに居る自身は？

「必然…俺が幕末に飛んだのも、龍さんを斬ったのも、そしてここに居るのも…全てが一つの意思によるのか！？」
つい口調が昔に戻った。しかしそんな事よりも、何か重大な事が見えた気がした。

「剣さんは義仲を斬ったけんど、目眩はせんかったがやろ？」
「確かに…。既に俺達は歴史の一部として取りこまれているかも知れない」
剣一へと戻った義盛は、顎を引き、グッと眉間にシワを刻みこんで考える。自分達が居なければ、義経軍はどうなっていたのか。
「富士川…不破の関、粟津。俺達が関与した事で、歴史が変わっていたなら…それこそが俺達の使命だったと言う事か…？」
剣一は、必死で過去（未来）で習った歴史を思い返そうとしていたが、全く詳細が浮かび上がって来ない。
「それよりも、変わって無いっちゅう事の方が恐ろしい…ち思うがの」
「どういう事ですか？」
剣一は混乱していた。もう、頭で整理がつかないまでに考え過ぎている。

「ワシらぁが歴史に関与しちゅう事は、確かじゃろ？　その上で歴史が変わっちょらんっちゅう事は、ワシらぁがこの時代に生きちょったのが、剣さんの知っちょる歴史かも知れんがじゃ」
「つまり、俺が未来で学ぶ歴史は、俺達が動かしてしまった歴史…だと？　なら、一度江戸に飛び、高松と闘った事、その後、新政府軍と闘った事は？」

「新政府軍との一件は、ワシは知らん。高松の一件も、ワシらぁをこの刻に飛ばす為かも知れん」
無責任にも、龍馬はサラッと言い放ち腕を組む。

剣一は、ふぅと溜息を吐き、目を閉じた。

「どちらにしても…我々の使命を見付けるのが、先決となりそうですね…」
口調が戻っていた。有る程度の覚悟を決め、この時代で生き抜かなくては使命も見えて来ない。
「流れに体を投げ入れ、後はその使命っちゅう物を探すかの。ほいたら、ワシが死んだ後の事、聞かせてくれんかの？　そこに何かしら答えと結び付く事があるかも知れんき」

次第に夜が明けて行く。

東の空に向かった二人は、この先の未来で起こる悲劇を身に染みつける。
遠い未来、遠い北方の地で繰り広げられた悲劇を。

「ほうか…蝦夷でそんな事があったがか…」
龍馬は朝陽を腕組みしながら見つめていた。その傍らに絶つ義盛も、口元をキュッと結んだまま、しばらく無言の時を送った。

「刻の意志じゃったら、仕方無いが…ワシが見た未来と変わってしもうたがか」
「それを言われると、私は返す言葉が無いですね…。貴方を斬ったのは私ですからね」
顔を伏せ、口を閉ざす義盛に向かい、隣に立つ龍馬はニヤっと笑

い言う。
「いかんちゃ。おまん、やるべき事をやったまでじゃろ？　何を躊躇うがじゃ…ワシは後悔などしちょらせん。剣さんに斬られるなら、仕方無いき…刻がそれを望んだんじゃろぅ？　友に斬られてワシは本望じゃきのぉ」
龍馬の言葉に、傍らに立つ男は苦笑いを浮かべた。
「こんな所においでたか、御二方。そろそろ出陣準備が整いますぞ！」
二人の背後で、弁慶が声を掛ける。
「分かったちゃ、今行くき！」
龍馬は大きく笑いながら、朝陽に背を向けて歩いた。

宣旨が出た。
西国の平家討伐。
義盛は、義仲と闘った事により、歴史の一部へと巻き込まれた事を覚悟しつつ、この先の戦へと向かう。
それは、語り続けられていく戦と、決して語られる事の無い戦。
そして、余りにも壮大な刻の意思が動き始めようとしていた。

西へ

正月の末、情勢は大きく変わって行く。

義仲の反乱の間に勢力を立て直した平家軍は、「安徳天皇」を中心として九州・四国・中国を制覇し纏める程にまで急回復していた。

そして事態を重く見た朝廷は宣旨を頼朝に出す。『平家征討・三種の神器奪還』。

『三種の神器』とは、八咫鏡（ヤタノカガミ）・八尺瓊勾玉（ヤサカニノマガタマ）・天叢雲剣（アマノムラクモノツルギ）の三つを指しており、神話の時代より歴代天皇が継承して来ていた。

勿論、本物が継承式に使われる訳では無く、「形代」と呼ばれるレプリカの様な物が使われていた事から、これこそが『三種の神器』だと言う者も多い。それと言うのも、この三種の神器を見たと正確に記録されている物が無い事と、天皇が持っている物こそが『神器』であり、初めに挙げた三種に限った事では無い、とする説があるからだ。

しかしこの時、後白河上皇を中心とする「京の朝廷」は、後鳥羽天皇を擁立させており、その際にはこの『三種の神器』が揃って無い状態となっていた。では、どこにあったのか…。

三種の内、八咫鏡と天叢雲剣は平家の都落ちの際に宮内から奪い、「安徳天皇」以外の天皇を認めないという行動に出ていたのだ。

先に天皇となっていた安徳に対し、神器が揃わぬままに天皇となった後鳥羽という二人の天皇。

権威としては安徳にあり、神器揃わぬ後鳥羽では宜しく無い。その為に『奪還』の命が下ったのだ。

この事から、この『三種の神器』が天皇家にとってどれ程の物か

推測できよう。
が、頼朝はそれすら政治に利用した。

寿永三年二月。
鎌倉より義経・範頼軍に命が下る。義仲討伐後に西国へ下り摂津平家軍を討てと。その中に神器奪還の指示は無かった。だが、神器の件を知る由も無い義経達は、摂津への攻撃準備へと入っていた。

京から摂津に向かう道中の山中。
寒さから身を守る為に山小屋を当てにし、軍は休息していた。辺りに民家は無く、小さな小屋があるだけの森の中で、彼らは木を切り風よけを作り火を灯し、暖を取っていた。無論煙が上空に上がらぬように枝が密集する場所で。

「如何致すか、この状況…」
焚火の前に胡坐を決める範頼の目の前には、先遣隊がもたらした平家軍の陣形。
「敵は一の谷に集結しておりますが、生田口・三草山と攻撃が仕掛けられる所は陣取っておりまするか」
同じく胡坐をかいている義経も、腕組みをして悩んでいる。

一の谷は、南に瀬戸内、北に険しい山があり、瀬戸内すら制圧している平家軍にとっては格好の砦となっていた。唯一の攻め口とも思える生田口には勿論大軍で警備しており、回り道の三草山にも同様に陣取っている。

「どうだ義盛殿…軍師としての知恵が唸らんか？」
少し下がった場所で座る弁慶は、困惑した表情で義盛を見遣る。
「多勢に無勢…。七万に満たない軍で十万を超える平家軍を討つ

など、無謀としか言われないでしょうね」
淡々と言い返す。
「ただ、平家を撤退に追い込むのであれば、手立ては無い事も…」
そう付け足した瞬間、義経の眼光が鋭くなった。
「聞かせて貰おうか、その手立て…」
同じく範頼の視線も厳しく突き立てる。しかし、義盛は言うべきかどうか悩んでいた。自ら発案し、その通りに戦が始まり源氏が勝てば、その時点で歴史にもう組み込まれている事となる。ただし失敗すれば歴史が大きく狂い、その時にどうなるかはまるで分からないが、大事変が起こる事は分かる。
目眩が唯一の救いであったが、それすら今では当てにできない。義仲を討ち取った瞬間にそれを直感してしまったのだ。

暫くの沈黙が、闇を照らす焚火を包み込む。パチパチと小さな音を打ち鳴らし、火に照らされた煙は頭上の枝々で薄れ、その火の灯りは木々によって遠くまでは届かない。

その沈黙を、軍の重鎮たちは受け入れていた。急かす者は居らず、ただただその沈黙に身を投じていた。

「漁師、狩人の手引きが必要となります。私の策を取り入れて頂けるのであれば、この両者の協力無くして勝利はありません」
覚悟を決めた様に義盛が言う。するとその背後で、大木にもたれて眠っていた筈の龍馬が答える。
「漁師と狩人じゃな？　ええじゃろ、交渉なら任せとき」
「ありがとうございます、漁師には龍さん…貴方が指示を出して下さい」
「分かった。ほいで、何の指示じゃ？」

義盛は枯れ草を踏み鳴らしながら地図に近寄り座る。
「弁慶殿、与一さんにもご尽力頂きたいのですが、宜しいですか？」
義盛は振り向かずに聞くと、軽く頷き返事をする二人。
『歴史に喧嘩を売るか？　歪める事に歴史がどう抗って来るのか、高松のそれと同じく弾き出されるのか…。弾き出されれば、俺を止める存在がまた…』

思い悩んでいると、龍馬が背中を叩く。力強く、魂の籠った手で叩く。
「友が居る。高松とは違うじゃろ。ワシの命も共に賭け、刻を走り切るがじゃ」
いつの間にか隣に来ていた龍馬が、耳元で囁く。にこやかに。
覚悟を決めていた男は、そこにも居た。

義盛は体を乗り出し、地図に右手の指を置いた。
「生田口を範頼殿、そして…」
更に左手で地図を指す。
「三草山に義経殿が進軍し…海上に龍さんと与一さん…」
左の指は、一の谷の海上にまで動く。

「少ない軍を、更に分割すると言うのか！　その秘策は！」
範頼は更に地図に食い付く様に見入ると、義盛の右手が動く。
「義経軍が三草山を夜襲。そのまま敵軍を蹴散らし南下。更に三股に軍を分け、二月六日、呑気に清盛の法要を執り行うようであれば、夢の口、塩屋口、一の谷と強襲。それと同時に、範頼殿も生田口を攻め、一の谷の海上から、龍さんと与一さんが挟撃に出ます」
「海上から？　無茶な…！」
「ワシは航海術を知っちょるが、無茶な事かいの？」
「コウカイ…？」

「船を操り、潮の流れを読む術じゃ」
その言葉に、彼らの目は輝いた。平家は水軍を率い、海上戦に強い。それを危惧せずとも良い状況になるかも知れない。

「同時攻撃…それも奇襲か…それならば何とかなるやも知れん」
「法要を執り行えば、隙は出来る。夜襲を仕掛ければ、そこに軍が赴く。だがその頃には、鵯越から下り、一の谷を四方より攻める」
「その為の…道案内をさせるのか、狩人に！」
弁慶はドンと自らの膝を叩く。

「混乱すれば戦力も落ちる。それはこれまで見て来た…。範頼兄、二月六日…奇襲で異論はございませぬか？」
「ここまで来て、軍師を疑うのは負けに等しい。参ろうか…各々の戦場へ」
範頼は立ち上がり、軍備を整える様に大軍に言う。が、それを阻止する様に更に義盛が言う。
「範頼殿、軍は五万程を従えて下さい。主力をそちらと思わせます」
「ふん…合い分かった。最早驚くまい」
範頼はニヤリと笑い、闇の中の兵に向かって行った。

「我が軍は…二万足らず…奇襲に奇襲を重ねるか…」
「義経殿は知らんがか？　義盛殿が以蔵と呼ばれちょった頃は、単騎で万の大軍と互角に戦ぅたがじゃ。つまりは三万の軍勢じゃ。奇襲には十分じゃろ？」
そんな経験は全く無いが、とりあえず方便を無視し、ニコッと笑う義盛。

いよいよ、源氏軍の大反撃が始まろうとしていた。

三草山の狼煙　～一の谷前哨戦～

義経軍は大きく迂回をしていた。

摂津国福原を守る平家軍を包囲する為、軍を二方向に分けての進軍だった。そして、義経軍の先頭を歩くのは、地元の猟師と義盛・義経・弁慶。彼らは摂津を北へと外れ、丹波国経由で北方より動く手筈となっていた。

一方の範頼は鎌倉軍の大半、約五万騎を従えて一直線に福原の東方に陣取る生田口へと向かう。

少数で山中をひたすら潜って行く者より、大軍を引き連れ正面突破してくる軍隊が目立つのは当然の事で、平家軍はいよいよ源氏との戦が生田口で始まると観越し、軍を生田口に集め出していた。当然、その中には大将格の「源範頼」の姿もある事から、こちらを主力部隊と判断したのだ。幸いにも、義経の名はあまり表に出ていなかったのだ。

そして、龍馬は与一と共に、途中まで範頼と同行していたが、途中で二十数名の弓部隊を引き連れて海岸線へと別行動を取る。「源氏は山中の武士」と疑わなかった平家の判断ミスでもあるが、航海術・海上戦に長けた男が居るなどとは到底想像はできないだろう。

二日ばかり山中を進んだ義経軍は、丹波・播磨国境近く、三草山に到着する。

「陣形ができているか…」

先見として送っていた道案内の猟師の話によると、多くは無いが迎撃態勢を整えつつある、との事だった。

「流石に、全ての勢力を生田口に集結すると言う真似はしませんね」

義盛は笑いながら言うと、弁慶が困った様に言う。
「笑いごとでは無かろう。帥の目論みが外れたのだ。範頼殿の方でも、外れておるやも知れん」
「あちらが大軍で無ければ、押し切れば良いだけの事。大軍であれば、睨みあっていて頂ければ」
「今さら何を言っても、変更などできぬ状況。坊、主に代替の策はあるのか？」
義経は表情を変えず、険阻で深い山を見つめていた。
「どうあれ、早い内に襲撃しなければ、この先が危うくなりますが…夜襲でもかけますか？」
ポツリと言う義盛。
夜襲ともなれば、こちらにも不利な条件はいくつかある。地の利は平家にあるのだから、夜間の戦は避けるべきであるというのが、本来の常識。しかし、常識に囚われていてはこの戦に勝ちは無くなる。
「実平…如何思案する？」
義経はすぐ後方で控える、土肥実平に問う。

土肥実平は、義経軍に入る以前から頼朝軍に従軍しており、その評価も高い。それ故にこの征討にも頼朝が加えたのだが、義経はこの時、頼朝の代官的意見を実平に求めたのかも知れない。

「軍師殿のお言葉に従うが、良いかと存じまする。闇が迫りますれば、我が軍が先陣を切り民家に火を放ちましょう。さすれば道は灯され、我が軍に有利になるかと」
「実平殿、お見事です。ではその策を採らせて頂きましょう」
義盛はニコッと笑いながら義経と実平に向かって言った。
「では実平殿、七千騎程で夜襲の先駆けをお願い致します。但し、平家軍意外の民家に火を放つのはお止め下さい。民居ればこその国です」

「重々心得て居ります。民達を仲間に引き入れ、今後の戦も展開なされるおつもりでしょう？軍師殿は…」
流石は頼朝の子飼だけあって、先を見通してる。少し感心した後に弁慶を見遣り伝える。
「弁慶殿、三草山攻略は一刻の勝負となります。火の手が上がり次第我々残り五千騎も突撃しますが…」
「こちらも承知しておる。大将は御守り致す故、義盛殿は思う存分神技をお使い下され」

義盛はひきつった笑顔で返した。
準備は整った。
この夜襲が奇襲となり、本陣が少しでも浮足立てば勝機は見出せる。

その勝負の時は、無情に訪れた。

闇に紛れ、馬を捨てて集落に忍び込む土肥実平率いる七千の軍。
一見目立つと思われるが、当時の常識から夜戦等は敵地では避けるという状況下で、明らかに敵本陣から近い三草山陣を、少数で攻められる筈が無い、と、平家側の油断が大きかった。
ジワジワと闇に広がる義経軍。
民家の間を縫うように陣取り、息を潜める。

「奇襲が否と言う訳ではござらんが…」
実平たちと距離を置き、様子を見守る弁慶が口を開く。
「正々堂々、これこそ戦だと？」
「武士であれば尚の事、自らを討取る敵、討つ敵の名を知って戦

うが流儀かと」
「死んであの世で流儀を唱えるが目的であれば、何とでも」
戦時である。油断が死に繋がる。かつて以蔵はその場に命を賭けていた。
そして戦術とは相手の心理の逆を読み、行動する事。それも痛い程分かっていた。しかしこの時代は幕末の戦術等は珍しく、奇襲等と言う事は殆ど無かった。特に平家側はその威光に胡坐をかき、雅な生活から戦場に於いても抜け切れていない。元が武士である源氏とは正反対であった。かつて義仲が行った奇襲も、この様な背景の元で行った故に、予想以上の戦果を出したのだ。

「数で劣る軍で正々堂々戦を望み、敗れ果て、後の世に生まれる子達に、あの世で自慢するが望みであれば、それを選ぶのもまた生きる道」
「坊主に説教とは、見ていて頼もしいな」
二人の会話を耳にした義経が、こっそりと背後に付く。
「坊、今は勝ちを治める事を考える時ぞ。正義を語るは我等の範疇では無い。後の世の者が決めてくれる」
そう言うと、眼下の平家陣を指さす。
「見ろ…勝利の火が灯りだしておる」

小さく、所々に点々と、確実に増えて行っている。

「あの義盛考案の火種が役立ったか…」
「竹の皮で編んだ綱に、油を染み込ませただけですよ」
元は火縄銃から参考にした物だが、こうまで上手く行くとは本人も驚いたが…。
「何の、火種を竹筒に入れ持ち運べるとはな」
「忍び込んで、火打ち石を打ち鳴らす事もできませんからね…」

ゆっくりと灯りを見下ろす義経達。
小さな火種は無数に広がり、風に煽られて次第に大きくなって行く。

「弁慶殿、戦の理由は明確な筈。ですが人を殺して良い道理など、例え戦でも有る筈が無い…事は仏僧であればお分かりですよね」
「戦に浄・不浄は無い、という事ですな…では、参りますか」

眼下では、平家が慌ただしく屋外へ飛び出している。
夜襲は元より頭に無かったのだろう。火に照らされて逃げ惑う姿に鎧武者は全く居ない。そこに七千もの実平軍が襲いかかっている。戦時であるが、なぜこうも用心が無いのだろう…富士川での一件が、義盛の脳裏を過ぎる。

「勝たなければ…」

歴史に逆らわない為に、自らの使命を見出す為に。

義盛の背後に居た義経が、兜を被り緒を絞める。
「聞け！　敵意ある者に温情はかけるな！　敵大将に情けはかけるな！　逃げ行く者を追うな！」
残る五千の兵に声をかけ、馬に跨る。
「この三草山において、平家討伐の狼煙を上げる！　いざ！　前へ！！」
義経の一言に、大軍が『おお！』と叫びながら山を駆け下り、大火の中へと突撃して行く。

後に一の谷の戦いと呼ばれる合戦が今、始まった。

三草山の戦い　～平氏三兄弟～

三草山では、一歩間違えば夜盗と見紛うばかりの光景が広がっていた。
民家に火を放ち、慌てて出て来る者を容赦なく攻撃する。その光景に慈悲は無かった。だが、不思議な事に丸腰で逃げ出す者は、皆往々にして逃げ伸びていた。
そう、義経の命を守り、立ち向かう者や大将格の者達のみを相手にしていた。

興奮状態で尚統率が取れている。

単なる野党集団では無かった。それは義仲のそれとは全く違っていたのだ。
土肥実平率いる軍も然り。

だが、この夜襲に対しても勇猛に相対する平家側武将も居た。
長槍で源氏の攻撃を防ぎ、何とかこの場より逃走を図り本陣へと向かおうとする者達。
その中に、兄弟と思われる者達も居た。そして、その兄弟は義経・弁慶・義盛の前に現れる。

馬を下り、白兵戦を繰り広げる義経等は、その兄弟を見付け声をかけた。

「何処へと行かれるか！　逃げるのであれば武器を捨て、向かうのであれば構え給え！」
義経の言葉に、三人の眼が光った。
「帥は何者ぞ！　名乗られい！」

「我は頼朝が実弟、九朗義経にある！」
この瞬間に態度が変わったのは、向き合う平家三人と義盛の四人。
義盛はこの名乗りの直後に、義経の前に出て居合の体勢を取る。
「義経殿、不用意です！　奇襲の最中に名乗るなど！！」
その言葉の直後、三兄弟は斬りかかって来た。二人は長槍、一人は刀という状況。同時に相手ができるのは一人のみ…。とにかく先頭の男を倒さないと、義経が危うい。
義盛は体重をつま先に預け、先駆けの槍の男に突っ込んで行く。槍の穂先を交わし、懐に飛び込むと柄尻で鳩尾を殴打し、下がって来た頭を左脇で抱え込むようにして、義盛はそのまま背後に倒れる。
頭頂部を強打した敵は気絶し、戦闘は暫く不可能になるが、その間に他の二人が義経に斬りかかる。刀の男は義経と白刃を合わせ、力比べをしており、長槍のもう一人は、既に弁慶の杖で地面にうつ伏せて居た。

「我ら三兄弟は…この様な所では果てぬ！」
義経と力比べをしていた男は、素早く後方に跳ね退き身構える。と、同時に義盛はその刀を持つ左腕を絡め取り、左足を掛け、更に左掌底で喉元を叩きそのまま後方へと引き倒した。
「ぐぅ！」

地面が柔らかかった事が、この三人には幸いしたのだろう。
義経達はその三兄弟の武器を奪い、そのまま業火の中へと戦いを求めて姿を消した。

…どれ程正気を失っていたのか…

「兄上…気は有りまするか？」
「丈夫である…が、見た事の無い業であった」
「我はあの仏僧の一突きに終わった…面目もござらぬ」
辺りはまだ戦が続いている。恐らく長くは失って無かったのだろう。だが、この場は既に負けの戦場とと化している事は明白であった。
「有盛、師盛…我は讃岐へと延び、再起と共に宗盛公に寄せる。お主らは如何致すか…」
「ここ三草山、そして一の谷本陣をお捨てになられるか、資盛兄様！」
「この様を見て分からぬか、師盛よ。源は奇襲に長け、狡猾にも刃向かう者のみを相手取っておる。自らの軍の消耗を最小限に抑え、この後の戦に備えておるのだ」
資盛は悲しい笑顔を見せ、言葉を続けた。
「天下は我らの物と等しい、そう思っておったが…祖父・清盛という名の傘の元で、我らは民に恨まれる政を行った故の報いかも知れぬ」

三兄弟は地面に倒れたまま、言葉を交わす。

「否…我等は平氏。討たれる訳が御座いませぬ…天子の血児にございます」
「天子の血児は、源も同じことよ。有盛、主は如何致すか？」
「我も資盛兄様に従い、讃岐へと渡りましょう…。師盛よ、一の谷を守り果てには讃岐へと凱旋し給え」

祖父に清盛を持つ、伊勢平氏の実力者として悪政の中枢に居た三

人。それぞれの思いを胸に秘め、それぞれの運命を別つ。

一方、そんな三兄弟と知らず見逃した義経達は、業火の合間を縫ってひたすら白兵戦を繰り広げ、驚くべき短時間で三草山を制圧した。

激しく息を切らせ、肩を上下させる兵士たちの損傷は少なく、一時の休養を取れば再び野山を駆け回れる程度であった。

「義盛、お主が使った先程の業も、居合という物か？」

先程の業、とは勿論投げ飛ばす業だ。

「いいえ、あれは柔術…と言っても、習った訳では有りません。昔の…友がよく使った業です」

「その友とは、坂本殿か？」

弁慶が聞く。この男は息を切らしていない…とんでも無いスタミナを持っている様子だ。

「いえ、土方歳三という名の鬼神です」

「は…はは…、修羅の友は鬼神か。願わくばその男も味方になって貰いたい物だな」

義経は座りこみ、息を弾ませて笑う。

「単騎で万の軍に値すると申しておったが…そこまでの力量は無いようであったな」

弁慶は先程の戦いで、同時に攻められた場合には単騎しか相手ができぬと判断した。無論、全てを文字通り受け取っていた訳ではないが、神憑り的な力が無い事は判明した。が、同時に同じ人として安堵の表情も垣間見えた。

「坊、我ら一万程の兵力で三草山という拠点を破ったのは、義盛の軍策の力。万に値すると言っても過言では無いわ」

くっくと笑いながら義経は言うが、弁慶はウンウンと頷きながら

も、南方の空を見ていた。

「ここから再度、獣道を伝い鵯越に向かいましょう」
「獣道だと？」
「はい、一直線に福原まで向かえば、恐らくこの地への奇襲を仕掛けた事が本陣に伝わり、迎撃軍と顔を合わせてしまいます。少しだけ迂回をし、敵援軍を交わして…」
「九朗義経殿は居られるか！」
義盛が話をしている言葉を遮り、少し穏やかになった火の間を駆け抜けて来る男が居た。
「如何致したか、実平！　我はここに！」
「おぉ、おいでましたか、先刻我が軍兵士が、南へと落ち伸びる平氏の中に、資盛・有盛・師盛三兄弟の姿を確認したとの報せがあり、こうして馳せて参りました！」
「「「三兄弟！！？」」」
義経以下三人は、同時に聞き返した。

「しまった…あの時の！」
義盛は眼を見開き、弁慶を見遣る。
「正しく、あの三人で御座いましょうな」
「何たる失策…！　すぐに追討軍を編成し、討ち滅ぼさねば遺恨となる！」
「義経殿！　この上軍を分散させてはこの先が…！」
義盛は焦った。当然である…作戦上はこの先更に二手に分ける事を考えており、ここで分けてしまってはその先の牽制にも成らなくなる。

が…実平がその言葉を遮る。

「我が向かう…義盛殿、十騎程度であれば支障もあるまい？」

確かに相手が三人であれば、十騎で十分だが…その先に伏兵が居たとすれば、返り討ちに会ってしまう。だが、その思案も待たずに義経は命を出す。

「土肥実平、済まぬが追討を命ずる…見事討ち取り、本陣へと参られい！」

「直ちに！」

実平はそう言うと、配下の者達に即座に声を掛けて集落から走り去って行く。正しく疾風の如く。

『自らの範疇に無い事が増えて行く。この先の流れが読めなくなって行く…。そもそも、歴史の流れを自在に出来る筈が無いのだ。皆各々の行動を取り、その積み重ねで時が動いて行く』

義盛は恐怖を感じ始めた、と同時に、違和感に気付く。

『ならば、自分がここに居るのは不自然ではないのか？　この時代の者達が自然と動く事で時が作られるのであれば、自分がここに居なくても、時は流れる。それはかつての幕末でも同じ事だった。刻の歪みを補正する力として自分が居ると思っていた、その事自体が間違いであったなら…』

「高松は…薄々とそれに気付いていたのか…」

義盛は思わずニヤッと笑っていた。

「如何致した？」

弁慶が不思議そうに問いかけると、義盛はそのままの表情で返す。
「いいえ、薄らと敵が見えた気がしたので…さあ、我々は手筈通り、参りましょう」
「敵……？」

義盛は息を整え、再び立ち上がり進軍の準備へと向かう。
敵も味方も、恐らくはこの戦が終わった後にその全貌が見えると、確信を持って。

そして、この先の義盛は劇的な変化を遂げて行く。

鵯越　～挟撃へ～

三草山の夜襲を終え、義経一行は二手に分かれ南下を始めていた。一方は猟師を先頭に、少し西側に進路を取って獣道に馬を走らせる本軍。一方は逃走させてしまった平家三兄弟の追討を行う軍。

本軍は平家側が出して来るであろう三草山への援軍をやり過ごす為、進路を少し西へと取っていた。

ひたすら福原を目指して馬を走らせる義経軍。そう、時間との戦いであった。

三草山に夜襲をかけた事で、平家本陣より援軍を送り込む筈であり、その間に本陣を狙い落とす。更に六日は平清盛の法要も相まって、戦の準備は整い切らない筈。それはこれまでの平家軍の戦いぶりを見ていれば想定できる。

つまりは、今しか無いのだ。

そして義経本軍は遂に鵯越へと到達する。

六日の深夜になってしまっていた。

「予定よりも遅れた…。範頼兄はもう突撃したやも知れぬな」

義経が絶望にも近い表情を浮かべていた。が、すぐさま後方に居る弁慶がそれを払拭する。

「戦が始まっておれば、これほど静かな夜では御座いません。範頼殿も、こちらの事情を鑑み、出陣を遅らせて居られるのでしょう…」

弁慶の言葉通り、辺りは静まり返っていた。

少し遅れて義盛が到着する。

「軍師殿、馬は苦手で？」

弁慶が悪戯っぽく笑いながら振り返り、言う。

「ええ、最も自らの脚で走るよりは良いですが…それよりも」
白い涎を垂らす馬を下り、義経の馬の隣に立つ。
「予想以上の悪路に遅れましたが、戦はまだのようですね」
山から見える福原…と言っても、深夜なので暗闇しか無いが…に戦火は見えず、戦は始まっていない様子。
「範頼兄が負けておらねば、開戦はまだかと」
ふふっと笑いながら義経は見下ろすが、開戦が未だ成って無い確信は彼にもあった。

「義経殿、更に軍を分けます…。主力部隊はこのまま福原へ向かい、夢野口の陣を叩きます。もう一軍は西へと進路を変え、鉄拐山の平忠度を襲撃します」
「一万を更に分ける、と言うか！　義盛殿、その真意は何処に！？」
「夢野口で開戦すれば、それに乗じて範頼殿も開戦する筈です…そうなれば、敵本陣である福原襲撃と判断し、そちらに注意が向きます」
「奇襲の更なる重ね掛け…」
義経が満足そうに笑いながら、顎を撫でる。
「時に差を生ませ、鉄拐山に居座る忠度の背後を取ります。その際に陣に火を放ち、混乱を生じさせます」
「成る程、あの火種を使う気ですな？」
弁慶はニヤリと笑う。この時代にあのような火縄は存在せず、松明を持っていない軍隊が戦中に火を放つなど、考えられない。

「良し良し。安田！多田！居るか！！」
策を聞いた後、義経は背後の軍に声を掛けると、馬を下りて二人が掛けより片膝を付いて首を垂れる。
「安田義定、ここに」
「多田行綱、我もこれに」

「二人に軍を預ける。ここ鵯越より万の軍を率い、巳へと進み夢野口を攻めよ」
「万を与えてしまわれては、我等の軍が…」
弁慶が義経の命を止めようとするが、義盛がそれを遮る。
「いえ…この先は少数の方が良いでしょう。百騎程あれば十分かと…我々は申の方位に進み、忠度を背後より攻め落とします」
「何とも豪胆…。無謀と成らぬ事を願うしか有りませぬな」
弁慶はやれやれという表情を浮かべ、白い頭巾を撫でた。

「討ち死にすればそれまで、ですよ」
義盛は、つい口に出すがそれを受け流す義経と弁慶。ここで討ち果てる事等、到底あり得ない事だと疑っていない。
「では、参ろうぞ」
軽い口調でそう言うと、道案内の猟師が怪訝な表情で義経を見上げ、
「あのぉ…」
「何だ、早く案内せぬか」
「いや、鉄拐山より下るおつもりか？」
「何か難題でも有りそうではないか…申せ」
「人ならば寂々と下りれましょうが、馬となればそうも行かぬ難所にございます。絶壁となっており…」

そう、鉄拐山を背にした忠度は、絶壁に守られた要塞に鎮座していたのだ。それ故堅固であり正面突破する敵にのみ集中できる陣営。しかもその正面には瀬戸が広がり、水軍を擁する平家軍が最も得意とする所だった。その言葉を聞いた誰もが、策の練り直しが必要だと感じた。が、その様な時間は最早無い。正面突破をするしか無いのか…。

「人が降りられ、馬が歩めぬ道など有る物なのか？　鹿はその崖

を下りぬのか？」
義経が険しい顔で問うと、猟師は冷や汗を垂らしながら、
「鹿は下りまするが、人馬が下っておる所は見た事が御座いませぬ」
その言葉に、義経と義盛は視線を合わせ口を揃えた。
「奇襲には適した道」
そう、誰も予想だにしない行動を取ってこそ、奇襲である。
数に劣る源氏軍が優位に立つには、最早此処しか無い事を確信した二人。そして、諦め顔のまま笑っている弁慶。
「さあ、参るぞ！」
そう安田と多田に声を掛け、彼らは大軍を率いて南東へと馬を走らせる。その様を見て、義盛は感心した。
『無謀とも取れる策を、彼らは対象を信じて邁進している…。良い軍だ…土方さんなら笑って見送ってるだろうな』
思わず苦笑いをしていると、義盛の心のどこかに声が響く。
【いや、まだまだ】
その声は、懐かしく心に残っていた声だった。
「ええい、奴らは何処に向かった…！」
三兄弟を追走していた実平は、その姿を見失っていた。
資盛・有盛・師盛の平家三兄弟の追討を受けた身でありながら、その姿を失った事で、苛立っていた。恐らくはもう海にまで出た頃

か…そうなれば、水軍を擁する平家軍に十騎程度では太刀打ちできない。
「これまでか…致し方ござらん、皆の者、このまま海へと向かい、海岸線に沿って福原へと向かう！」
追討ができず、このまま彷徨う訳にはいかない。責は自らが負うが、今は本軍へ合流し合戦へと向かう。
だがこの諦めと転戦が、源氏にとって大きな戦果を生む事となる。

同じ頃、三草山の奇襲を逃れた男達は海に居た。

「資盛兄様…師盛は真に放って行かれるのですか？」
「師盛の事は言うな。奴は福原本陣の戦が望みなのだ」
そう、三兄弟は三草山を出てすぐに、分かれていた。
資盛・有盛の二人の兄は、平家軍本陣のある讃岐屋島へ、末弟の師盛は仲間を見捨てて行けぬと、一人福原の本陣へと戻った。
「この戦は、我らが負けよ…。見事な奇襲と、追討軍の判断は敵ながら見事。執拗に福原に拘れば、平家に勝利は無くなる。それに気付ける者がどれ程居るか……。だが讃岐へと戻り水軍を要とし、屋島を城とすればまだまだ我ら平家に勝機はある」

彼らは一の谷を捨てたのだった。夜襲の見事さと、その後を考える狡猾さ。更には単騎でありながら弁慶と義盛の強さ。軍略に乗れる豪傑が源氏に揃っている限り、この戦に勝機は無い。

「見ておれ…。水に覆われる讃岐で、待っておるぞ」

兄弟は、静かな海へと船を漕ぎ出して行った。

鵯越　～逆落とし～

義経達一行は、鵯越から若干の武者を引き連れて南西へと進路を変える。
その道は既に人が通る道では無く、馬を駆っての進軍は非常に困難な道となっていた。剥き出しになる岩肌、跳躍しなければ足の踏み場も無い崖、時間は嫌が応にも過ぎ去って行く。
もう日は変わっただろう。
松明が使えぬ進行は、困難を極めていた。彼らは月明かりと猟師の足取りのみが頼りとなり、一歩間違うと転落する可能性が高い道を突き進んでいた。

七日早朝。

暁昇る頃に、その頂上へと辿り着いた。
幸い脱落者も無く、全員が辿り着いている様子だった。

「聞きしに勝る壁で御座いまするな」
弁慶は馬から下り、崖から下を覗く。暗闇を進み、そしてゆっくりと明るくなる空の下に、崖の下が照らされる。
３０ｍ程の崖。
そこを下り、少し行けば平家の陣がある。が…その崖を前に、全員が腰を引いてしまう。その様を見た義経は、猟師に問いかけた。
「其の方、鹿は下りると申したな？」
「へぇ…足場はそこと、そこに…。ワシらもそれに倣い、猟に出る時はその場を使うのが普通で…やけど人馬は」
そこまで言うと、義経が遮る。
「人と鹿が通れるのだ。馬も通れなくて如何するか？」
怪しく笑い、後方の武者に言う。

「馬を三頭持て」
その声に敏感に反応する武者達。精神的に疲れ切った上に、崖から下りろ等と言われればたまった物では無い。誰もが二の脚を踏んでしまう。そんな状況下で、義盛は自ら馬を下り、義経に差し出す。
「義経殿、これをお使い下さい。ここから見事下れば良し、転落すれば我らに勝ちは無くなりましょう」
その通りだった。主力軍はさておき、此処に居る百騎はこの奇襲が成功しなければ、勝ちは無くなる。むざむざ道を回り、忠度の正面から切り込む等、戦術も何も無くなる。水軍と忠度に挟み撃ちされ、果てるのが結末となる。
そして、既に馬から下りて崖っぷちに立っていた弁慶も、義経と義盛の顔を見比べた後、渋々と馬を差し出した。
「拙僧は身軽では無い…。義盛殿、背負って下りて頂けるか？」
弁慶の困り果てた顔を、クスッと笑いながら見た瞬間、義盛は自らが跨っていた馬の尻を叩く。

ヒン！と短く嘶いた後、馬は崖へと姿を消した。そして次の瞬間には、弁慶の馬も尻を叩き崖下へと向かわす。

実際には垂直に切り立っている訳ではない。
なだらかではある。が、人が大勢通る様な所では無く、まして馬に跨り下りれる程、勾配も緩くは無い。が、両馬は数少ない足場をガツガツと進み、時々上を見遣りつつも的確に下りて行く。勿論平地と比較すると馬の背は暴れ、しがみ付いていなければ転落する事は一目瞭然である。だが降りられない訳では無さそうだった。

「ふん…。この辺りの者は、ここを馬で下るなどとは考えぬのだな？」
義経は崖下に向かう馬を見下ろし、猟師に言う。
「はぁ…それはもう…」

その光景に、良い知れぬ高揚感を抱いたのか、その猟師はワクワクしている様に見えた。
「其の方、名は何と申す」
「は、ワシは三郎と申しまする」
「九に十一、そして三か…。其の方の山の知識、この後も使えるやも知れぬ。某の野党とならぬか？」
「は…？　あ、ははっ！」
「そうじゃな、名を与えよう。鷲尾三郎義久で如何か？」
「あ…有難き！！」
猟師をしていて、まさか源氏の旗頭に誘われるとは思わなかったのだろう。顔を真っ赤にして、満面の笑みのまま立ちつくしている。その様子を見た弁慶は、笑いながら言う。
「これ、殿の前で礼を尽くすのであれば、片膝を付き頭を垂れぬか」
猟師の三郎には、その辺りの礼儀など分かる筈は無く、更に顔を染め膝を付いた。そして、その様を見ていた一軍は微かに笑い声を広げた。

「笑えるお話しがお好きであれば、どうぞ崖下をご覧ください」
義盛は下を指さし、にこやかに笑っている。
「行き着いたか！」
勇ましく崖下を覗く弁慶だったが、次の瞬間、表情が曇る。
「これは…如何致した…」
「どうやら、馬の方も身軽では無かったようで」
落胆する弁慶に、笑いかける義盛。どういう事かと義経も馬より下り、下を見る。
「はは…得心である。要は道筋さえ間違わねば、人馬諸共無事下山、と相成る訳だ」

弁慶の馬は途中の足場を間違えたのか、義盛の馬からは少し離れた所に居り、脚をヒョコヒョコと引き摺っていた。

「馬も主人に似るのか…？　義盛殿の馬は導く様に、着地した場から動かぬわ」

笑いながら義経は再び馬へと跨り、スラっと刀を抜き叫ぶ。

「心して下れば馬を損なうことはない。皆の者、駆け下りよ！」

言うや否や、義経は先駆けて崖を下る。

『勇猛果敢…と言うか、無謀と言うか…。貴族育ちでは真似できないだろうな、あの人の戦法は』

義盛は軽く溜息を吐きながら笑うと、背後に居た武者達が一斉に動き始める。

「三浦では常日頃、ここよりも険しい所を駆け落ちているわ！この佐原義連、主に遅れるなど恥ずべき事！」

その声と共に、佐原は義経に次いで崖を下り、更にそれに続けとばかりに百騎は一斉に崖を下って行く。

馬の蹄の音と、土煙り、そして喝采にも似た雄叫びは崖へと吸い込まれて行く。百にも上る馬が次々に掛けて行き、下まで辿り着いた者達は止まる事無く、忠度の居る平家の陣へと駆けて行く。

「う～ん、壮観でしたね」

義盛は満足そうに頂上より眺める。その姿を見て弁慶と鷲尾義久は不思議そうに尋ねる。

「我等は如何すれば良いのか？」

「ああ、そうですね…我々にはあのような真似は出来なかったでしょ？　歩いて降りましょう…義久、道案内をよろしく」

悪ぶれる事無く、爽やかに笑い鷲尾を先頭に立たせる。

「何と…義盛殿は、初めより馬で下る事を避ける為に…？」

「無論です、振り落とされちゃ叶いませんからね」
「何処までも…策士、か」
弁慶は義盛を見て、軽く笑う。

「さあ義久、我等も行こう…先に戦場が待ってます」
義盛は軽く笑って鷲尾の背を叩く。まだ若い義久は、やはり血気盛んなのだろう。大きく頷き崖を下りだした。

「弁慶殿も、参りましょうか」
義盛はそう言うと、崖に向かう。その背中を見て弁慶は呟く。
「策士も結構でござるが…策を殿に使うは関心致しかねる…」
その声に反応し、チラリと背後を見遣り言う義盛。

「志半ばで果てたければ、馬の背に乗り御大将の前で塵になれば如何です？」

弁慶は何も反論できず、ただ二人の後に続き、崖を降りて行った。

既に七日の朝日は徐々に顔を出し、東では戦が始まっていた。

塩屋口の開戦（前書き）

遂に鉄拐山を下った義経一行。福原を囲む陣営で、徐々に開戦となって行く。

塩屋口の開戦

義経一行が鉄拐山を下りた頃、夢野口・生田口では戦が始まっていた。

これは示し合せた物では無く、範頼軍が六日開戦とのつもりで準備をしていたが、一向に開戦される気配が無い為に決起した事から始まっていた。

生田口で戦が始まり、夢野口陣が慌ただしくなった時、安田義定・多田行綱が好機と見て進軍。それぞれの判断が偶然にも連携になっただけの事だったが、この事により、戦況が一気に変わって行く。

平家本陣『福原』では、三草山夜襲の報せと共に戦闘準備に入りつつあった頃であり、正しく意表を突かれた形での決起が重なり、徐々に混乱が広がっていた。

が、平家とて戦になると踏んでいた以上、易々と本陣を明け渡す様な真似はしない。

生田口・夢野口共に平家は激しく応戦し、源氏は中々進軍する事ができない。…とはいえ、兵の数では圧倒的に平家が上回っている事から、源氏の奮闘ぶりも分かると言う物。

「夢野口も始めおったか！　義経が大将か！」

軍最後尾で指揮を執る範頼が、伝令の者に訪ねるが、伝令は首を振り否定しつつ

「否！　義経殿は鉄拐山方面へと向かわれたそうであります！」

「そうか…。義盛の策に乗ったか…。この地に明るくは無いが、そうであれば夢野口を背後から叩くのも時が来れば可能であろう！」

範頼は満足そうに伝令に休むように言い伝え、生田口の兵たちを

鼓舞する。
「耐えろ、今は耐え、退く事を選ばず、進む事を選ばず、しばし時を稼ぐのだ。この進軍、どうも八幡大菩薩の加護が我らについておる様だ」
口元は緩むも、その視線は鋭く西を見遣る。
「義経め…。途方も無く天に愛でた軍師を味方に引き入れたようだ」

「義盛殿、この調子で間に合われるか？」
馬に跨る弁慶は、不安な表情で問う。
「降りられますか？　さすれば私だけでも追い付く事はできましょう」
余裕の笑みを浮かべ、振り向く事無く答える義盛。弁慶と義盛は、1頭の馬に跨っていた。と言うのも、弁慶の乗っていた馬は逆落としの際に、脚を故障し、その場に放って来たのだ。
当時の馬は、ポニーの仲間であり体躯は小さめ。脚は太くて短く、野山を駆けるに適してはいるが、脚は速くは無い。
源義仲の支配していた地域、木曽が原産の『木曽馬』と呼ばれる馬が主流だった。それ故に大柄な弁慶と義盛を背に乗せての進行は遅く、じれったくもあった。
その遅さから不機嫌なままの弁慶と、飄々とした表情の義盛を乗せた馬は山間を抜け、少し開けた場所に差し掛かった頃、戦が展開された形跡が目に映る。
「義盛殿…これは」
「ええ、戦の跡ですね。どうやらこの地では源氏方の圧勝の様ですが…」
義盛の言葉通り、そこに転がるのは平家方の死体と、まだ装備さ

れる前の鎧だった。
まさか背後からの襲撃があるとは想像すらしていなかった様子で、鎧を纏う前に襲撃を受けている事が分かる形跡。
「奇襲は成功、という訳でありますな？」
「これ以上無い結果となっているかも知れませんね」
二人は満足そうに笑いながら、馬を下りた。

「さぁ、武蔵坊弁慶…。かつてない程の戦が、この地で始まっております」
「ようやっと、九朗殿の御為に働けまするわ」
弁慶はそう言うと、馬の横腹に掛けていた特大の槍を取り、柄尻でドンと地面を突く。

「義経殿！　熊谷親子の姿が有りませぬ！」
前線を戦う義経の耳に、思いがけぬ言葉が入って来た。
「何だと！？　まさか討たれたと申すか！　誰か、誰か熊谷親子を見た者は居らぬか！」
義経もまた馬に跨り最前線で勇猛に戦っているが、この親子の姿が見えない事に動揺を隠さずに周囲に聞いた。
熊谷直実・直家親子は兄頼朝の家臣。この戦で討たれたとなると兄に申し訳が立たない。

戦場に於いても兄を気遣う義経は、辺りを見回しつつ奮闘していた。その時だった。
「直実殿は先駆けを行い、忠度本陣へと攻め参りました！　子息の直家殿も後追いをしております！」
と、伝える者が出て来た。

「先駆け…一番乗りを果たすと？」
その伝令を耳にした義経は、俄かに表情が変わった。
「この軍の大将は我ぞ…。我を差し置き一番乗りなど、言語道断である！！」
義経は激昂し、叫ぶ。兄を思っていた男は瞬間に怒りを頂点に持ち上げ、馬を走らせた。

そう、義経と言う男は普段温厚であるが、激情家でもある。
一度火が付くとそれを治める事ができず、暴走してしまいがちになるのだ。
そして一方の熊谷直実という男は、武勲を立てる事こそ主への忠誠の顕しとし、義経では無く頼朝に従っているという意識の違いにより、今回の先駆けとなっていた。

「熊谷親子を追え！　一番乗りを許すな！」
これもまた、兄に戦場を任されたと言う責任からであろう。
後方の義盛達からは想像もできない戦へと、その趣旨が変わっていた。

一方、先駆けをせんと駆けた熊谷直実は、海へと逃走を始める平家軍の中を斬り進んでいた。
「情け無し！　平家に武者は居らぬか…我こそは武蔵七党が一角、熊谷直実（くまがいなおざね）である！　腕に覚えある者は勝負されい！」
名乗りを行うと、そのまま本陣へと突入して行った。
そしてそれに続き、息子の直家と武蔵七党の平山季重も後に続く。
僅か三名の武者が本陣へと一番槍を突き立て、更に堂々と名乗った事により、鎧を纏いながら平家は四散していた彼らは、覚悟を決めたかその三名に向き合った。

「僅か三名で乗り込む等と、何と天晴！　今ここでその首を討取ってくれるわ！」
平家陣営からも声が上がる。
そして戦となった。

常識で考え、この人数で敵う筈もない事は明白である。
熊谷親子と平山はあっという間に取り囲まれ、その攻撃をかわす事がやっとであった。
徐々に包囲を狭められ、彼らは馬を捨て、奮闘していた。

「御待たせ致した！　源氏方土肥実平推参！」

熊谷親子を取り囲んでいた平家の背後より、声が聞こえた。そう、平家三兄弟を追討していた土肥実平である。海岸線まで辿り着き、遂にその背後を捉える事ができずに、そのまま本陣へと向きを変えていたのだ。

「土肥殿！　お恥ずかしい。一番槍がこの有り様故、ご協力を！」
「申すな！　合い分かっておる！」

そう叫ぶと、僅か十騎の土肥軍は、平家軍の背後から恐ろしいまでの勢いで突っ込んで来る。
熊谷親子はギリギリの所で命を拾ったのだ。

が、事の成り行きとは言え、軍を分けて仕舞わざるを得なかった義盛の策が、転じて奇襲を有利に運ぶ結果となって行く。

僅か十騎程の土肥軍と、熊谷親子・平山の少数軍は、そのまま平家の包囲網を蹴散らし、再び四散させる事に成功。更に奥へと進もうとするが、土肥に止められる。

「待たれよ、僅か十騎程でこのまま奥へと進めば、奇襲と言えども兵を徒に失うばかり。ここはまず、名のある武将を討ち、本陣の到着を待つが本策かと」
確かにその通りである。本陣への一番乗り、一番槍は既に為した。この後は後発軍の到着をまってでも遅くはない。そして既に平家本陣の守衛は四散しており、本軍到着後は数での争いにすら成り得ないだろう。

「承知致した、某はこれより四散した平家の者を追討致す！」

そう言い残すと、土肥軍から離れて行った。
「あの男…後に義経殿の敵とならねば良いが…」
ずば抜けた行動力で手柄を欲し、その為には命すら軽視する兵。そして、主は頼朝のみとする直実。
土肥は薄らと影を感じながらも、平家本陣への突入口で奮闘をする。

同時刻。本陣中枢の福原に最も近い夢野口では、安田義定・多田行綱が七千の軍を引き連れ開戦していた。
こちらは奇襲とは言え平家本陣の中枢のある場所故に、平家の抵抗も激しく、易々と落とせる筈も無かった。そして同じく生田口でも範頼率いる五万の兵が開戦をする。
少数が本陣を奇襲した後、本軍が想定通りの生田口を攻める結果となった。
その情報が各地に伝えられた頃、その周到さで平家中枢は混乱に飲まれ、逃亡を謀る者が続出。また、戦意を消失し討たれる者まで続出して行く。

五万の兵が生田口に集結し、そこに戦力を集めた平家はその後、三草山に夜襲をかけられ、本陣から応援を向けた直後に七千の兵に奇襲を掛けられ、更に西方から百騎の奇襲が重ねられる。
同等以上の戦力を有していたにも関わらず、奇襲による戦力分散と波状攻撃に、次々に壊滅する陣営。

自然の要塞である鉄拐山を背後に有する塩屋口に攻め行った義経は、遂に名乗りを上げた。

「我こそは源頼朝が弟、九朗義経にある！　平忠度殿、尋常に勝負為され！」

後に奇襲の天才と呼ばれる、源義経誕生の瞬間であった。

塩屋口の開戦（後書き）

感想など頂けたら、モチベーションと共にテンションも上がります。
よろしくお願いします。

忠度の最後（前書き）

塩屋口に攻め入った義経軍は、大将忠度の姿を追い本陣へと突き進む。

忠度の最後

義経が塩屋口に攻め行った時には、既に守衛に就いていた平家軍が四散しており、残る本陣の者達は戦闘準備に参加していた。無論、彼らは僅か十騎の土肥軍と戦闘を行っており、ここに来て七十騎の義経軍到着が悪夢に感じられただろう。

義経を先頭に、土肥軍の後方から更なる攻撃を加えつつ、塩屋口本陣へと入りこんで行くが、一向にその陣の大将と思われる忠度の姿が見えない。

「平忠度殿は何処か！　鎌倉は源頼朝が弟、九朗義経である！」

義経はそう叫びながら土肥軍と合流し、奮闘していた。徒に時間だけが過ぎて行く。

「奇襲に次ぐ奇襲…更に波状攻撃。正面からの戦では敵うまい」

混戦となっている塩屋口で、何故か悠々と生き延びている男がいる。その男は義経より遥か後方で槍を構えるが、一向に戦う素振りを見せていない。

「奇襲には奇襲…に御座いますな？」

傍に立つ男が同じく槍を構えつつ、ニヤリと笑う。

「まさか味方に紛れた敵に、背後から刺されるとは思いもよるまいぞ」

混戦が続く塩屋口の戦いが、敵大将未確認の中で長引き、焦りが出る源氏軍に対してその男は敵意の笑みを浮かべた。

「忠度様、我が御守り致す故一気に義経めの背を貫いて下さいまし」

「済まぬな…我が身を任せる」
そう、平忠度は源氏兵になりすまし、混戦を利用して忍び込んでいたのだった。その二人は、エイヤァと掛け声を上げ、一気に義経までの距離を詰めようとした、まさにその時…。

「各々方、敵は前方では御座らぬぞ！」
そう言って忠度の鎧を背中から掴む男が居た。

「何奴じゃ！」
忠度は慌てて振り向き、男の顔を確認する。
「これは妙な…某の野党にお主等のような男は記憶に無いが…？」
忠度を止めた男は、ギラ付く槍先を前方に向け、自らの兜をグイっと上げて忠度の顔を確認しようとする。その瞬間、忠度の隣にいた従者が、その槍を上から叩き下ろし叫ぶ。
「お行き下され！　後は我が！」
「合い分かった！心意気を無駄にはせぬ！」
そう言うと一目散に前方の義経に向かおうとするが、その背は既に視界から消えている。
「ええい、忌々しい！」
忠度は叫びつつも辺りを見回す。が…前方へと脚を向けた瞬間、従者の悲鳴が忠度の耳に入る。驚いた忠度は脚を止め振り返り、一突きにされた従者の亡骸を確認した。

「其の方…名は何と申す」
「我が名は武蔵坊弁慶。義経殿の野党に参じた坊主にござる」
そこには先程、自らを呼び止めた男とはまた別の男が、槍の先に従者をぶら下げて立っていた。
「弁慶殿か…申し訳ござらぬ」
「何の、岡部殿はその男を討取って義経殿の御前に」
弁慶はそう言うと、従者の亡骸を振り払う様に槍を振りまわした。

「忝(かたじけな)い」

岡部と呼ばれた男は、再度槍を取りつつ忠度と向き合う。そしてそれを見た弁慶は、そのまま前方へと走り去り…と言っても、そう速くはないが…一騎打ちの舞台を整えた。

「其の方の名を御聞かせ頂きたい」

岡部は忠度に尋ねる。その設問に、覚悟を決めた様に口を開く忠度。

「我が名は忠盛が六男、忠度なり」

その名乗りに岡部は驚きを隠せない。忠度と言えば清盛の腹違いの弟であり、紛れも無く平家の大将格である。その男との一騎打ちをこの場で繰り広げてしまうとは、運が良いのか悪いのか。

「御大将で御座ったか…。不躾で御座った。我が名は岡部　忠澄。武蔵七党は猪俣党にある」

「武蔵の夷めか…。其の方、我の何処で敵と合い分かった？」

「我ら源氏には、お歯黒の者は居らぬ故」

岡部はニッと笑い、自らの歯を見せた。貴族の暮らしに浸ってしまった平家軍大将格は、その習わしから歯を黒く染めていた。そこを見抜いたのは扱く自然であり、そこを隠さぬ忠度も落ち度があった。

「敵陣ただ中においての会話が災いしおったか…敵陣に忍ぶ事で油断が出たわ」

忠度は口惜しそうに歯を食いしばり、槍を降り上げ岡部に殴りかかった。

当時の一騎打ちとなると、周囲の者は手出し無用という風習があった為、この二人の戦いに割って入る者達は居ない。と、言ってもその周辺には既に平家軍はおらず、百騎程の源氏軍が本陣奥に向かい突入していた頃であった為、その周囲には兵士は疎らでしか無かった。

「我ら平が…滅びる事なぞ、無いぞ。清盛公の、我が兄の思いは滅びはせぬ」
「何を仰るか。時勢が既に清盛公を欲してはおらぬ。熱病にてその命を終えた事こそ、天が平を手放した証でございます」
槍を交えたまま、二人は言葉を交わす。そして、その後に岡部は忠度の腹を蹴り、距離を取る。

「ぐぬっ…ぐふっ」
見事に水月を蹴り込まれた忠度は、構えながらも息を整える。
「ふぅ…ふぅ…。岡部と申したか…若いな」
息を整える間、ゆっくりと槍を構えて待っていた岡部に、忠度は警告にも似た言葉を投げかけた。そして、次の瞬間に腹を目掛けて槍を放ち、すぐさま太刀を引き抜き斬りかかる。
思わず槍を交わした岡部は、二の太刀が振られる様を眺めるしか無かった。

『斬られる…！』

太刀は岡部の喉元に向かい、横に撫でられ、鮮血が舞う。

「一騎討ちに横槍とは…卑劣なり…」

そう呟いたのは忠度だった。
岡部の喉元を横に薙ぎに行った忠度の太刀は、左手に握られたまま地面にボトリと落ちていた。そう、鮮血は忠度の腕から噴き出た物だった。
「我にそのような事を言われても…。ただの野蛮人故に分かりません」
何食わぬ顔で忠度の左腕を斬り落とした男は、そのまま納刀して本陣奥に走り込んで行った。

「野蛮人めが…」
怒りに染まった目は岡部を見遣る。
「確かに…だが我はこの瞬間、命を拾った」
そう言うと、岡部は躊躇なくその地面に落ちた太刀を拾い上げ、忠度の首を刎ねた。

「言う通り…奇襲・横槍は卑怯とも言える。だが、強い」
忠度の首を拾い上げ、複雑な思いで義経の向かった本陣に視線を向ける岡部は、そのままゆっくりと義経を追い始めた。

激戦の末に塩屋口の本陣を叩いた義経は複雑な表情のまま、岡部を幕に迎えた。

「天晴な働きぶりであった…」
自らが大将の首を討つつもりの義経に対し、岡部は厳かにその首を差し出した。
「我一人の働きでは御座いませぬ…。そこに居る男が、助太刀を」
岡部の視線の先には、兜すら身に着けていない男が、太刀を片手に血まみれになって立っていた。
「…義盛殿が？」
肩で息をしながら、まるで記憶に無い様子の義盛。
「申し訳ない…何の事だか…。崖を下ってより、残党を蹴散らしつつ弁慶殿の背中を追って参りましたので、戦いの内容までは…」

そう、馬から下りた後、槍を取った弁慶は一目散に走り去ってしまった。そしてその背を追いかけるように義盛は走ったが、残党が弁慶に気付きその道中にあふれ出て来たのだ。それらを倒しつつ義経の本軍に合流する為に走っていた中での事で、正直記憶に薄い。

「坊に追い縋るのに、そこまで苦労したと？」
義経は愉快そうに笑い出した。不機嫌そうな表情は一転して無邪気な笑顔となった。
「猪や熊を追いかける術は、生憎存じ上げておりませぬ故」
「拙僧は猪でも熊でも…」
弁慶はムッとして義盛を見るが、義経は更に愉快そうに笑う。

『…この御仁達は、戦に於いて感覚を持っておられるのか？　修羅の如く戦に入ったと思えば、こうして笑い合う…。これではまるで阿修羅ではないか』
奇襲と戦闘に於いて、人知を超えた業を感じた岡部は、この男達に恐怖を覚える。そして彼は、この一の谷の戦の後、義経軍に加わる事を避けるようになり、再び戦線に戻る時は忌まわしき輪廻の時となる。

平忠度、討取る。
この報せが届いた両陣営の『生田口』『夢野口』は、それぞれに声が上がった。
更に塩屋口では既に大半の兵が海に逃れ、屋島へと向かい逃亡を謀っているとの報せも届く。この事により両陣営は完全に流れを悟った。
後方（西方）からの支援が終えた『夢野口』は、背後からの襲撃に晒されることになり、しかしここを退けば、更に前線の『生田口』が挟撃される。
源氏には士気を高め、平家には混乱を招く報せとなり、義経の別働隊である安田義定、多田行綱は平知章、平業盛、平盛俊、平経正、

平師盛、平教経を相次いで討つ。三兄弟で三草山に居た師盛も、ここで源氏に討ち取られたのだ。

そして、その報せが各陣営に届く同じ頃、海岸線では岡部と同じく、戦線から身を引く事になる一人の男が、平家の兵を追い掛けていた。

忠度の最後（後書き）

感想など頂けたら、モチベーションと共にテンションも上がります。
よろしくお願いします。

敦盛と直実（前書き）

奇襲作戦において、圧倒的な勢いを持った源氏軍。平家軍は逃走戦を余儀なくされる。

敦盛と直実

鉄拐山の忠度本陣を落とした頃、生田口・夢野口からは、塩屋口から立ち上る煙が見えたと言う。

これは当然、義経軍が僅か百騎程度で本陣を落とし、火を放った証拠である。そしてその事を承知しているそれぞれの軍は、これぞ勝機と一気に流れ込んで行った。

一つの陣営を落とされた平家、そして一つの陣営を落とした源氏。両者の士気はみるみるその差を広げて行き、最早これまでと平家の大将格は皆海へと逃亡を始めていた。

その中には平家が「天皇」と掲げる『安徳天皇』、その母である『平徳子（建礼門院）』、そして総大将である『平宗盛（清盛の三男）』も居た。そう、先頭を切って総大将が逃げ出していたのだ。無論そこには安徳天皇を守る、という使命もあったのであろうが、これが後に、平家の大混乱を招く引き金となる。

総大将不在での戦闘は、最早戦闘にならず、規律のとれた源氏軍に圧され放題。

更に、水軍では平家に一日の長とでも言わんばかりに、次々に船へと乗り込み海上へと逃れる者達…。

当然、水軍を持たない源氏軍としては、海上の平家を討つ力は無く、そのまま野放しにせざるを得ない状況となっていた。

そうなると、地上戦では源氏の独壇場と化した。

平家軍は如何にして海上に逃げるか…。源氏軍はそれを阻止するか、という戦へと変貌を遂げる事となる。

あの男が来るまでは。

時は少し遡り、地上での戦が混沌として来た頃、一番槍を突き立てた熊谷直実は、海上へと逃亡を謀る平家軍の討伐を行っていた。

『敵大将格が居るやも知れぬ』

という思いでの単騎行動だった。

海岸線では命からがら逃げて来た平家軍を、ひたすら阻止するという、戦とは似て非なる物だった。

「後方支援…しかしながら大将格の御姿も見えず、雑兵ばかり。この戦はどうなっておる…」

正しく掃討戦と言うべきこの戦に、その意味を見出せなくなって来ていた。大将格を討ち取り、勝ち鬨を挙げ、戦が終わる。これまで繰り広げていた戦とは性質が違う事を、誰よりも敏感に察していたのかもしれない。事実、この戦の後に義経軍を離れ鎌倉に戻る者も大勢居たと言う。

「平家を壊滅させる為の戦…か。この先のある若者も居るであろうに…」

直実は共に参戦している息子を思い出しつつも、言い知れぬ脱力感と闘っていた。

その時だった。

波打ち際から、小舟を押して海へと逃亡を謀る武者が見えた。その身形からして、平家の大将格かそれに近しい人物であると瞬時に判断できた。

「待たれよ！　平氏の大将格とお見受け致した！　某と正々堂々の一騎打ちを所望致す！」
直実はその武者の傍に馬を止め、持っていた槍を砂浜に突き立てて太刀を引き抜く。
小舟に寄り添い、逃亡を謀っていた武者は海中で足を止め、暫く思案する。
「我こそは熊谷直実なり！　尋常に勝負致されい！」
その名乗りに、若武者は涼やかな表情を一変させた。
「熊谷…裏切り者の血筋…！」

そう、熊谷とは平家と同じく桓武天皇の流れを組む家柄（諸説あり）。元は平家に仕えており、前九年・後三年の役で源氏と戦っていた。
それが今度は源氏に付いたのである。裏切り者と称されてもおかしくは無い。が、当然彼にも言い分があり、その後の平家の悪政に嫌気がさしたのだ。

「裏切り者…とはな。しかし悪政を敷き民を苦しめるが為に、我等は戦って来たのでは御座らぬ」

その言葉に、若武者は小舟から手を離し、ゆっくりと砂浜に歩いて戻った。
「悪政と申すが、今の世は如何か？　政を行う者が天下を取り、我が物と言わんばかりに独裁をする。今まさにその手先となろうとしておるのが、お主ら源であろう…。我等と何が違うと申すのだ！」
そう、ただの権力争いだと言っているのだ。そして若武者は砂浜に上がり太刀を抜き、直実に剣先を向け、更に言う。
「端より悪政を敷く為に、中央に上った訳では御座らぬわ…。力の魔力に執り付かれ、我を失した顛末である。その立て直しは、同族である我ら一門が行う！」

憂いていたのは源氏だけでは無かった。

暫くの無言が、二人を包み込む。

背後では、平家の掃討戦が次第に近付いている。

「無情…で、ござるな」

直実はそう言うと、刀を振りかざして若武者に斬りかかった。元々弓の名手として知られていた直実だが、一騎打ち・一番槍に拘りこの戦では弓は使っていなかった。当然、若武者もその太刀を鎬で受け、やり過ごしつつ距離を取ろうとする。が…戦経験では直実が上だった。

太刀の柄で後ろへと跳ぶ若武者の頬を殴りつけ、砂浜に倒す。そして、すかさず馬乗りになり兜を脱がす。

「…貴方様は…どなたか…？」

兜の下には、まだ幼さが残る顔が出て来た。そして、年の頃は直実の息子、直家と同じ頃…。その直家は一番槍の直後、平家側の弓にて重傷を負い、戦線を離脱しており、その仇打ちと言う事もあり単騎にも関わらず逃亡を謀る平家軍を止めていたのだ。そして、その戦の虚しさに疑問を感じていたのだ。

しかし、直実のその設問に、馬乗りされた若武者は首を振って答えた。

「名乗る事は御座らぬ。首検分すれば明白になるであろう」

若武者は一切の迷いなく、そう答えた。

『我が息子の仇打ちの為に、この若武者を斬れば某もまた、仇とされる』

直実は、戦という独特の価値観から無常を知る。

次第に掃討戦の音が近付く。恐らく源氏の勢いが増して来たのだろう。このままこの若武者を逃がせば、何れかの手の者に討たれる事は間違いない。
知らぬ間に、馬乗りになる直実は涙を流していた。そして、その事に気付いた若武者もまた、恨み無く笑顔で言う。
「斬られる事が天命であれば、帥の手に掛かって…それが最後の望み」
そう言って目を閉じた。
直実は、切っ先を砂浜に当て、物打ち（切っ先から三センチ程の場所）を若武者の頸動脈に当てる。
「無情…無情…。この直実の手におかけ申して、後世のための御供養をいたしましょう…」
そう言うと、目を閉じて念仏を唱えながら、梃子の原理宜しく柄を押し下げた。
鮮血と涙で、直実の顔が濡れる。
そして、その若武者の腰にある包みに目が行く。首級を包み申し上げるには上等の布であった為、それを拝借しようと抜き取り広げると、そこには一本の笛が包まれていた。
よく手入れされており、直実も見た記憶のある名の有る笛…。それは平忠盛が鳥羽院より授かった、青葉と言う笛だった。
「敦盛殿か…名乗り、従えば落とさずに済んだやも知れぬ御命を…」
直実は、その笛を抱きしめ、声にならぬ悲鳴となった涙を、滝のように流した。

後に彼は戦を離れ、出家をする。
この戦の功により安芸国に所領を構える事を許され、その地に敦盛を手厚く奉ったと言われている。

悲劇を生む戦場は、止まらない。
場所を変え、敦盛が討ち死にをした少し後の生田口・夢野口では、相も変わらず海上へと逃亡をしている平家軍と、勢いを増した源氏軍が地上で暴れている。

が、その戦況を見た平家軍は、とある転機に気付く。
海上に逃げる平家軍を見逃している為、海上には既にひと戦展開できる程の兵が居る。

それらを気に掛ける事無く、陸地戦で暴れ回る源氏軍。
海上の小舟は、示し合わせたかのようにゆっくりと分かれ、地上に向けて弓を構える。

「放て！」

どこの船からともなく、号令が飛ぶと、矢は放物線を描きながら地上で背を向けて暴れる源氏軍を襲う。
形成逆転である。
源氏軍はしばらく何が起きているのか分からず、背後に全く気付かなかったが、それが海上からの攻撃と気付いた瞬間から、我先に

と海から遠ざかろうと戦そっちのけで右往左往し始めた。
まさしく水軍を有する平家ならではの攻撃。これを見た範頼は、見逃した敵の大きさに後悔と恐怖を覚えた。と、同時にやはり壊滅させねば成らぬと、心底思えた。

「だが…如何ともし難い…」

この状況を見れば、誰もがそう思うだろう。
源氏軍は立木に隠れ、小屋に隠れ、戦どころでは無い。
一方の平家軍は悠々と船に乗り、逃亡を開始している。
「口惜しい…奴等は何をするべきか分かっておるわ…」
範頼は下唇を噛み締めつつも、手立てが無い事を後悔していた。
確かに陸から弓は打っているが、あちらは散在していて的が絞り辛い。逆にこちらは密集している事で、的になり易い。

「九朗…義経ならば…義盛ならば、如何する…」
範頼が思案を巡らせていた、その時だった。
彼の視界に映る海上の平家軍が、次々に海面に投げ出されている。
それも倒れ込むように。
目を細めてよく見ると、矢が飛んでいる。それも何十本と…。

「わはは、待たせてしもうたかいのぉ！」

訛りだ。どこかで聞いた事のある、大声の訛りがある言葉だ。

「坂本…！」

海上から一艘…いや、三艘の小舟を繋いだ船が、平家軍に向かって矢を射ながら近付いて来ていた。

その船には木の盾が施してあり、敵の矢を防いでいる。
「ちゃちゃちゃ、漁師を説得しちょったんじゃが、埒が明かんでのぉ…ほいたら、こん近くに水軍（海賊）が居るちゅうやないがか。ほいで、戦の話しと、ほれ…この通り水上の要塞を教えてやったがじゃ」
浜辺まで漕ぎ着けた船から、ひょいっと龍馬が飛び降り、次いで与一も弓を放ちつつ降りる。
「まぁ、こん盾の案は富士川の義盛殿の引用じゃがの」
そう言って大いに笑った。

源氏水軍は、みるみる内に平家軍を射抜き、その数を減らして行く。
「まさか…義盛殿の秘策は、坂本殿が本命であったか…！」
「それはどうか知らんが…、お？　どうやら戦も粗方終わっちょるようじゃのぉ…」
龍馬は眼を細め、夢野口方面を見遣る。
「坂本殿！　この後は如何致す気か！」
声を荒げるのは与一。
「戦場を与えてやる等と…この後水上戦に成らざる時は、水軍を一体…」
「心配せんでもええ。しっかり考えちゅうき」
楽天的に言い放ち、海上を見ると既に小舟だけになった平家軍が散り散りに逃げて行く。

「こん先は…讃岐は屋島かいのぉ…」
龍馬は腕組みをして、南東の海を見る。

だが、それとはまた別に、彼らを待っている者が京に居る事は、

まだ誰も知らない。

敦盛と直実（後書き）

感想など頂けたら、モチベーションと共にテンションも上がります。
よろしくお願いします。

福原陥落と捕虜（前書き）

龍馬が水軍を率い、形勢は決定的となった一の谷合戦…。

福原陥落と捕虜

瀬戸内に出現した、龍馬率いる『源氏水軍』の勢いは止まらず、海対海、海対陸の戦闘で圧倒的に有利に戦を進めていた。海に逃げた平家は矢に射抜かれ海上に転落、海上に逃げようとすれば源氏陸軍からの追討軍。

戦はこの時に全てが決まった。

中には人混みを盾にして、小舟に割って入り、そのまま沈没する船も出る。

陸に上がった龍馬と与一は、範頼に寄り添いその様を眺めているだけだった。

少し離れた夢野口でも同じ状況となっており、源氏水軍こそ到着はしていないが既に主力武将は奇襲による波状攻撃で討取られ、統率が取れていない。

海上に逃げようにも船の数が限られており、水没する船、乗船前に討取られる者…。

戦は既に終わっていた…。

一の谷での平氏の被害は、兵卒のみならず『平通盛、平忠度、平経俊、平清房、平清貞、平敦盛、平知章、平業盛、平盛俊、平経正、平師盛、平教経』という平家一門の主要人物を失った事が大きく、まさに源氏軍の大勝利となった。

勿論その原動力は義経率いる奇襲別働隊であることは確かで、神出鬼没の軍隊は油断していた平家軍の中枢を大混乱に陥れるには十分すぎた事が大きい。

残るは残党ばかりとなり、一の谷の平家本陣である福原に義経・範頼が到着したころには戦も終焉となっていた。

「平家一門、十二名の首級か。まずは上出来ですか」
「九朗よ…これ以上何を望むか」
「頼朝兄様は殲滅をと望まれておりました。殲滅とは行きませなんだが…」
義経と範頼は、武将達を交え首級を揃えて戦果を話し合っていた。当然そこには義盛や弁慶なども居たが我関せずという表情で小舟を眺めていた。
「殲滅とはまた豪儀ではあるが、それに近しい戦果が得られたのだ。鎌倉でも得心して頂けるのでは無いか？」
範頼は周りの武将の働きに、満足そうに笑う。その周りの武将たちもそうだ。皆がこの戦は大勝だと実感していたし、事実その通りである。
だが、義経には違和感があった。

「殲滅…という事は、安徳天皇を含めての命でござろう？　果してそこまでの命を下し、後白河上皇との密約が完結される物であろうか」
「天皇が二人即位する、という事を避ける為の最終手段ではないか？」
義経な不穏な憶測に対し、怪訝な表情のままで返す範頼。
「恐らくは後白河院はその意向でござろうが…兄様がその命に素直に従うのが気に掛かる」
「確かに…天皇家の暗殺など、易々と動ける物では無いからの…」

「なに、動くのは義経公であって、頼朝公では無いがやろ」
フフンっと緊張感の無い声で割って入る龍馬。海を見つめて義盛たちと話しをしていたと思えば、いつの間にか参入している。
「どう言う事だ、坂本殿！？」
「天皇家を手に掛ける者には災いが降る…っちゅう事を聞いた事があるがじゃ」
相変わらず緊張感の無い声で言いながら、寒そうに両腕を懐に隠して人の輪の中に潜り込んで来る。
「九朗を捨て駒にしておる、とでも申したいのか？」
範頼は大声で笑い飛ばした後、キっと龍馬を睨み付ける。
「我等は源氏復興の為に立ち上がったのだ。天皇家に背く為では無いわ！　鎌倉殿も同じ事、殲滅とは平家一門であって安徳天皇は含まれておらぬ！　九朗…帥も早合点するではないぞ！」
この声は当然、義盛にも聞こえていた。が、敢えて聞こえぬ振りを通し、龍馬に任せていた。そんな事を知ってか知らずか、龍馬は続ける。
「後白河院は天皇後継を正式に我が派閥による物と考えちょる筈じゃ。ほいたら、何が必要になるがじゃ？」
その言葉には、義経も範頼も返答ができない。答えを知らない訳ではない…。その答えを言えば、この戦い自体の意義が刷り返られている事になるのが分かるからだ。
無言の時間が流れる。周囲では時折残党の声が聞こえ、その度に終えて行く。
「捕え申した！」

沈黙を貫いていた義経達に、ザワツキが広がる。

男は息子を探していた。
まだ平氏が退却を始めて間の無い頃だった。
範頼の軍に属していたその親子は、一番槍を突き立てると意気込み、敵本陣へと突っ込んでいた。
だが、父は同時に二男を見失い捜索と戦を繰り広げていた。

「景高！　何処にあるか！」
父は二男の捜索に躍起になっていた。というのも、旗色が変わり平家が退却を始めた頃、父の景時はその流れに乗って一度戦場から離れたのだ。息子たちも当然、深追いはせず引き上げたと思っていたがその姿は何処にも無く、再度敵陣に突入して二男の身を探していた。
父の名は「梶原景時」。富士川の戦いで先陣争いをした武者だった。

「口惜しや…我が息子を見失う等と…」

平家軍が次第に減って来た頃、尚も息子の姿が見えない。
戦は既に終わる頃だというのに…。焦りが景時を襲う。もう命は繋いでないだろう…、戦とはそういう物だ。どこかで果てれば首級は失う事もある。父よりも早く逝く事も戦の常である。

景時は深く悲しい溜息を吐いた。そして捜索をと息子の命を諦め、本陣へと戻ろうと馬を返した時だった。既に倒壊している家屋から、馬が人を乗せて歩み出て来る。しかも景時の存在には気付いてない。

瞬時にして弓を構えるのは、武人としての悲しいまでの性だろう。

その敵が周囲を見回し、一気に駆けだそうとした瞬間に景時は弓を放った。強弓は矢を一直線に走らせ馬の首を射抜き、その場に倒した。

景時も馬を走らせその武者に駆け寄る。

「何者ぞ！　名乗られい！」

槍を敵武者の首元に突き立て、声を張る。

「これまでか…我ら一門も随分と討たれた様で…」

その一言で平家の者である事は十分過ぎて分かった。

景時は馬から降り槍を退けて言う。

「某は梶原景時。今は源に就きし者にある。…重衡公とお見受け致したが？」

「如何にも。我は清盛公が五男、平重衡にある。我が首を取り手柄とするがよい」

男は潔くも絶望的な状況を把握し、首を差し出した。

「ほう…足掻こうとはなさらぬか」

「既に勝敗は決して居る。無駄な足掻きは望まぬ…。一門と共に、討たれる覚悟あっての事」

その言葉に景時は大きく頷き、口元を緩めた。

我が息子も、きっとそう思い戦場にて果てたに違いない…と。

「お見事な御覚悟にあらせられる」

景時はそう言うと重衡の腕を取り、その場に立たせた。
「既に勝負は喫しております故、貴公の首級を頂く理由も御座らぬ」
そう言うと、高らかに声を上げた。

「捕え申した！」

その声を聞いた義経達は、一斉に声の方を向く。暫くすると、馬に乗った景時と、それに引かれた平家武者が陣に姿を現した。
「おお、景時殿…その武者は？」
範頼が問うと、景時は馬から降り膝を付き口を開く。
「平重衡公にあります」
敵の中核にある男を討取らず、捕縛して連れて来た事への驚きと怒りが義経を包んで行く。
「何故生かしておる？」
切れ長の目が、殺気を帯びて行く。
「戦は終わっております故」
「平家殲滅が兄様からの命にあるぞ。今すぐここに首を刎ねぬか！」
無情な命が下るが、景時は静かに断る。
「無情にございまする。それは戦では無くただの殺生…」
そこまで言うと、義盛が義経の背後に立っていた。そしてようやく口を開く。
「なるほど…これは良いですね」
義経は後ろを振り向き、怒りを表した。

「敵を生かして何とするか！」
「敵だからこそ、活かせるのです」
そう言うと義経に耳打ちを始める。
「殲滅の裏にある指令…恐らくは神器にあります」
「神器…等という命は出ておらぬぞ」
変わらず怒りを押さず、しかし小声で答える。
「そうでしょう…。京に近い義経公に命じてしまっては、直接上皇に差し出されてはいけない」
「何故だ。返上が目的であらば、何故……まさか…！」
「恐らくは、神器を手中に収めようと算段しているはずです。理由は分かりませんが」

二人はすっと重衡に視線を移し、同時にニヤリと笑う。

「待て…其の方等…今、何を思案した」
義経と義盛の視線に、何かを感じた重衡は危険を察知し、綱で結ばれたままジリっと後ろに下がる。

「兄様の真意が分かるやも知れぬな」
「恐らくは、今後の我々の行動を左右する結果となるでしょう」
「ほいたら、まずは後白河院を使うて交渉から入らないかんがぞ？」
何故か全てを悟っている様に龍馬が割って入ると、義経もニヤリと笑いながら言う。
「無論だ。我等が戦う先の目的が見えずして、命は賭けられぬ」
「結果…頼朝殿を裏切るかも知れんが、それでも良いがか…？」
龍馬は小声で義経に問いかける。
「どうあれ…我は侍大将である。誇りは失わぬ」

何が陰で動いているのか、この先彼らが何をしようとしているのか…。この時はその三人以外は誰も分かっていない。
そして、この一件が義盛・龍馬にとって途方も無い戦いの始まりになる事は、本人達ですら分かっていなかった。そして、その先に刻の意思と対峙する事も…。

一の谷の戦いは、源氏軍圧勝という結果と、先の暗雲が残る事となる。

福原陥落と捕虜（後書き）

感想など頂けたら、モチベーションと共にテンションも上がります。
よろしくお願いします。

戦の後の京

寿永三年二月、一の谷で平家を撃退した源氏軍は京に戻った。
鎌倉の頼朝より進軍を命ぜられていた彼等は、何故か義経の命無しに動きだす。その中心に居たのが範頼だった。
範頼は一の谷で討ち取った平家、名のある武将の首級を大通りに晒して行った。
三百年続く平安・京の町にこのような血生臭い光景が広がった事はかつて無い。しかし平家の圧政に耐えて来た京の民は喝采を送った。と同時に後白河法皇もそれに満足をしていた。いや、彼が満足をしていたのはその光景だけでは無く、捕虜として重衡を連れて戻った事も大きいだろう。

「義盛殿、これをいかが見るか？」
大通りを歩く弁慶が義盛に尋ねる。
「義経殿に対する威圧…でしょうね」
予想をしていなかった答えに、弁慶は足を止める。
「威圧と？　何故そのような事を？」
不意に足を止めた弁慶を、義盛は振り向き更に答える。
「お聞きになられてるでしょう。範頼殿には鎌倉から帰還の命が下り、義経殿には下っていない事」
「それは殿に、京に留まり平家を睨めとの意義があると思っておったが」
弁慶は目を細めて義盛を見つめる。
「では、重衡を鎌倉へ連れ行く事に関しては、如何読みますか？」
義盛の問い掛けに、弁慶は口を閉ざす。

一の谷の合戦後、範頼は京に戻りすぐさま鎌倉へ文を出した。その内容は自らの手柄ばかりを書き連ね、義経の事など何も記してい

なかったと伝わっている。

三月に入ったばかりの京。

あまりに凄惨な大通りをカラスが舞い、嘲笑うかのように京の民が生活を送る。その中で義盛は最悪の展開を口にする。

「頼朝公は義経殿の手柄を欲してなどいない…。そればかりか、その手柄など無視を決め込み、利用し、闇へと帰する心づもりやも知れませぬ」

「源家の棟梁…で、ござるか？」

「ええ。手柄を認め、このまま進軍を許せば、源家の家臣の心には次第に義経殿が入り込みます。事実、京の民は義経殿を神格化している者も出だしたとか」

義仲追放・討伐に加え、福原に鎮座していた平家を西方へと追放したのは義経であると、京の民は知っていた。だからこそ義経を英雄視し、この凄惨極まりない光景も受け入れていたのだ。

「棟梁は二人要らぬ…という事でござるか」

「恐らく義経殿は、そんな事をお気にされてもいない。何より源家復興、頼朝公への忠誠のみでございましょう」

「頼朝公は重衡を鎌倉に呼び、後白河法皇との駆け引きに使うおつもりか！」

「ええ…恐らくは、平家と神器を交渉する手段として、更に朝廷を操るおつもりやも知れませぬ」

「神器は天皇たる者が保有する物…。まさか、御自ら天子となる為に？」

「そこまでは考えては無い筈ですが、中枢へと上り詰める道具としか考えて無いと思います」

「それならば、何故神器奪還をしないのだ」

二人は再び、歩き始める。そう、後白河法皇から出ているのは『三種の神器奪還』の勅命。だが義経には伝わっていなかった。ならば最悪のケースとして、他の従軍者にのみ出されている可能性もある。

「……範頼殿か…！」

静かに、しかし腹の底から弁慶は声を絞り出した。

同じ頃、義経は与一・龍馬と共に京の屋敷に居た。

後白河法皇が在京中の義経の為にと用立ててくれた屋敷だ。そして、彼等はその屋敷で行われている舞を眺めていた。

「後白河法皇も、なかなか洒落がきいちゅうのぉ」

呑気に酒を呑みながら、愉快そうに眺めていた。

「坂本殿、我等は何故鎌倉に戻れぬのでしょうか」

舞を眺めてはいても、ソワソワと落ち付かない与一。当然である。彼はこんな生活を送った事は無く、初めて見る白拍子の舞に緊張すらしていた。

「何ち、与一殿はそげな事も分からんがか？　鎌倉殿は義経殿に、京の治安を守れっちゅう事を言うちょるがじゃ」

少し歳を重ねた白拍子は、美しく舞い、そしてその場に平伏した。

「おぉ、美しい舞いを見せてもろうたがじゃ」

龍馬はその場で手を叩き、褒めた。それに釣られて与一も拍手をしたが、義経はただ眉間にシワを刻み、その女を眺めていた。

「女、名を申せ」

その言葉に、白拍子は顔を少し上げて応える。

「磯禅師と申しまする」
「磯禅師よ、白拍子には神がかりな力があると聞くが、その方はどうだ？」
「只の舞いを生業とする者にございます」
再び頭を下げ、礼をする磯禅師。だが、続けて言葉を発した。
「ただ、法皇様が近々百の白拍子を集め、雨乞いの舞いを御所望とか。我が娘もその場に向かいまするが、そのような場には、神がかりな神通力を持った者も…」
「神通力と来たか！　そいつはエエ！見てみたいのぉ！」
龍馬は目を輝かせ、義経を見る。
義経はその視線に気付くと、苦笑いを浮かべながら答える。

「丁度…後白河院様より呼ばれておる…。兄上に無断で謁見等はできぬが、その舞いを見る事を口実に許されよう」
義経は一の谷より帰京後、度重なる謁見の催促が朝廷より届いていたが、断り続けていた。だが流石に法皇自らの申し出を何度もとこ悪訳にはいかず、この機に…と、思った。
だが、この判断が後に後白河・頼朝の対立の原因となり、義経の未来に影を落とす事となる。不運はこの時、義盛・弁慶が居なかった事。

京で、刻の渦が少しずつ巻き始める。

源家の欲の内

京の町、大通りを歩く義盛と弁慶はカラスを追い払いつつ細い路地へと折れた。
するとすぐに別の通りに出るが、そこには小さな屋敷の門が見える。義経に与えられた屋敷と比べると、明らかに目劣りする物ではあるが、それでもそれなりの物である。
門をくぐり弁慶が声をかける。
「範頼殿は居られまするか」
その声に反応するように、屋敷の奥でガタガタと小さな物音が響いた。だが誰も出て来ない。
「なるほど、随分と嫌われておる様ですな…」
ふふっと弁慶は笑いながら、隣に佇む義盛を眺める。
春の草木が庭に育ち、うっすらと暖かな陽が零れる日には似つかわしく無いカラスの鳴き声が、庭にも響く。

「伊勢義盛、武蔵坊弁慶で御座います。範頼殿は居られまするか」

義盛は名乗りつつ、腹の底から声を絞り出した。
流石に居留守もばれたと観念したか、奥からゆっくりと範頼の姿が見えて来た。

「な…何用じゃ」
この状況で二人は範頼が何か画策した事を確信した。
「鎌倉へのご帰還の儀に、義経公御自らご挨拶致す所ではございますが、天子様よりの御好意により屋敷を出られず、我らが代理として参上仕りました」
「さ…左様か、御苦労であったがもうよい、屋敷に戻られい」
「…範頼殿、今般は大役を一手にお受け頂き、義経公は感謝しき

りでございました」
「何？　大役と…？」
「神器奪還の失策と引き換えに、一人の平家家臣の身柄では、頼朝公も得心頂けるや分かり兼ねる故」
「ああ、良い良い。拙者が何とでも切りぬけて参る。策士は何も義盛殿だけに有らぬわ」
義盛と範頼の会話で、弁慶が高く笑った。

「何が可笑しいか、弁慶殿」
「神器奪還…で、ござるか」
弁慶の言葉に、範頼の顔は蒼白となった。
「おのれ、嵌めおったな…」
「さて、我等は何の事だか」
知らぬ振りを演じる二人を前に、範頼は一旦間を置き答える。
「うぬ……まあ良いわ。其の方等に申しておくが、義仲討伐然り、一の谷然り。義経殿を表に立てぬが利口ぞ」
「義経殿は鎌倉殿の実弟ではありませぬか…何をそこまで」
義盛の言葉に、範頼は被せる様に言い放つ。
「実弟では無い。が、その事よりも…上皇様と鎌倉殿の間に入れてはならぬのだ」
「手柄欲しさ…という言葉には聞こえませぬな」
弁慶のその言葉に、範頼は顔色を変えずに言う。
「我は河内源氏…棟梁にはなれぬが、義経公は違う。鎌倉殿に最も近く、警戒しておられるのだ」
「成る程…神器奪還を命じられぬ訳だ」
「故に、表に立たぬよう、帥らが目を付けて置く様にな」

義盛と弁慶は、暫く経った後に屋敷を後にした。

彼らが義経の屋敷から離れた理由はここにあった。
「何か企みがあるとお思いか？」
弁慶が大通りを帰りながら小声で囁く。
「立身出世でしょうね。無論、範頼殿の言葉に真実もあるでしょう。ですが奥州より来た弟と名乗る者が、突如頼朝公に絶大な信頼を得て、更に手柄を立て続けると、それまでの家臣始め、頼朝公の囲い込み連中が嫉妬をして当然」
「しかし天子様は義経公をたて、平家討伐へと向かわせたがるのでは？」
「いいえ、恐らくは京に留めるでしょう。上皇様も鎌倉殿との策謀戦は感づいておられる筈。更に武士に実権を握らせるなど、平家に続き義仲殿の一件で懲りておられる」
「義経公自身が武士でござるぞ？」
「義経公は偶像として京に留め置き、恐らくは何らかの名目の上で身動きを取れなくするのが、次の一手かと」
「そうなると、鎌倉殿と天子様、互いの利益に繋がる、か…」
弁慶は顎を撫でながら、目を閉じて考え込む。
「そして鎌倉殿は、新たな英雄を家臣に求める…」
義盛の言葉に、弁慶はハっとする。
「範頼殿か！」
「ええ、範頼殿もそこを狙い、恐らくは鎌倉殿へ手柄の報告をしている筈です。しかも義経公を良く思われない者も、少なからず居る筈ですからね」
義経在京、範頼帰還の裏を探る二人は、源家（げんけ）内部の影に迫っていた。しかしこの時、そこに第三の影の存在がある事に気付いてはいなかった。

陽も暮れかかった頃、弁慶・義盛は義経の屋敷へと戻った。
「どうじゃった、何か分かったかえ？」
「龍さん…何て格好をしてるんですか？」
そこに居たのは紛れも無く龍馬だが、白い衣に赤い袴を履いていた。が、明らかにサイズが足りていない。
「白拍子には男も居るが…坂本殿が舞っても、違う舞いになりそうでござるな」
「弁慶殿、それは可笑しな事を言う。ワシはこう見えてもよさこいは踊れるがじゃ」
そう言いながら、フラフラと腕を動かす。
「龍さん…誰も知らないよ」
義盛は手で顔を覆う様にしてうな垂れた。

「坂本殿、こちらは如何であったか？」
「ん？　あぁ…今度帝の元に、百人の白拍子が集まるがじゃ」
くるくると舞いながら、龍馬は無感情に言う。
「それが…何かあると？」
「義経公が、その白拍子の舞いを見に行かれるがじゃ」

「……帝の元へ？　義経殿が？？」
一瞬の沈黙の後、義盛と弁慶は驚愕した。まさかこの時期に義経と後白河上皇が合う事になるとは。二人は同じ事を感じ、驚いていた。
「それは止めておかねばならぬ…」
「ほ？　何でじゃ？　帝に謁見するち言うても舞いを見に行くだけじゃぞ？」
「それでも止めなければならぬ！」
龍馬と弁慶の問答の間、義盛は他の驚きを持っていた。

『白拍子…確か、義経の愛妾となる静御前も白拍子のはず』
そう、出逢わなければならぬ二人を出逢わせば、策謀の渦が加速する。しかしそれを拒否すれば刻そのものの流れが変わり、どうなるか見当も付かない。静御前は恐らく、その場に来るだろう。そうなれば史実通りに事が運ぶが、この先の策謀も…。

「どういたがじゃ、義盛殿？」
考え込む義盛に、龍馬が声をかける。
「いえ…義経殿は何処に？」
「白拍子に酌をさせちゅうが…この衣の主じゃ、どうじゃ、見事じゃろう」
飄々と笑って舞っている龍馬を無視し、部屋を移る義盛。残された龍馬と弁慶。
「…弁慶殿…良かったら、ワシが伽でもしちゃろうか？」
「…戯言を申すな…」

真実を告げず、歴史を告げず、そして刻を曲げずに歴史を動かす。
義経が義経であり続ける歴史を紡ぎながら。

静と磯禅師

京に構えられた義経の屋敷は、随分と立派な物だった。
門をくぐり屋敷に入ると、長い廊下が屋敷をぐるりと囲むように敷かれ、一番手前に客間として龍馬と弁慶が戯れていた。勿論義盛も普段はそこに居る訳だが、今は白拍子に酌をさせている義経を訪ねる為、奥の間に向かっていた。
右手には立派な白砂の庭が見える。恐らくはここで舞いを舞っていたのだろう。今は既に砂を整備し、元通りの美しい文様が描かれている。
その更に奥に進み、屋敷の裏まで来た所で、義経は庭を眺めて酒を呑んでいた。

「殿、失礼いたします」
義盛は廊下に片膝を突き、頭を下げる。
「義盛殿か…何かあり申したか？」
義経の穏やかな声に、ゆっくりと頭を上げると、義経の隣には美しい女性が座っていた。恐らくこの女性が白拍子だろう。その推測は簡単であり、それ以外で有る筈も無いのだから。
「怖れながら、朝廷に赴き上皇様に謁見されると伺いましたが？」
義盛はチラリと白拍子を見る。どうやら彼女はそのような話には興味を示さず、義経の杯に酒を満たして行くだけの素振りを見せる。
「謁見するかどうかは決めておらぬ。成り行きに任せようと思うておるが？」
「今、鎌倉殿の許しなく謁見をするのは危険かと存じますが…」
「兄上の許可なく、朝廷での謁見は許される物では無い…事くらい理解しておるつもりだ」
くいっと盃を傾けて酒を煽る義経。
「ならば自重下さいませんか？」

「鎌倉へ戻る事を許されず、兄上からの言葉は京にて留まり守護に就けの一言…。が、上皇様はこの義経を認め下さった上に、参内せよとのお言葉までお掛け下さる」
「今、朝廷に近付けば、源家として主従が崩れてしまいます」
「何…白拍子百名の舞いを見に参るだけだ。その先は兄上も何も申すまい」
楽天家…感情で動く悪い癖。こうなったら義経は聞かないだろう。
『しまった！　義経という男を見誤った！』
後悔が一瞬義盛を襲ったが、すぐに別の感情がそれをかき消す。
『…義盛という存在が居なくても、義経はこう動いただろう…ならば任せるのも方法としてはあるか』

「我が娘…静も帝の前で舞いを行いまするが、何か娘で役立てるようであれば、何なりと…」
義経の傍らに座る白拍子が義盛に問いかける。その表情は柔らかく笑っている様に見えた。
「…え？　静…？」
「はい。我が娘、静にござりまする」
磯禅師（いそのぜんし）。その白拍子は、後の義経の愛妾となる静御前の母親であった。
しかし義盛は、その彼女の表情に何かを感じ取った。
「静殿はここに呼べますか？」
不意の言葉に、義経は眼を丸くする。
「屋敷の外に待たせております故、時を頂ければすぐにでも」
磯禅師はこうなる事を知っていたかのように微笑み、義経に視線

を移す。
酌をさせていても見せなかったその笑顔に、義経も何かを感じた様子であり、小さく頷き酒を呑む。
恭しく(うやうや)両手を付き頭を下げ、部屋を後にする磯禅師の姿を、二人は目で追いかけていた。

「義盛殿。また何か策を閃いたようだな。しかし…白拍子を使った策など、どうしようと言うのだ？」
「まだ明かせませぬ」
義盛はニヤッと笑い義経を見ると、それを怪しく笑い返す様に見つめながら返す。
「ひとつだけ、我は権力は望まぬ。ただひたすらに父の…一門の復興こそが望みぞ」
「心得ております。御父上の仇、一門復興の為に一手を打ちまする」
だがこの時に義盛は悟った。
義経と頼朝が見ている物が違うと。

頼朝は源家復興の為に中央政権に寄り、更なる権力を求め『神器争奪』に野望を抱き、義経はただひたすらに平家討伐後に源家再建のみを見ている。両者が見ている物は似ているが別の物。似ているだけに交わる事ができない。ならば採るべき方法はこれしかない。

「お待たせを致し、申し訳ございませぬ」
磯禅師が戻って来た。
その背後には黒髪の美しい女性が両手を付き、頭を下げている。
「静とやら、面を上げて頂こう」
義経は人懐っこく笑みを浮かべると、その言葉に反応し、ゆっく

りと頭を上げる静。
「これは驚いた…母上とそっくりではないか。美しい…」
義経は感嘆の息を吐いた。
色白で切れ長の目、紅が映える口元…。それ故に黒髪が良く似合う美女。義経は完全に見惚れていた。
「さて…磯禅師殿、静殿を我等源氏に預けては頂けぬか？」
義盛はいきなり核心から話しだした。これに面食らったのは他でも無い義経だった。
「よ、義盛殿！　唐突に何を申しておるのか！」
「殿…白拍子とは男装した巫女の舞を舞う者。神憑りな力を持つとされております。それ故に帝も、雨乞いと称して百もの白拍子を集められたのでしょう」
「それはそうだが…」
「鬼神、修羅に愛でられし軍師と、神憑りな白拍子が義経殿に従っているとなれば…平家は元より、源家内部の反義経への圧力が掛けられまする」
「だが、白拍子に神憑っておるなどとは、誰も信じぬぞ」
そう、白拍子と言えど、この時代の彼女達（男性の白拍子も居たが）は、舞いを見せ、酌をし、時によっては一夜の伽の相手をするのが主流となっていた。

「雨は降りまする」

そう発したのは、磯禅師だった。

「何と？　静殿には神の力があると申すか！？」
そう問うたのは義経だった。
「さあ…。ですが近い日に雨は降りまする。その思いがあるからこそ、帝に『雨乞いの舞』を申し出たのでありまする」
「其の方が進言をしたと申すか！」

「はい。奥州より天狗が舞い降り、厄災を討ち払う。人の噂ではございますが、昨夏より続く飢饉に雨が降る事は確実にございます」
「天気予報…か。根拠はありますか？」
「西より濡れた風が吹き、南より乾いた風が吹く。こういう時は雨が降り易うございます故」
「それで、何故に義経殿に近付いたのです？」
義盛の問い掛けに、磯禅師は義盛を見る。
「鬼神に愛されし、刻の人…。そなた様をお待ち申しておりました」

背中が凍る思いがした。磯禅師は正体を知っている…刻を超える存在を知っている。

「まさか…そなたも…？」
義盛も顔からは、粘りのある汗が流れる。春だと言うのに背中は寒く、顔は暑い。だが磯禅師は無情にも頭を左右に振り、笑顔で答える。
「否…。しかしながら、静を義盛殿にお預けする事こそが、私の宿命にございまする」

刻を支配する者が、俺を知っている。それ所か完全に操られている。
この時代に飛び、『伊勢義盛』を名乗ったのも必然であると知らされたのだ。ならば幕末で自らの意思でとった行動は意思の範疇を超え、操られていた事になる。
「敵か味方か…」
無意識に口から出た言葉は、義経には届かなかった。

「つまり、静殿が義盛殿に嫁ぐという事か」
そう言ったのは、少し残念そうな義経。それもそうだ、それでは話しが変わって来る。
「そ…それは困ります！」
はっとした義盛は全力で否定すると、今度は静が寂しそうな目で俯く。これはどうした物か…。
できる事なら、この二人をここで出逢わせ、そのまま史実通りに愛妾とし、帝に謁見する事になれば条件を出して謁見を受ける…という算段をと思っていた。だが実の所はどうだ。完全に史実が曲がり掛けている。磯禅師に先に会い、この流れを仕組んだ何者かが、刻を変えよと挑んで来ているように感じる。

「入れ替えればエエがじゃ」

頓狂な声が部屋の入口から聞こえる。言わずと知れた龍馬の声だ。
龍馬は勝手にズカズカ入り込み、磯禅師の隣に座りこむ。

「坂本殿、誰と、誰が入れ変わるのだ？」
「ん？　義経殿と、義盛殿じゃが？」
「そんな…できる訳がないでしょう！」
義盛は慌てて止めに掛かるが、義経はなにら楽しそうに、龍馬を覗きこむように尋ねる。
「聞かせて頂こうか、坂本殿」
「よし、エエがか…？」
龍馬は咳払いをした後、ゆっくりと話しだす。
「義経殿の噂は、既に京の町中に知れ渡っちゅうが、その姿形は全くの謎っちゅう事じゃ。戦の最中も名乗ったりしとらんきの」
「鎌倉殿はご存じですよ！」
義盛は反論するが、龍馬はさらっといなす。
「鎌倉に戻らんがじゃろ？　関係無いがじゃ。で、上皇様に謁見

するがは義盛殿、戦の指揮は義経殿、幸い、上皇様は義経殿の顔は知らんがじゃろ」
「そうなると、私が義経殿と認知されてしまいますよ！」
「朝廷内ではの。じゃが源家はみな義経殿を知っちゅう。ここで義経っちゅう存在は二人で一人にしてしまうがじゃ」
「無茶苦茶だ…上手く行く訳が無い…」
義盛は深いため息を吐く。この男の思考は奇抜すぎて収まる所が果てしない。

「いえ、そうとも限りませぬ」

細い、始めて聞く声が耳に入った。
今まで沈黙を守っていた静だった。

「この生業は、様々な事柄が耳に入ります故…事情はお分かり致します。されば義盛殿が義経殿の業をお受けになられるも、家臣としての役目かと存じます」
「業を…受ける…？」
「謁見を鎌倉殿が御認めにならぬのであれば、影を立てたと怒りを鎮めさせれば宜しいかと」
「……帝を出し抜こうとする鎌倉殿は、赤の他人を宮内に上げた事を笑い物にする…？」
「それを帝にお伝えする程、鎌倉殿は先の読めぬお人では無いかと」
「成る程…機を見て本物の義経殿を表舞台に出す…と、言う事ですか」

しばらくの沈黙が部屋を支配する。

「いや、その時は朝廷を敵に回してしまいます！」

当然と言えば当然。平然と騙し続けた義経を朝廷は許さないだろう。そればかりか源家の血も絶えかねない。そうなれば頼朝はあっさりと義経を切り捨てるだろう。
「そこを何とかするがは、軍師であるおまんじゃろ、義盛殿」
龍馬は大きく笑いながら、膝をポンポンと叩く。

結果として、頼朝は義経を許さない。朝廷も義経を怖れる事になるだろう…。両者がある時期で結託し、討伐に向かう史実は、確かにあった。と…義盛は記憶している。
『ならばここでその布石を敷くのが利口か？』
勢いで盛り上がった者達は、最早収集が付かない。その様をじっと見つめているのは白拍子二人。

「なるほど…」
深く長考していた義盛は、ぐっと胸を張り静を見る。
「その話し、半分は乗りましょう」
「半分じゃと？」
「ええ、しかし入れ変わりはしません。殿は殿、義盛は変わらず義盛にあります」
「それでは乗っておらぬではないか」
義経は面白い策を期待していたのだろうが、残念そうに手酌で酒を注ぐ。
「入れ変わる事無く、鎌倉殿の裏をかき帝を納得して御覧にさしあげましょう」
「そんな事ができると？」
義経は不思議そうに義盛を見る。
「はい。謁見は私が参ります。殿は白拍子の舞をご堪能頂ければ、全てが良き様に」
「ほいで、義盛殿は白拍子を娶るっちゅう事じゃな？」

「…後に義経、と呼ばれる者に愛されるでしょう…」

義盛はニヤッと笑い静を見る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3683s/

清和の王

2012年1月13日17時58分発行